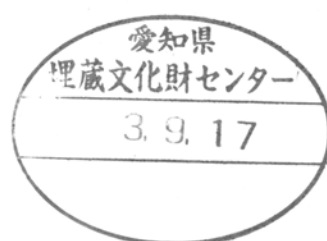


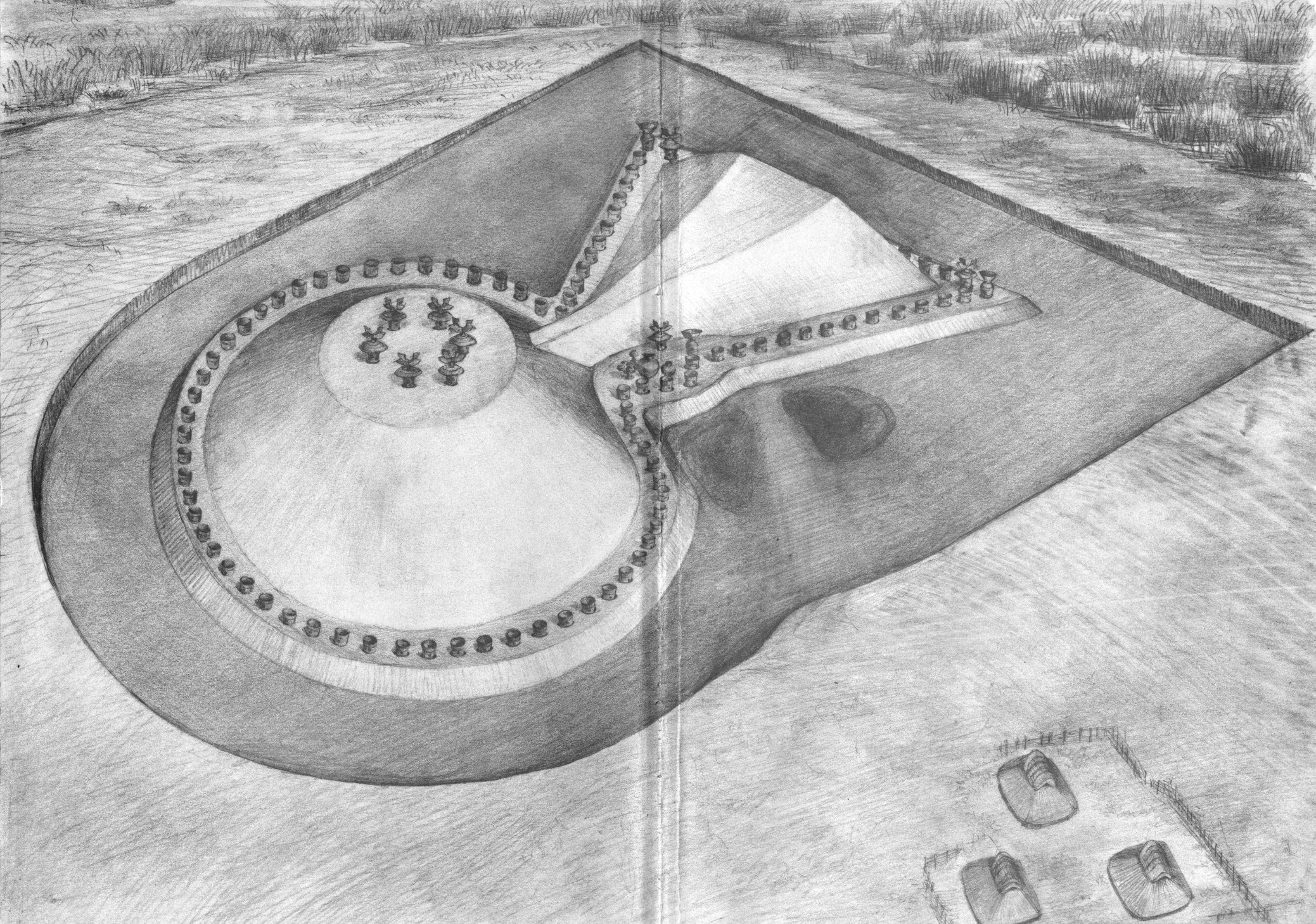
愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第24集

いけ した こ ふん
池 下 古 墳

1991

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター







1. 池下古墳全景



2. 池下古墳後部土層推積状況



3. 池下古墳前方部土層推積状況

序

名古屋市の北東部に位置している守山区は、庄内川と矢田川の流れに挟まれた緑豊かな丘陵が連なる、二百万都市名古屋市民のオアシスともいえるべき地域であります。この地には、今より一万年以上も前から人が住み始め、以来、連綿と現在に至るまで、人々の活動のあとが各所に残されております。特に、古墳時代には、名古屋市最高所である東谷山のふもとに県下最大の群集墳が営まれたのをはじめ、志段味地区や小幡地区には数多くの古墳が築かれました。

池下古墳はこの小幡地区に造られた、古墳時代中頃の前方後円墳であります。近年まで、その周辺には長塚古墳や茶臼山古墳、その他いくつかの小古墳が残り、小幡古墳群として、長年にわたり、守山の人々の心のよりどころとなっておりましたが、現在では、宅地化によって小古墳は消滅し、池下古墳や茶臼山古墳も相次いでその姿を消すことになりました。

今回の池下古墳の発掘調査は、名古屋環状二号線建設の事前調査として行われ、前方後円墳の築造過程を明らかにするなど、多くの成果をあげることができました。本書に掲載しておりますこれらの調査結果は、学術的にも重要なものとして、地域の歴史研究に利用され、ひいては埋蔵文化財の保護につながることを願ってやみません。

最後になりましたが、この池下古墳の現地調査および報告書作成に御協力いただいた、関係諸機関ならびに地元の方々に厚く御礼申し上げる次第であります。

平成3年3月

財団法人愛知埋蔵文化財センター理事長

松川 誠次

目 次

第1章 序章

- 1 調査にいたる経過と経緯……………(真鍋雅治)・1
- 2 位置と環境……………(樋上昇)・2
- 3 過去の調査の概要……………4

第2章 池下古墳の遺構と遺物

- 1 遺構……………6
 - (1) 墳丘……………6
 - (2) 周濠……………14
- 2 出土遺物……………16
 - (1) 須恵器……………16
 - (2) 埴輪……………(赤塚次郎)・21
 - (3) 鉄製品……………(樋上)・26

第3章 その他の遺構

- 1 池下南古墳……………27
- 2 近世の遺構……………27

第4章 自然科学的分析

- 1 池下古墳の石組排水溝の使用石材……………(森勇一・永草康次)・28
- 2 池下古墳墳丘中の黒色土について……………29

第5章 考察

- 1 尾張型埴輪について……………(赤塚)・34
- 2 池下古墳の埋葬施設とその系譜について……………(樋上)・51
- 3 池下古墳墳丘築造過程の復元……………61

第6章 まとめ……………66

出土遺物観察表……………67

図版目次

図版 1	池下古墳遺構図(1:200)
図版 2	池下南古墳遺構図(1:200)
図版 3	池下古墳航空写真
図版 4	小幡古墳群全景・池下古墳調査前状況
図版 5	池下古墳全景
図版 6	墳丘主軸土層堆積状況
図版 7	前方部横断土層堆積状況
図版 8	後円部墓道土層堆積状況・後円部埋葬施設前庭部・後円部石組排水溝
図版 9	くびれ部造り出し埴輪抜き取り穴・前方部埴輪抜き取り穴
図版10	陸橋部全景・陸橋部近景
図版11	墳丘北側周濠内近世遺構群・墳丘西側近世遺構群
図版12	墳丘東側周濠・墳丘南東側周濠
図版13	池下南古墳全景・池下南古墳陸橋部
図版14	前方部北西隅近世ピット群・出土須恵器
図版15	出土埴輪

巻頭図版

巻頭図版 1	池下古墳全景
巻頭図版 2	後円部土層堆積状況
巻頭図版 3	前方部土層堆積状況

表

表 1 表	池下古墳分析試料分析結果……………30
表 2 表	植物珪酸体と気候帯との関係……………31
表 3 表	尾張型埴輪出土地一覧……………47

挿図目次

第 1 図	調査参加者一同……………1
第 2 図	池下古墳と周辺の遺跡(1:25,000)……………3
第 3 図	1966年度調査遺構図(1:200)……………5
第 4 図	池下古墳調査前墳丘測量図(1:200)……………7
第 5 図	石組排水溝実測図(1:40)……………8
第 6 図	池下古墳・池下南古墳主要遺構図(1:400)……………9
第 7 図	墳丘主軸土層断面図(1:40)……………10・11
第 8 図	後円部・前方部横断土層断面図(1:40)……………12
第 9 図	前方部埴輪出土状態図(1:40)……………13
第10図	周濠内堆積土基本層序(1:40)……………14
第11図	くびれ部造り出し・陸橋部実測図(1:100)……………15
第12図	1966年度出土須恵器実測図(1:4)……………17
第13図	1966年度出土須恵器実測図(1:8・1:4)……………18
第14図	1989年度出土須恵器実測図(1:4)……………20
第15図	1989年度出土埴輪実測図 1(1:4)……………22
第16図	1989年度出土埴輪実測図 2(1:3)……………23
第17図	1966年度出土埴輪実測図 1(1:6)……………24
第18図	1966年度出土埴輪実測図 2(1:6)、拓影(1:4)……………25
第19図	1966年度出土鉄製品実測図(1:2)……………26
第20図	池下古墳石組排水溝の使用石材……………28
第21図	池下古墳分析試料模式柱状図……………29
第22図	池下古墳分析試料中の珪質微化石……………33
第23図	形態・味美技法……………39
第24図	タテハケ系埴輪……………40
第25図	B種ヨコハケ・タテハケ系埴輪……………41
第26図	Ⅲ期……………42
第27図	Ⅲ-3・Ⅳ-1期尾張型埴輪……………43
第28図	味美二子山古墳出土埴輪……………44
第29図	断夫山古墳出土円筒形埴輪……………45
第30図	Ⅳ-2・3期……………46
第31図	Ⅳ-3期……………47
第32図	須恵器系埴輪の分布……………47
第33図	窖窯焼成埴輪の変遷……………48・49
第34図	5世紀後半の横穴式石室実測図(1:80)……………54
第35図	5世紀末の横穴式石室実測図 1(1:80・1:120)……………55
第36図	5世紀末の横穴式石室実測図 2(1:80)……………57
第37図	茶臼山古墳・東谷山 4 号墳・市尾墓山古墳横穴式石室実測図(1:120)……………59
第38図	池下古墳築造過程模式図 1……………63
第39図	池下古墳築造過程模式図 2……………64
第40図	池下古墳完成状態想像図……………65

例 言

1. 本書は、愛知県名古屋市守山区大字小幡字池下2827番地に所在する池下古墳（『愛知県遺跡分布地図（Ⅰ）尾張編』による遺跡番号01-1137）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、名古屋環状2号線（一般国道302号）建設にともなう事前調査として、愛知県教育委員会を通じ、建設省及び日本道路公団からの委託を受けて、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、昭和63（1988）年11月から平成元（1989）年11月までである。
4. 調査に際しては、次の各機関の御指導・御協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・建設省愛知国道工事事務所・日本道路公団名古屋建設局・名古屋市教育委員会・名古屋市博物館・名古屋市見晴台考古資料館
5. 発掘調査は、真鍋雅治・赤塚次郎・樋上昇が担当し、神谷友和・松原隆治・岡田智子・西沢英樹・水野弘子の助力を得た。
6. 発掘調査にあたっては、次の方々の御助力を得た。

川津和人・竹内剛・中川佐知子・服部珠美・服部泰子・山中鹿次（以上、学生）、跡部広子・阿部加津子・猪飼貴美枝・五十棲豊子・市岡清美・井土宇人・稲垣冴子・稲垣路子・小川鉦子・小原洋子・加藤幸代・上村淑子・香田敬子・上月登志子・小武初枝・近藤しげ子・近藤敏夫・近藤友恵・斎藤ひろ子・塩見早智代・柴山久実子・清水善吉・竹川みゆき・戸川真理・西村浩二・橋本智代・林和子・林保子・比良末子・深田美智子・本多歌子・本多博志・榊川浩子・松井志満子・松原二枝・宮石千津子・山田のぶよ・若尾武司（50音順、敬称略）
7. 遺物の整理、製図などについては、次の方々の御協力を得た。

長谷川恵子・多田富代・玉作美智子・服部智子・山口妙子
8. 本書の執筆は、第1章1を真鍋雅治、第2章2(2)・第5章1を赤塚次郎、第4章を森勇一・永草康次、他は樋上昇が行い、編集は樋上が担当した。
9. 現地調査ならびに報告書作成については、次の方々に御教示・御協力を賜った。

安達厚三・市橋芳則・伊藤厚史・伊藤久美子・伊藤達也・伊藤正人・犬塚康博・井上光夫・梅田純代・大下武・梶山勝・加納俊介・川崎みどり・木村有作・柴垣勇夫・鈴木敏則・千田嘉博・七原恵史・檜崎彰一・野口哲也・野澤則幸・服部哲也・林部均・日野幸治・平出紀男・北條献示・吉村和昭（50音順、敬称略）
10. 調査区の座標は、建設省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠した。
11. 出土遺物および調査記録などの資料は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

第1章 序 章

1. 調査にいたる経緯と調査の経過

池下古墳は名古屋市守山区に所在する全長約45mの前方後円墳である。昭和初年の道路建設により後円部の大半が破壊され、前方部と後円部の一部を残すのみとなっていた。その後、1966年に久永春男・七原恵史氏らによって、この残存する墳丘の部分的な発掘調査が行われた。

今回の調査は、名古屋環状2号線（一般国道302号線）建設にともない、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが、愛知県教育委員会を通じ、建設省及び日本道路公団からの委託を受けて実施したもので、1988年度と1989年度に、池下古墳の墳丘・周濠のほぼ全域と池下南古墳を発掘した。

1988年度の調査は、1988年11月25日から1989年3月20日まで、池下古墳の東南に接する区域（面積1675㎡）を3ヶ所に分けて（63A～C区）発掘した。その結果、A区では削平された池下古墳の後円部の一部、B区では後円部東側の周濠の一部、そしてC区では直径19.5mの円墳（池下南古墳）を検出した。

1989年度の調査は、1989年4月4日から同年11月6日まで、残存している池下古墳の前方部と後円部・周濠の一部（89A区、面積1379㎡）を発掘した。そして、後円部では埋葬施設にともなう石組排水溝と墓道を、周濠内ではくびれ部造り出し付近で陸橋部を検出した。また、8月5日には調査成果を公表するために現地説明会を催し、250人余りの参加者を得た。

出土遺物の整理は、洗浄・注記などの第1次整理を、発掘調査と併行して現場事務所で行い、現地調査終了後は、1990年8月から、愛知県埋蔵文化財調査センターにて引き続き、報告書刊行までの作業を行った。



第1図 調査参加者一同

2. 位置と環境 (第2図、図版4)

池下古墳は名古屋市守山区大字小幡字池下2827番地に所在する。守山区は名古屋市北東部の一角を占めている。北は庄内川をへだてて春日井市に、東は尾張旭市と瀬戸市に接し、南は矢田川を境に千種区と分たれており、北東から南西にのびる細長いかたちをしている。その北東端に位置する標高198.3mの東谷山から派生する標高100m前後の丘陵が、守山区のほぼ中央を南西方向に背骨のようにのび、庄内川と矢田川の合流地点で尽きている。守山区はこの丘陵によって、庄内川に面する志段味・吉根地区と矢田川に面する小幡・大森地区に分かれる。

志段味地区には名古屋市域で最古の前方後円墳である白鳥塚古墳¹⁾ (全長109m) をはじめとして、5世紀後半から6世紀前半には、志段味大塚古墳²⁾ (51.5m) ・東大久手古墳³⁾ (38m) ・西大久手古墳⁴⁾ (37m) ・勝手塚古墳⁵⁾ (53m) などの帆立貝前方後円墳が近接して築かれている。6世紀後半以降は県下最大の群集墳である東谷山古墳群⁶⁾ や名古屋市内で唯一完全な横穴式石室が確認できる白鳥1号墳⁷⁾ などが築造され、吉根地区では5～6世紀にかけて笹ヶ根⁸⁾ ・松ヶ洞⁹⁾ ・川東山¹⁰⁾ ・東禅寺¹¹⁾ などの古墳群が築かれる。

小幡地区には丘陵の南から西にかけて、小幡ヶ原と呼ばれる台地がひろがっている。その小幡ヶ原には縄文時代晩期の住居跡と墓域が確認されている牛牧遺跡¹²⁾ や、弥生時代中期と古墳時代後期の墓域である牛牧離れ松遺跡¹³⁾ がある。小幡ヶ原の西部には、4世紀後半の守山白山古墳¹⁴⁾ (95m)、6世紀前半の守山瓢箪山古墳¹⁵⁾ (63m) などの前方後円墳や、小幡南島古墳¹⁴⁾ (33m) などの円墳がある。小幡ヶ原東部の丘陵南麓には、5世紀末から6世紀前半にかけて造られた、池下古墳・長塚古墳¹⁶⁾ (81m) ・茶臼山古墳¹⁷⁾ (60m) の3基の前方後円墳や中小の円墳からなる小幡古墳群があり、6世紀後半には横穴式石室を埋葬主体とする小幡古墳¹⁸⁾ が築かれている。飛鳥～奈良時代には、瓢箪山古墳に近接した地域に小幡廃寺¹⁴⁾ が造営され、小幡緑地公園内では火葬墓¹⁴⁾ が見つかっている。

註1. 愛知県教育委員会『重要遺跡指定促進調査報告』 1974

2. 加藤安信「志段味大塚古墳」『愛知県重要遺跡指定促進調査報告Ⅶ』 愛知県教育委員会 1983

3. 伊藤稔「東大久手古墳」『愛知県重要遺跡指定促進調査報告Ⅶ』 愛知県教育委員会 1983

4. 伊藤稔「西大久手古墳」『愛知県重要遺跡指定促進調査報告Ⅶ』 愛知県教育委員会 1983

5. 愛知県教育委員会『重要遺跡指定促進調査報告』 1974

6. 久永春男ほか「東谷古墳群の調査」『守山の古墳 調査報告第二』 名古屋市教育委員会 1966

7. 田中稔ほか「白鳥1号墳の調査」『守山の古墳』 守山市教育委員会 1963

8. 名古屋市教育委員会『笹ヶ根古墳群発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告XⅣ 1984

9. 久永春男ほか「松ヶ洞古墳群の調査」『守山の古墳 調査報告第一』 名古屋市教育委員会 1966

10. 久永春男ほか「川東山古墳群の調査」『守山の古墳 調査報告第一』 名古屋市教育委員会 1966

11. 愛知教育委員会『東名高速道路関係遺跡第1次・第2次調査概要』 1965

12. 久永春男ほか『牛牧遺跡』 守山市教育委員会 1961

13. 久永春男ほか「牛牧離れ松集落址」『守山の古墳 調査報告第二』 名古屋市教育委員会 1969

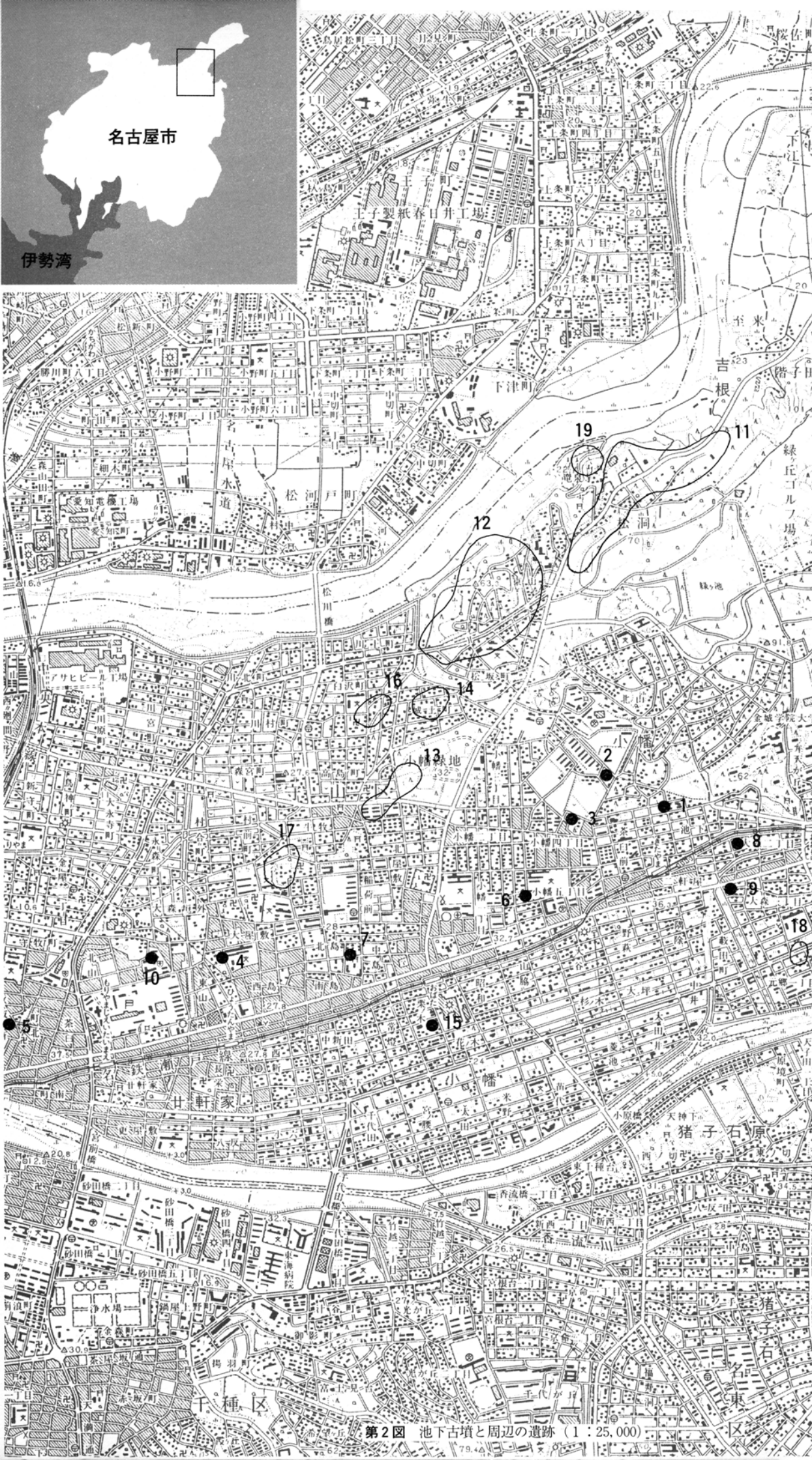
14. 名古屋市博物館『守山の遺跡と遺物』 1984

15. 荻野繁春「守山瓢箪山古墳」『愛知県重要遺跡指定促進調査報告Ⅵ』 愛知県教育委員会 1981

16. 加藤安信「長塚古墳」『愛知県重要遺跡指定促進調査報告Ⅶ』 愛知県教育委員会 1983

17. 名古屋市教育委員会『茶臼山古墳』 1990

18. 七原恵史ほか「小幡古墳発掘調査報告書」名古屋市文化財調査報告Ⅷ 1980



- 1 池下古墳
- 2 茶臼山古墳
- 3 長塚古墳
- 4 瓢箪山古墳
- 5 守山白山古墳
- 6 小幡古墳
- 7 小幡南島古墳
- 8 大森大塚古墳
- 9 先生塚古墳
- 10 町北古墳
- 11 松ヶ洞古墳群
- 12 川東山古墳群
- 13 牛牧遺跡
- 14 牛牧離レ松遺跡
- 15 小幡廃寺
- 16 川村北・南城跡
- 17 小幡城跡
(西城遺跡)
- 18 大森城跡
- 19 竜泉寺城跡

国土地理院発行
1:25,000地形図
名古屋北部を使用

第2図 池下古墳と周辺の遺跡 (1:25,000)

3. 過去の調査の概要（第3図）

池下古墳は、古くからその存在が知られており、1936年に出版された『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』の第14冊に、小栗鉄次郎氏によって報告がなされている¹⁾。こののち、道路建設によって後円部が破壊されたが、1944年頃にはまだ後円部の断面に埋葬施設にかかわる人頭大の石が多数遺存していたようである。その後、この地が名古屋環状2号線の建設予定地に決定し、1966年には久永春男・七原恵史氏らによって発掘調査が行われた。その概要は1969年に刊行された『守山の古墳 調査報告第二』に収められている²⁾。

この調査は3月17日から6月19日までのほぼ3ヶ月間におよんだが、墳丘主軸・後円部・くびれ部・前方部・墳丘裾の各所にトレンチを入れるにとどまり、墳丘・周濠の全面発掘にはいたらなかった。それでも次に述べるような多大な成果をあげることができた。

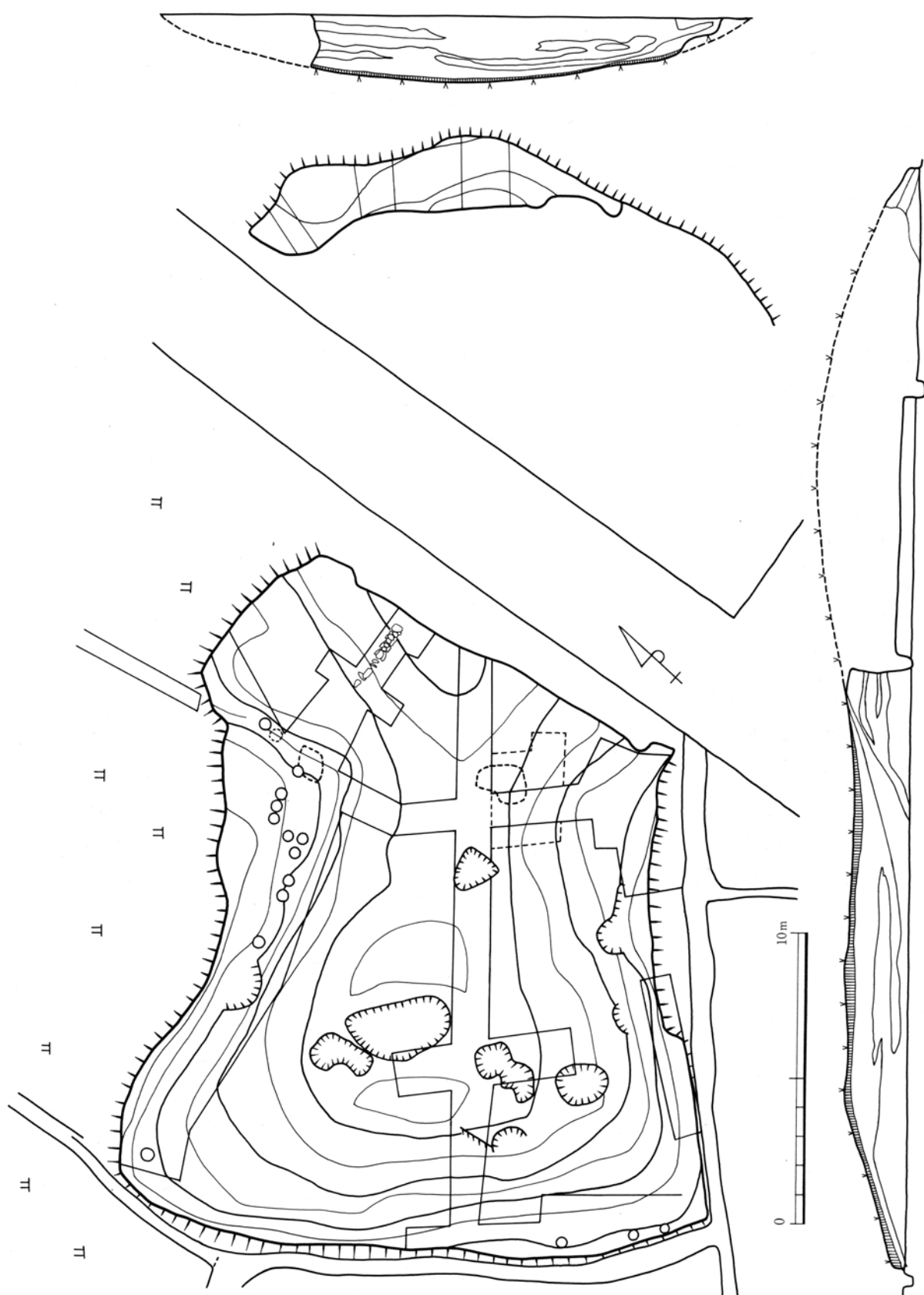
まず、墳丘裾のトレンチにより、墳丘の北側および西側に断続的にはあるが、円筒埴輪列が遺存していることが判明した。また、くびれ部の北側には円筒形・朝顔形・蓋形埴輪によって区画された造り出しがあり、その内側で須恵器の大型甕・大型壺・脚付七連蓋杯・高杯が鉄鏃・叉状鉄製品と共に集中して出土し、ここで墓前祭祀が行われたことをうかがわせた。くびれ部北側から後円部中央にかけてトレンチでは埋葬施設にかかわると思われる石組の排水溝が検出されている。墳丘主軸トレンチではくびれ部の墳頂で割石を「L」字状に敷きつめた遺構と多くの円筒埴輪片が見つかった。

主軸トレンチや後円部の土層断面の観察により、まず後円部を特定の高さまで盛土した後、埋葬施設を築き、それにさらに盛土を施して、前方部をつくりあげたとする、墳丘の築造過程が復元された。墳丘規模は全長が40m、後円部は直径が25mで高さは3m、前方部は幅が20mで高さは2.5mと推定している。後円部の調査結果から、埋葬施設は礫礫か礫積み竪穴式石室であった可能性が指摘された。

この古墳の築造時期は古墳時代中期後半で、小幡古墳群のなかでは丘陵上に立地する茶臼山古墳より後に、長塚古墳とほぼ並行して築かれたとしている。そして系譜上では、墳丘規模が茶臼山古墳や長塚古墳に比べて格段に劣る点から小幡古墳群の主流ではなく、傍流にあたるものと結論づけている。

註1. 小栗鉄次郎「東春日井郡守山町大字小幡池下古墳」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』第14冊 1936

2. 久永春男・七原恵史「池下古墳」『守山の古墳 調査報告第二』名古屋市教育局委員会 1969



第3図 1966年度調査遺構図 (1:200)

第2章 池下古墳の遺構と遺物

1. 遺構

(1) 墳丘

A. 立地・墳形・規模（第4・6図、図版3～5） 名古屋市守山区は、名古屋市内最高所の東谷山（標高198.3m）から南西方向にのびる、標高100m前後の丘陵によって南北に分断されている。この丘陵の南西側には小幡ヶ原と呼ばれる標高約38mの洪積台地がひろがっており、池下古墳は丘陵から台地に向かって張り出してくるきわめて低平な尾根の先端に、尾根の方向と直交するように、墳丘の主軸を設定して（S-40°-W）築かれている。この古墳は二段築成の前方後円墳で、後円部を北東に向けている。

後円部の東半分がすでに破壊され、現在は遺存していないために正確な墳丘規模は出し得ないが、今回の調査で検出した地山面における計測値は、全長が約45mで、後円部の径は約32m、前方部の幅は27.8mで、前方部の端は中央が弧状にふくらむ。現状での墳高は地山面から後円部で2.58m、前方部で2.36mをはかる。

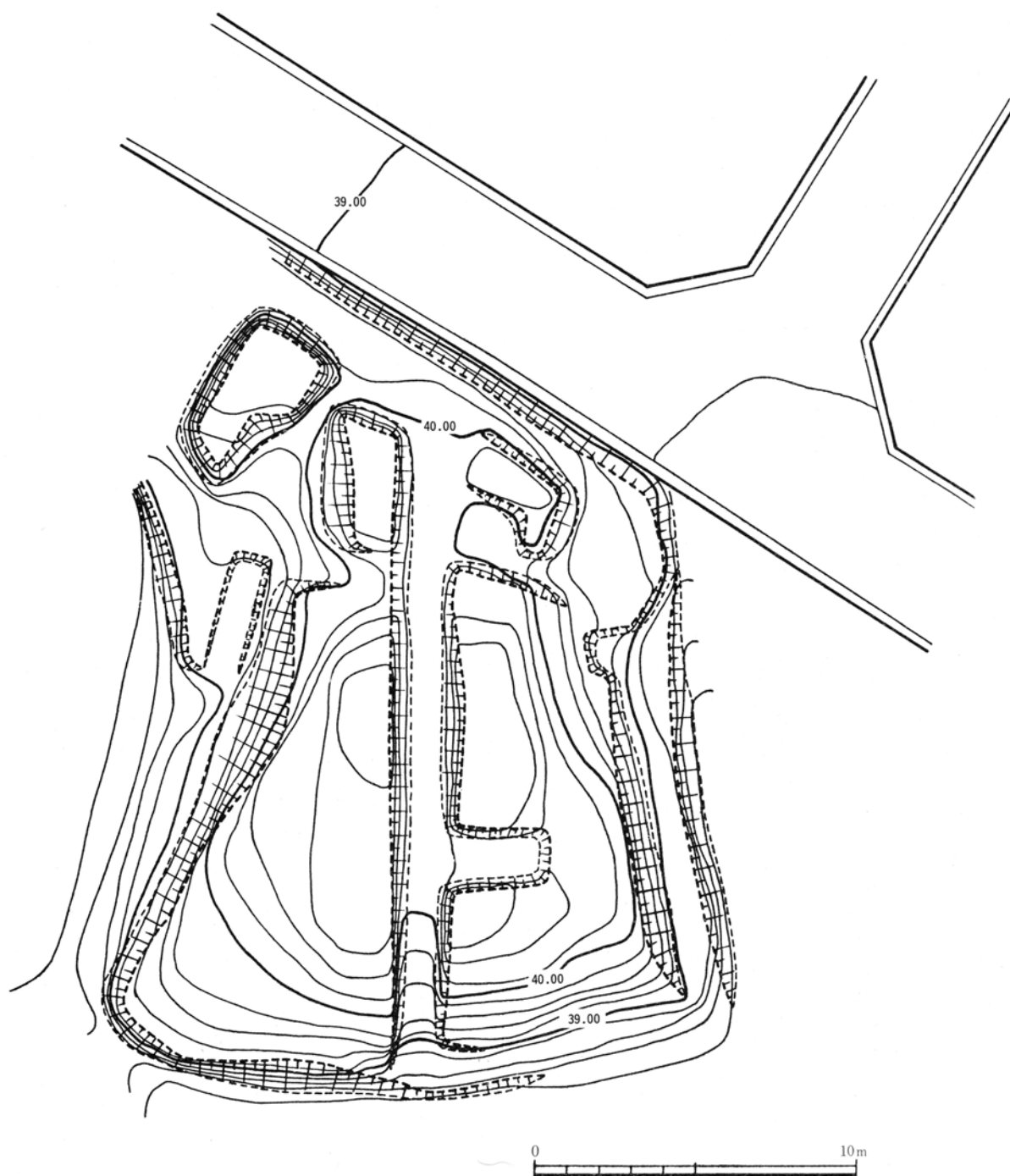
B. 築成状況（第7・8図、図版6～8） 1966年度に行われた発掘調査では、墳丘の主軸・前方部の横断面・くびれ部の横断面にトレンチを入れ、報告書には墳丘主軸と後円部の横断面の土層図が掲載されていた。今回の調査ではこれらのトレンチをさらに地山面まで掘り下げて、墳丘主軸と後円部・前方部の横断面の詳細な土層図を作成した。これらをもとに、墳丘の築成状況の概略を次に述べる。

墳丘の盛土には基本的に3種類の土を用いており、それが墳丘の部位によって巧みに積み分けられている。すなわち、後円部にはこの付近の地山にあたる黄褐色粘土、前方部には旧表土である褐色砂質土、後円部と前方部をつなぐくびれ部には砂質に近い黒色粘質土を主として用いている。

墳丘の築造過程としては、まず、墳丘部分を旧表土面で前方後円形に残して周濠を掘りくぼめる。盛土は後円部から積み始めており、基底部では黒色粘質土を用い、上に行くに従って黄褐色粘土と黒色粘質土を互層に積み上げている。土層図を詳細に検討すると、各部とも1回の盛土の厚さは10～20cmで、これが2～4段積み重なって1つの工程となっており、後円部では9工程が、前方部では7工程が確認できる。くびれ部の黒色粘質土は分層がきわめて困難であったため、正確な作業工程を示すことはできない。

土の堆積状況は、後円部やくびれ部ではほぼ水平に積まれている。前方部は主軸方向の断面では東側と西側から交互に山をなすように積まれており、横断面では北側はほぼ水平堆積で、地形的に低くなっている南側では南から北に向かって傾斜するように積み上げられている。墳丘主軸断面では後円部・前方部・くびれ部を通して、横目地が比較的良くそろっており、これらの各部位の築成が一連の作業としてほぼ同時に行われていたことがわかる。また、埋葬施設の築造も後円部の築成と並行してなされたものと思われる。各部位の築成が終了し、さらにその上から化粧土として淡黄色砂質土を全面に施して墳丘の築造が完成する。

段築は墳丘の北側には見られるが、南側はすでに削平あるいは流失したためか遺存していない。

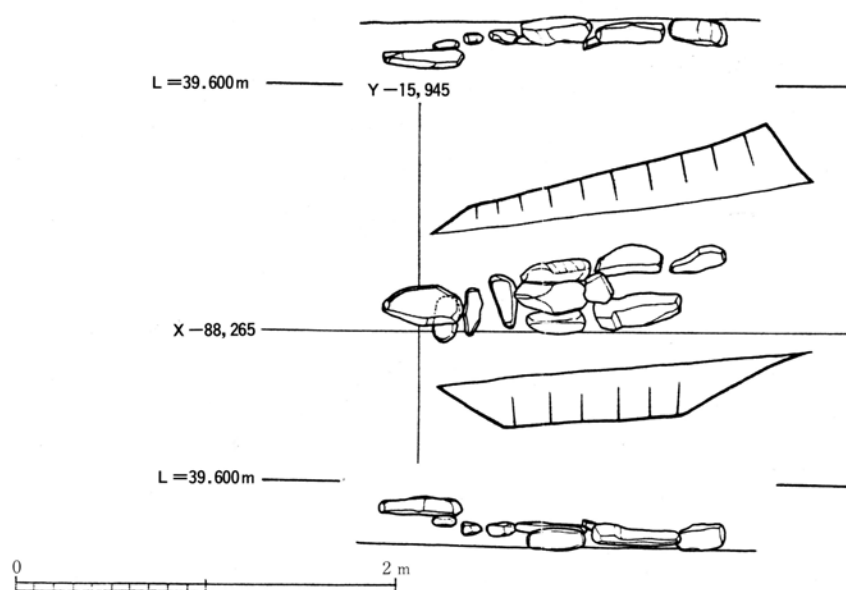


第4図 池下古墳調査前墳丘測量図 (1:200)

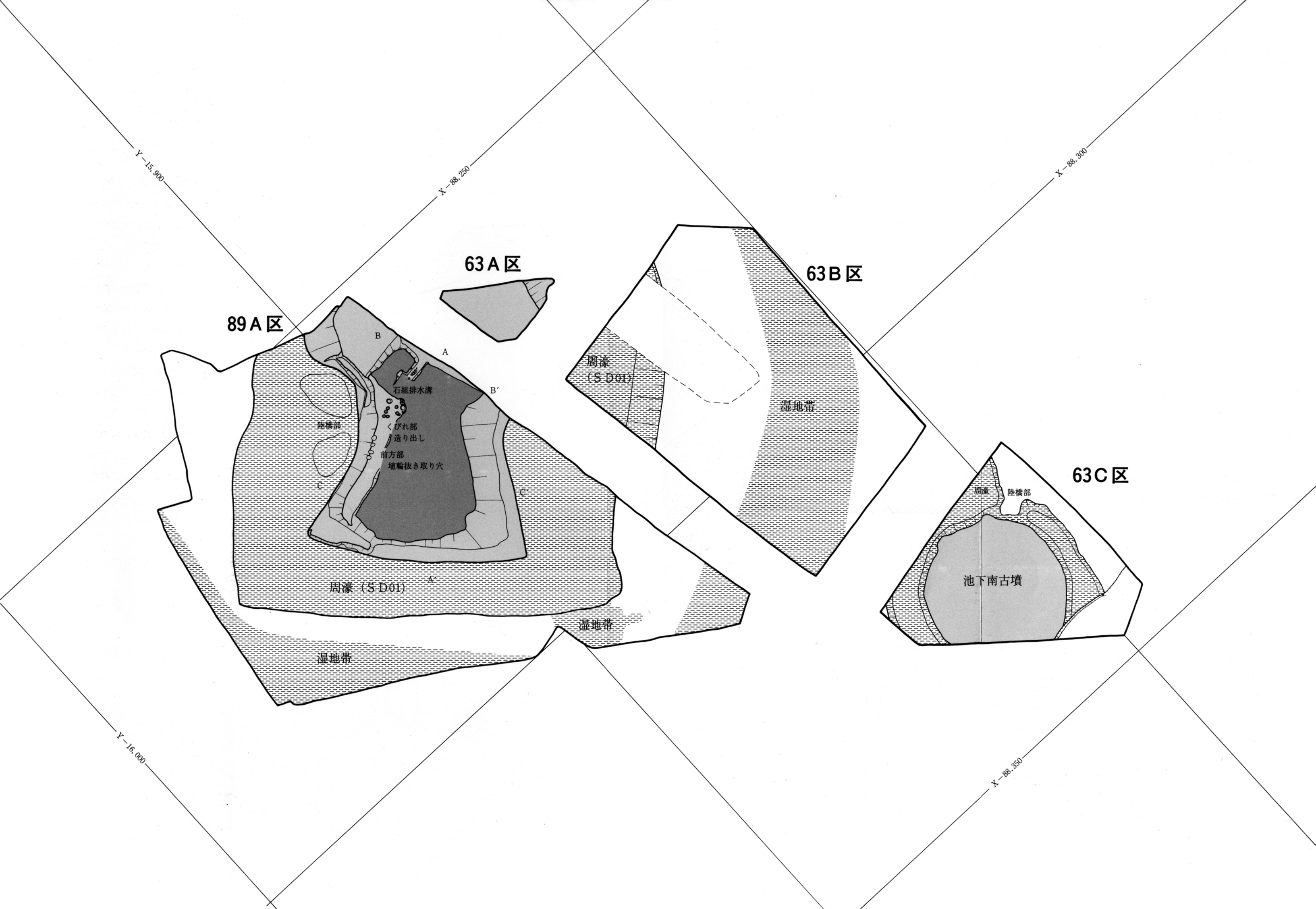
C. 墓道（第8図、図版8） 後円部の横断面を検討すると、石組排水溝を中央にして浅く「U」字形にくぼんだ土層が確認できる。これが墓道である。墓道の肩は、北側ではゆるやかに立ち上がっているが、南側は土層に対応して階段状をなしており、これが後円部築成後に掘削されたものではなく、墳丘築造時には未だオープンな状態であったことの証となっている。

墓道は石組排水溝を埋め立てた黒色砂質土を床面としている。埋土は黄褐色粘土と淡褐色土ブロックからなっており、そのなかに土器（あるいは埴輪）の細片が多く混じる。墓道埋め立て後、やはり土器の細片が混じる黄褐色粘土を厚く積み上げ、後円部を仕上げているが、これを墳丘主軸断面で見ると、くびれ部ではこの黄褐色粘土層の上に黒色粘質土が厚く堆積しており、さらにこの黒色粘質土層は前方部における褐色砂質土層の上半部と対応している。これにより、墓道埋め立て前、すなわち被葬者埋葬以前の段階では後円部の盛土は完成時の3分2程度であり、くびれ部および前方部にいたっては未だ完成時の半分程度の盛土しかなされていなかったことがわかる。これは、古墳築造の過程を研究するうえできわめて注目すべき事実である。また今回、後円部の土層断面において墓道を確認したことは、すでに破壊されたこの古墳の埋葬施設を考えるうえで重要な手がかりとなろう。

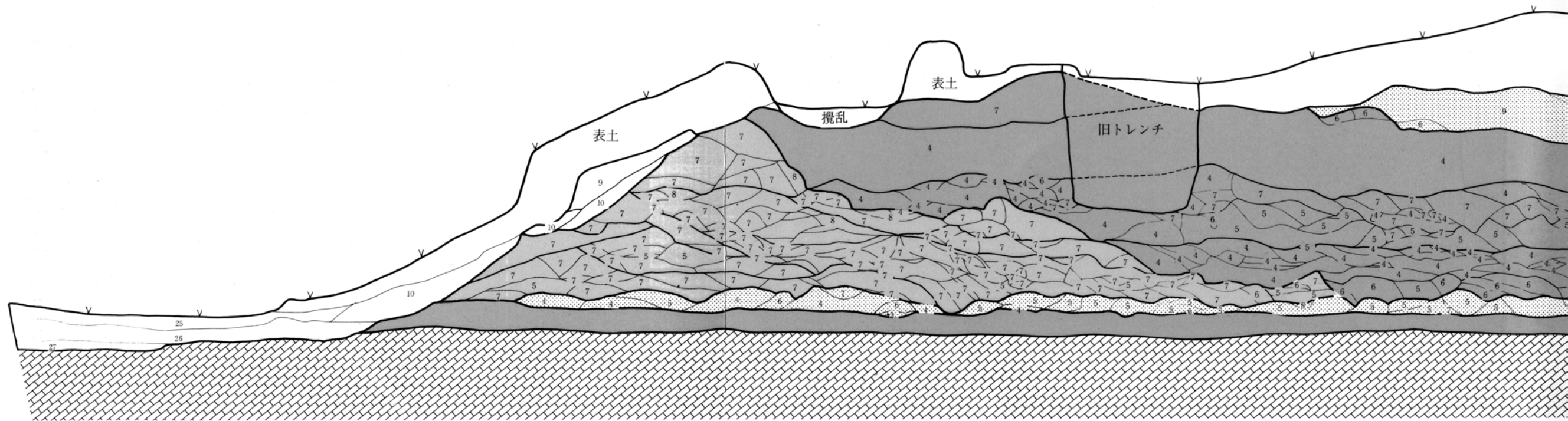
D. 石組排水溝（第5図、図版8） 先に述べたように、墓道のほぼ中央に石組排水溝が遺存していた。これは1966年度の調査の際に、すでに検出されていたもので、当時は2.5mの長さにわたって遺存していたことが報告書中に記されているが、今回の調査ではそのうちの西側約1.8m分しか残っていなかった。構造は底石をもたず、長さ30cm、幅・高さとも15cmほどの石を2個、10～15cm程度の間隔を開けて平行に並べて両側石とし、その上に様々な大きさの偏平な石を置いて天井石とする。この溝状の石組はきわめてきめの細かい軟質の黒色砂質土で覆われていたため、本来は暗渠であり、埋葬施設の排水の機能を担っていたと考えられる。



第5図 石組排水溝実測図 (1:40)

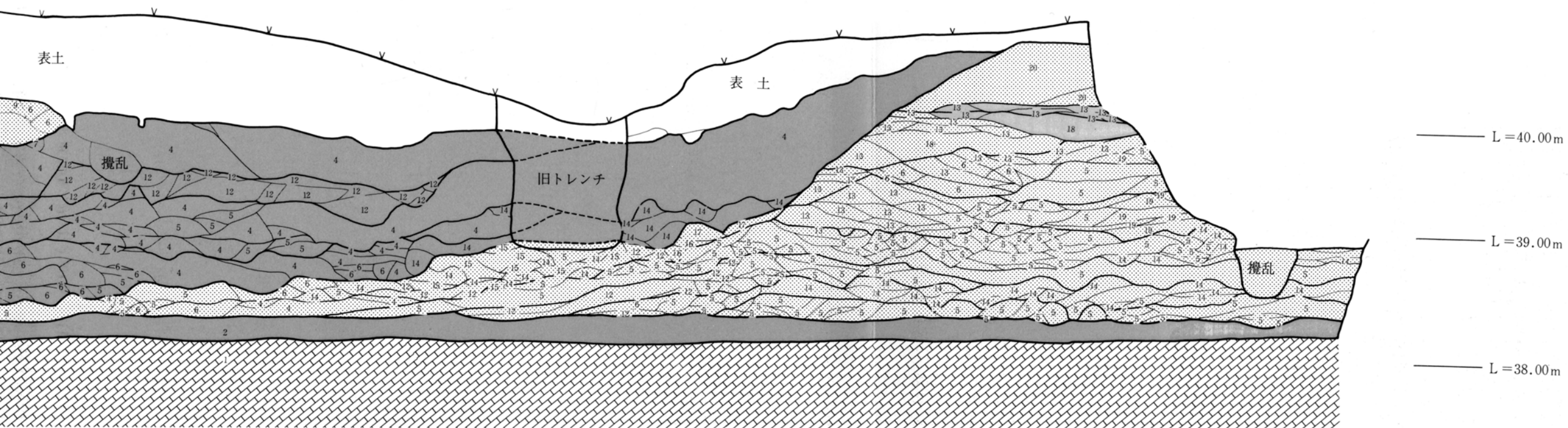


第6図 池下古墳・池下南古墳主要遺構図 (1:400)



1. 地山 (明黄褐色粘土、一部礫混じり)
2. 淡灰褐色粘質土 (旧表土)
3. 暗青灰色シルト
4. 黒灰褐色粘質土 (砂っぽい)
5. 黒褐色粘質土 (砂っぽい)
6. 淡褐色砂質土
7. 褐色砂質土
8. 淡褐色砂質土 + 黄褐色ブロック土
9. 淡黄褐色砂質土 (墳丘化粧土)
10. 黄褐色砂質土

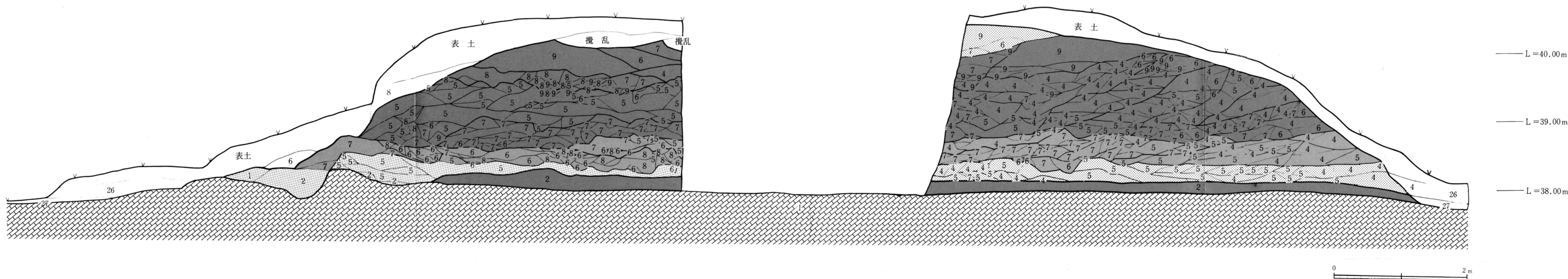
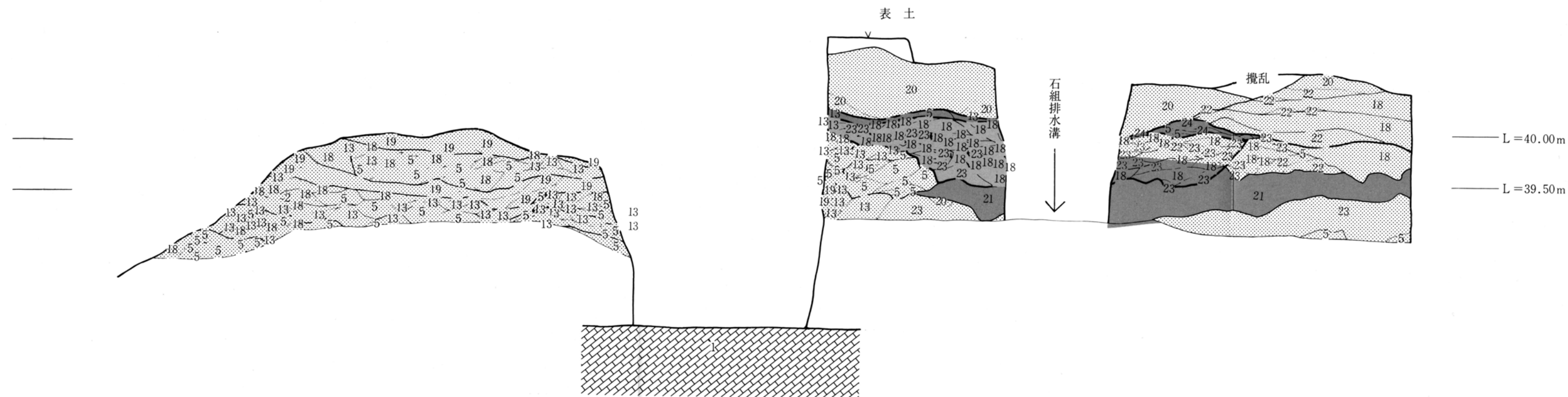
11. 淡灰褐色粘質土、炭化物混じる
12. 明黄褐色砂質土
13. 淡黄褐色粘土 + 淡褐色ブロック土
(後円部18と20の間のみ、土器細片が多く混じる)
14. 明灰褐色土 + 黄褐色砂質土
15. 淡灰褐色砂質土
16. 淡灰色砂質土
17. 明黄褐色砂質土 (12よりきめが細かい)
18. 淡黄褐色粘土 (土器細片が多く混じる)
19. 明黄褐色粘土 + 淡褐色ブロック土
20. 黄褐色粘土 (埋葬施設築造後の盛土、土器細片が多く混じる)



- 25. 暗茶褐色粘土（埴輪片が多く混じる）
- 26. 青灰色砂質土（旧水田耕作土）
- 27. 黒褐色粘土（埴輪片が多く混じる）



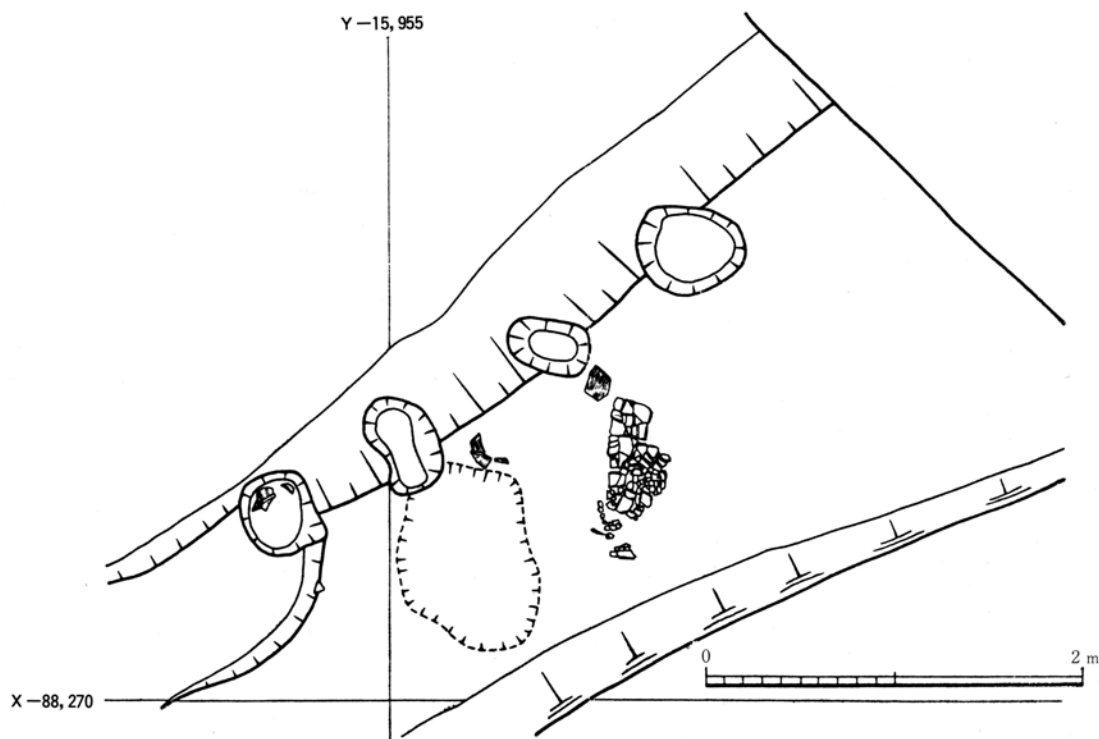
- 1～20. 第7図と同じ
 21. 黒色砂質土（石組排水溝を覆う、きわめてきめの細かい砂質土）
 22. 淡褐色砂質土
 23. 淡黄褐色粘土+黒色砂質土
 24. 黒褐色粘質土+黄褐色粘土
 25～27. 第7図と同じ



E. 前方部埴輪配列状況（第9図、図版9） 墳丘の北側では、くびれ部から前方部の北西隅にかけて、墳丘裾から南側に50cmほど控えて、平坦面（段築）がめぐっている。その段築のうち、前方部のくびれ部寄りのところで、径が30～60cmの円形ないし楕円形の土坑を4ヶ所、40～50cmのほぼ等間隔で検出した。いずれも深さは10～15cmと浅く、底部は平坦であった。これらのうち、最も西側の土坑からは円筒埴輪の破片が出土しており、東から2つ目の土坑のすぐ南側から約1個体分の円筒埴輪片が集中して出土している。以上の状況から、これらの土坑は円筒埴輪の抜き取り穴とみるのが妥当であろう。

なお、墳丘の南側からは墳丘裾をめぐる段築は検出できなかった。しかし、周濠内の墳丘に近いところからも円筒埴輪の破片が多く出土していることから、築造当初には円筒埴輪を並べた段築は墳丘を全周していたと考えて差しつかえなからう。

F. くびれ部造り出し（第11図、図版9） くびれ部には墳丘の北側にのみ造り出しが築かれていた。墳丘裾の形状は南側のくびれ部に比べて北側はわずかにふくらむにすぎないが、段築は前方部より平坦面がかなり広がっており、ここに円筒形埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪によって「コ」の字形に区画された造り出しがあった。1966年度の調査ではこの区画の内側から須恵器の大型甕・大型壺・脚付七連蓋杯各1点と高杯9点、鉄鏃・叉状鉄製品が出土している。先に述べた石組排水溝は後円部の中央からちょうどこのくびれ部に向かっていることから、このくびれ部造り出しは埋葬施設の正面にあたり、ここから出土した須恵器や鉄製品は墓前で取り行われた祭祀にともなうものであると考えられる。今回の調査では1966年度調査時の埴輪や須恵器の抜き取り跡と思われる土坑をいくつか検出した。



第9図 前方部埴輪出土状態図（1：40）

(2) 周濠 (SD01)

A. 形態 (第6図、図版1・3・5・10~12) 今回の発掘調査によって明らかになった周濠の平面形態は盾形で、北東側の陸橋部が若干くびれている。墳丘裾から周濠の肩までの距離は前方部の西側で約7m、南側のくびれ部では約15mと、きわめて広い。周濠の肩は、地形的に高い北側と低い南側では0.5mほどの比高差があり、低いところでは湿地に接している。さらに、明確な外堤も認められないことから、滞水機能はなかったものと思われる。

B. 層序 (第10図) 周濠内堆積土の基本層序は次のようになっている。まず、表土下に暗茶褐色砂質土が約10cmの厚さで堆積し、その下には15~20cmの厚さで旧水田耕作土の青灰色砂質土がある。ここまでは比較的新しい時期の堆積土で、埴輪や近世陶磁器類の破片を多く含む。なお、暗茶褐色砂質土は堆積層の薄いところでは見られない。この下には周濠埋土の最下層である黒褐色粘土が10cmほどの厚さで堆積する。遺物は埴輪・須恵器・灰釉系陶器の破片を多く含む。

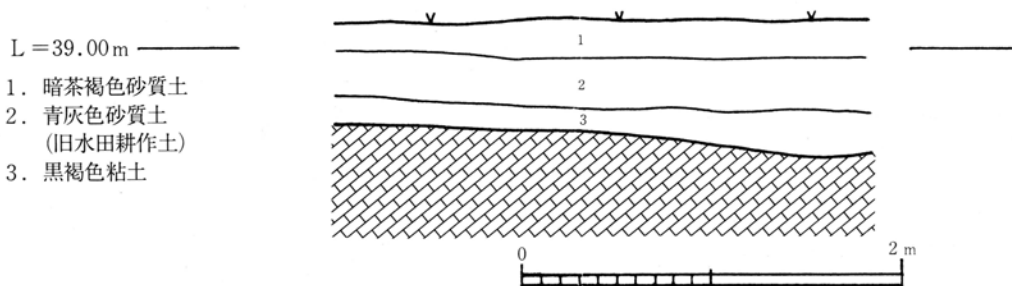
C. 遺物の出土状況 遺物は墳丘近くから埴輪や須恵器の破片が多く出土しており、特に南側のくびれ部付近から須恵器の器台が出土していることは注目し値する。また、前方部の西側では、周濠の肩付近からも埴輪片が列をなして出土していることから、周濠の外側にも埴輪列が並んでいた可能性は否定できない。

D. 陸橋部 (第11図、図版10) くびれ部造り出しのさらに北側の周濠内で、中央部のみ一筋残してその両側をあたかも人間の肺のようなかたちで掘りくぼめた施設を検出した。中央の掘り残し部分は北から南へむかって徐々に幅が狭くなり、造り出しの西側に達する。さらに、周濠の肩はこの部分のみ墳丘寄りにやや突出しており、周濠外から墳丘へと通じる陸橋となっている。これは、被葬者の埋葬に際して、その遺骸を周濠の外からくびれ部造り出し、そして埋葬施設へと導く道であろう。同様の施設は奈良県河合町佐味田ナガレ山古墳¹⁾・富山県小矢部市谷内16号古墳²⁾などに見られる。

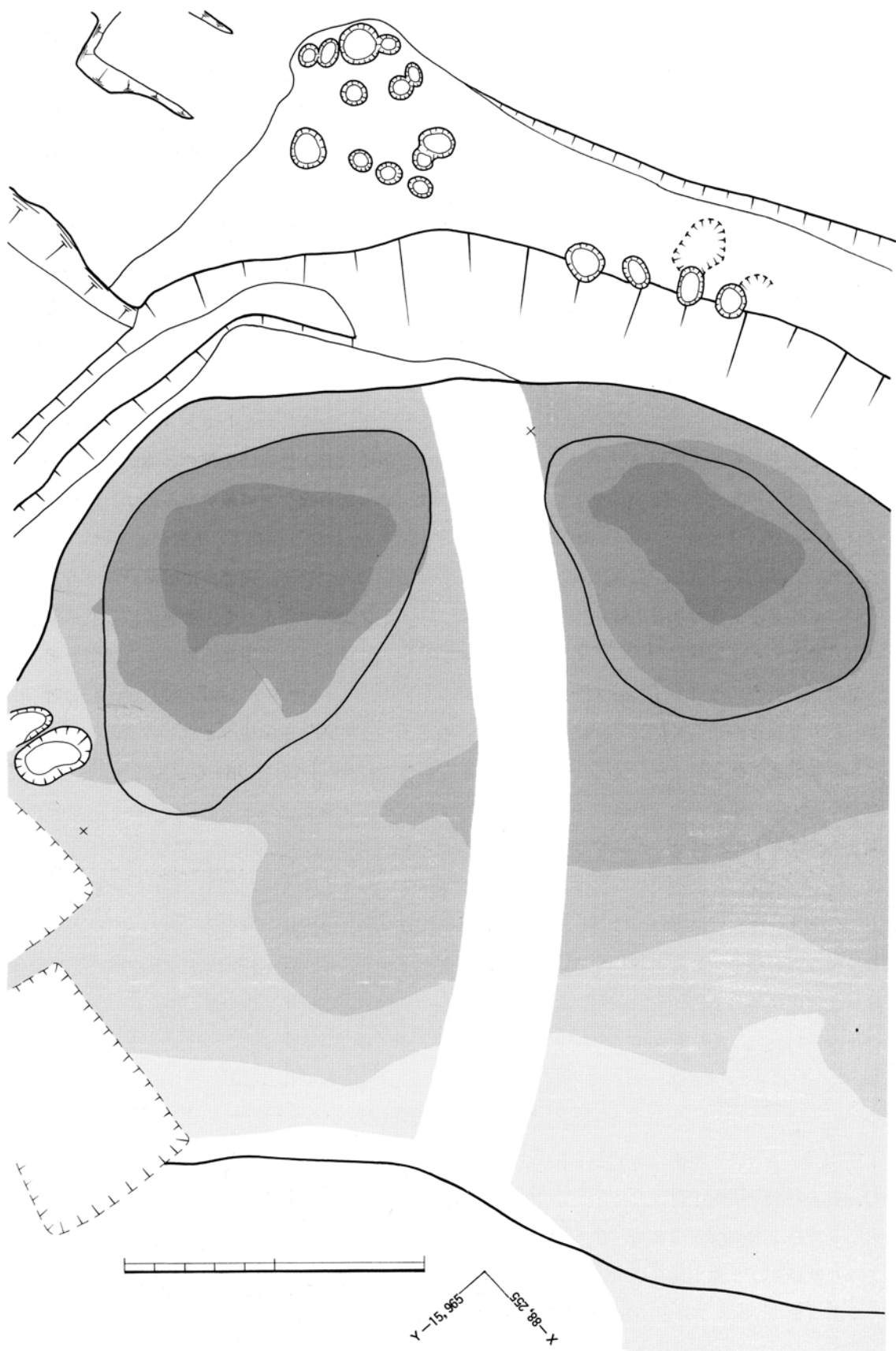
註1. ナガレ山古墳の場合はいわゆる陸橋部ではなく、埴輪列による区画である。

坂靖・吉村公男「ナガレ山古墳」『大和を掘る』1989年度発掘調査速報展10 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1990

2. 宇野隆夫ほか『谷内16号古墳』小矢部市埋蔵文化財調査結果報告書第23冊 1988



第10図 周濠内堆積土基本層序 (1:40)



第11図 くびれ部造り出し・陸橋部実測図 (1:100)

2. 出土遺物

池下古墳は先述のように1966年度と1988・89年度の2度にわたって調査が行われ、須恵器・埴輪・鉄製品など、多くの遺物が出土している。そのため、特に須恵器については調査年度ごとに分けて記述していくこととしたい。なお、1966年度の調査で出土した遺物は、現在、名古屋市博物館で展示・収蔵されている。

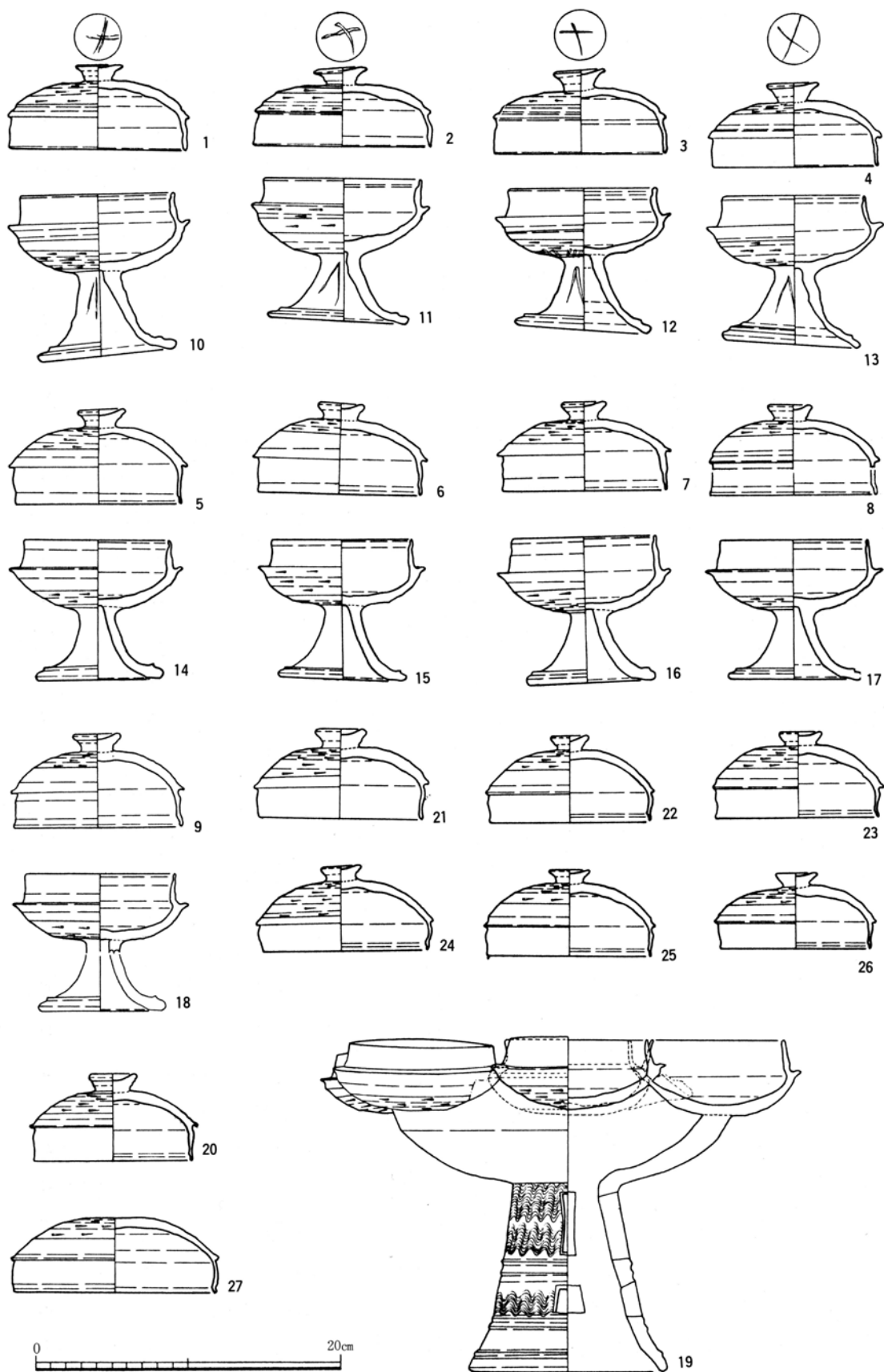
(1) 須恵器

A. 1966年度出土 (第12・13図) 1966年度の調査では、墳丘のくびれ部北側の造り出しから、須恵器の有蓋高杯・脚付七連蓋杯・大型壺・大型甕が埴輪列の内側で集中して出土しており、そのほかにも杯蓋・器台などの破片が前方部などから出土している。

有蓋高杯は蓋と身のセットで合計9組出土している(1~18)。これらはヘラ記号の有無・細部の形態差・色調の違いなどから大きく2群に分けられる。まず、ヘラ記号を有する一群(1~4、10~13)は、いずれも胎土は精良で、1mm以下の白色砂粒を若干含む。焼成は堅緻で、色調はおおむね青灰色から灰色を呈する。蓋(1~4)は頂部が平らで全体の器形はやや扁平である。頂部付近に鈍いロクロヘラケズリを施し、中央に断面逆台形のツマミがつく。ツマミは高く、上面が大きくひろがり、中心部がわずかにくぼむ。上面には「×」印のヘラ記号を刻みつける。頂部と口縁部の境の稜はほぼ真横に突出する。口縁部は内彎し、端部はきわめてシャープな内傾面をもつ。身(10~13)は杯部と脚部からなる。杯部は口縁部の立ち上がりが高く、やや内傾する。口縁端部内面には沈線がめぐる。受部はほぼ水平にのびる。底部はやや腰が張り、ロクロヘラケズリを施す。脚部は裾が大きく広がり、端部付近に段をつける。脚部外面のほぼ中央に「八」印のヘラ記号を刻む。

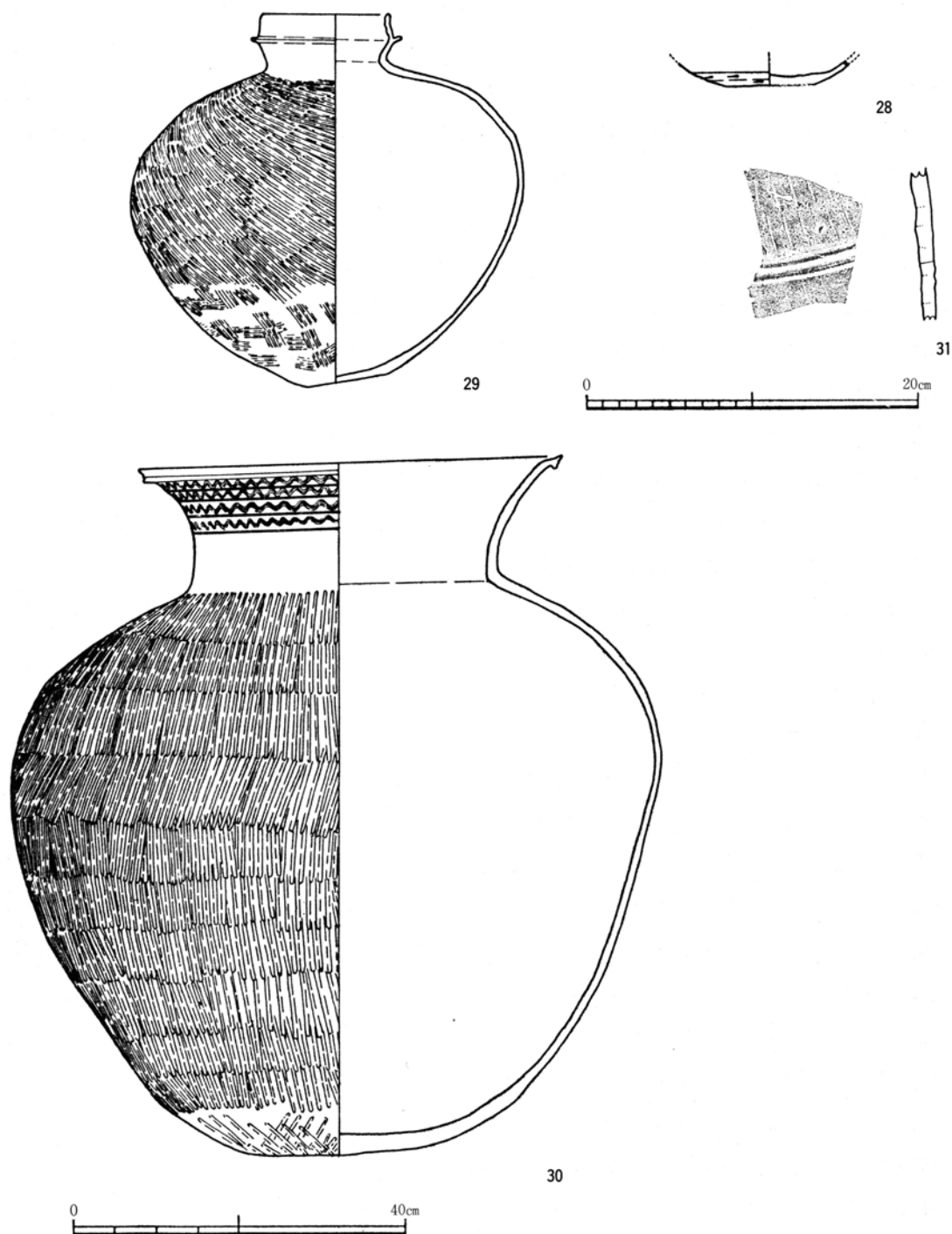
ヘラ記号をもたない一群(5~9、14~18)は、胎土はやや粗く、1mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成はおおむね堅緻だが、一部に焼きの甘いものも見られる。色調は淡灰色から灰褐色を呈するものが多い。蓋(5~9)は器高が高く、頂部に丸みを帯びる。頂部付近に鈍いロクロヘラケズリを施し、中央に断面逆台形の高いツマミをつけるが、上面はヘラ記号を有する一群に比べて狭く、中心部が大きくくぼむ。頂部と口縁部の境の稜は下垂する。口縁部は内彎するが、端部付近で若干反して内面に浅い沈線をめぐらす。身(14~18)は口縁部の立ち上がりが高く若干内傾している。端部内面には浅く幅広の沈線をめぐらす。受部をやや上方につまみ上げる。底部は腰の張りが少なく、ロクロヘラケズリを施す。脚部は裾が大きくひろがり、端部は肥厚して段を設ける。下端はほぼ水平面をなす。

脚付七連蓋杯(19~26)は、短頸壺を中心として周囲に6個の杯を配した高杯で、それぞれに蓋がつく。中央の短頸壺は口縁部が直立し、体部はやや上下にひしゃげたかたちである。この短頸壺は、杯からのびる、断面が楕円形で先端がしゃもじ状にひろがった棒状のものの上ののるかたちで連結されており、口縁部の立ち上がりが若干内傾する。端部はすでに石膏で補修されているために細部は不明である。受部はやや上方を向く。底部はロクロヘラケズリを施しており、腰の張りは少ない。杯が接合されている高杯の体部は器壁がきわめて厚く、強く屈曲して脚部につながる。脚部は裾があまりひろがらず、端部付近でわずかに屈曲する。上下2段の長方形のスカシを四方に配し、上下のスカシの間・下段のスカシの下・裾の端部やや上方の3段にそれぞれ2条の沈線をめぐらす。上段のスカシ



第12图 1966年度出土須惠器实测图 (1 : 4)

の横には櫛描で波状紋を上下2段に配し、下段のスカシにはやはり波状紋を1段加える。胎土は精良で、焼成は堅緻、色調は青灰色を呈する。蓋（20～26）は中央の短頸壺に付属するもののみ若干径が小さく、他は同じである。器形や調整は有蓋高杯のヘラ記号をもたない一群に共通している。胎土はやや粗く、1mm以下の白色砂粒を若干含む。焼成はおおむね良好で、色調は灰褐色から青灰色を呈する。



第13図 1966年度出土須恵器実測図（1：8・1：4）

大型壺(29)は底部が狭い平底で、体部はやや肩が張る。口縁部は一旦外反して受部をつくりだし、そこからほぼ直立して端部はわずかに内傾する平坦面をなす。体部外面は左上から右下にかけてタタキを施し、底部付近は横方向にタタキを行う。タタキの原体は長さ3.5cmで、幅が2.0cmである。内面は成形の痕跡をきれいにナデ消す。色調は外面の上半部が灰白色の地に、ところどころ緑灰色の自然釉がかかり、下半部は降灰により灰色を呈する。内面は淡灰褐色である。

大型甕(30)は底部が平底に近い丸底を呈し、体部中央のやや上方に最大径がくる。体部外面の調整は縦方向のタタキを施す。タタキの原体は長さ3.5cm、幅2.0cmで、木目に直交して6本の溝を刻みつけている。内面はナデにより、成形の痕跡をとどめない。口縁部は大きく外反し、端部は下方に折り返して外側に面をつくる。口縁部外面は2条1組の沈線を4段にめぐらせ、口縁端部直下および沈線で区画された間を4段にわたって櫛描波状紋で埋める。焼成は良好で、色調は灰黒色を呈する。

27は杯蓋で、出土地点は不明。頂部はやや平らで、鈍いロクロヘラケズリを施す。頂部と口縁部の境は稜は真横を向き、短く突出する。口縁部は強く内彎し、端部は外反して下端は面をなす。胎土はきわめて精良で、焼成は堅緻、色調は淡灰褐色を呈する。

28は底部のみの破片で、出土地点は不明。外面はロクロヘラケズリを施して平底に仕上げ、体部との境は稜をなす。胎土は粗く、5mm以下の砂礫を多く含む。焼成は堅緻で、色調は青灰色である。瓶類の底部と思われ、年代的には古墳の築造時期をかなり下るものであろう。

31は器台の脚部の破片で、前方部の前端から出土している。外面はやや下寄りに2条の突帯をめぐらせ、その上下に左下がりの櫛描波状紋を施す。上段の左側面はスカシにあたる。胎土は粗く、1mm以下の砂粒を多く含む。焼成は堅緻で、色調は青灰色を呈する。

B. 1989年度出土(第14図、図版14) 1989年度の調査で出土した須恵器は、すでに細片となったものがほとんどである。ここでは、これらのうち比較的かたちのわかるもの10点についてのみ、図示して説明を加える。

まず杯身(32)である。前方部くびれ部寄りで、墳頂からやや北側の盛土直上から出土した。底部にはロクロヘラケズリを施し、狭い平底となる。受部はわずかに上方を向く。口縁部はほぼ直立し、端部内面には沈線を一条めぐらせる。口径に比べて器高が高い。胎土は粗く、2mm以下の白色砂礫を多く含む。焼成はやや甘く、色調は外面で灰褐色、内面では青灰色を呈する。

33はくびれ部南側の周濠最下層より出土した壺の口縁部で、ゆるやかに外反し、端部は肥厚して外側に面をなす。口縁端部のやや下方に突帯を一条めぐらせ、その下に幅の広い櫛描波状紋をつける。胎土は精良で、1mm以下の灰色・白色砂粒を若干含む。焼成は良好で、色調は淡青灰色を呈する。

34はくびれ部北側の周濠最下層より出土した甕の口縁部の破片である。口縁端部に行くにしたがって強く外反し、端部は外側に面をなす。口縁部外面には2条の沈線を4段めぐらせ、口縁端部直下から4段にわたって櫛描波状紋を施す。内面下半には板ナデ調整を行う。胎土はやや粗く、2mm以下の白色砂礫を多く含む。焼成はわずかに甘く、色調は暗灰色を呈する。

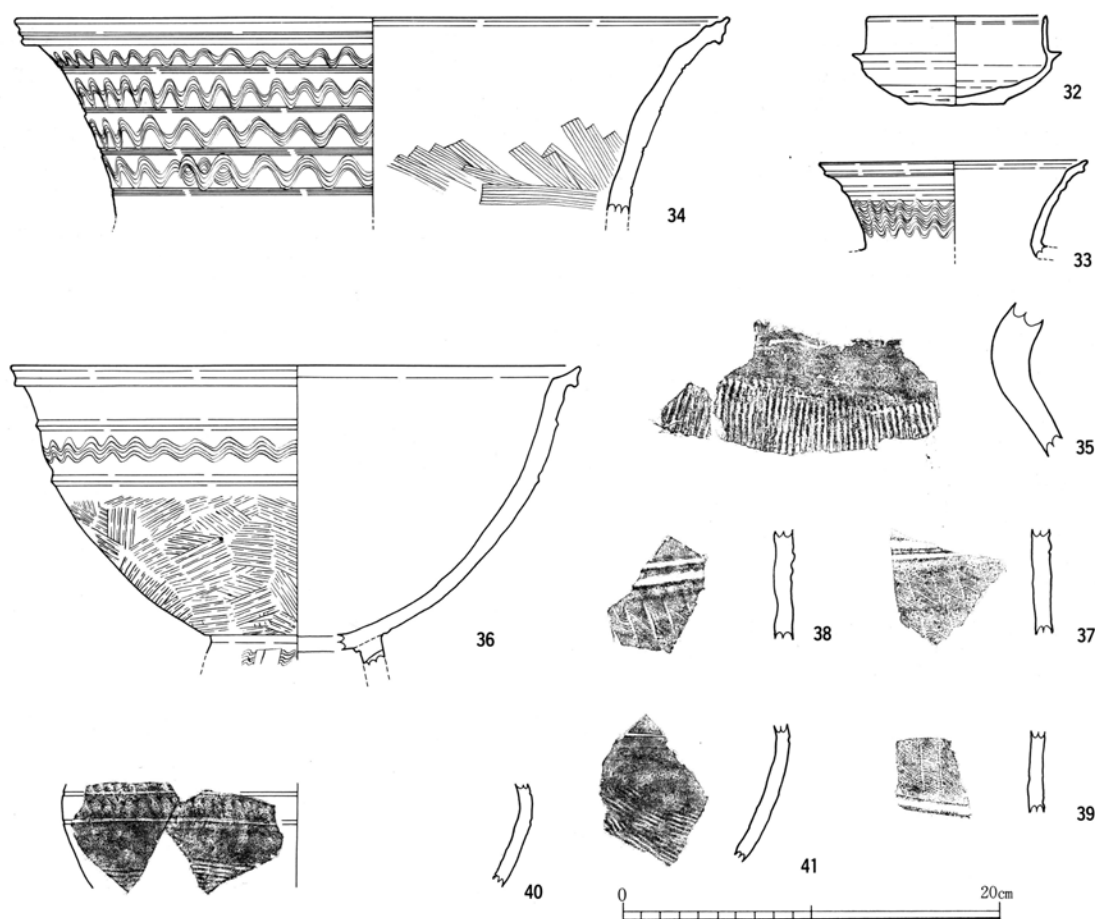
35は甕の頸部の破片で、くびれ部北側の周濠最下層から出土している。強く「く」の字状に屈曲し、体部外面には縦方向のタタキ目が残る。口縁部側の器壁はきわめて厚い。胎土はやや粗く、3mm以下の白色・灰色砂礫を多く含む。焼成はやや甘い。色調は淡青灰色を呈する。

36は器台の杯部の破片で、くびれ部南側の周濠最下層から出土。ゆるやかに内彎する深い杯部に、短く外側に折れて面をなす口縁端部がつく。杯部の中央上寄りに、上下2段に突帯をめぐらせ、その間に櫛描波状紋を施す。下段の突帯より下にはタタキ目をとどめる。わずかに遺存した脚部には方形のスカシとその間を埋める波状紋が残る。胎土は良く、1mm以下の白色砂粒を若干含む。色調は内外面は青紫色で、断面は赤紫色である。

37～39は器台の脚部あるいは筒形器台の破片である。いずれも前方部西側の周濠最下層から出土している。外面には突帯をめぐらせ、その上下に左下がりの櫛描波状紋を施す。38の左側面にはスカシが遺存する。胎土はいずれも粗く、1mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成はいずれも堅緻である。色調は37・39が淡青灰色、38は青灰色で白色の灰をかぶる。これら3点が同一個体か否かは不明である。

40・41は甗・壺・器台のいずれかの破片と思われる。体部下半にタタキ目をとどめ、上半部は沈線で区画してその間を櫛描波状紋で埋める。40は胴部の最大径が24.8cmとかなり大型である。胎土はいずれもやや粗く、1mm以下の白色・黒色砂粒を多く含む。焼成は堅緻で、色調は、40が外面は黒灰色で内面は淡青灰色、41は外面が暗青灰色で内面は淡青灰色である。出土地点は40がくびれ部南側の墳丘表土および前方部西側の周濠最下層で、41はくびれ部南側の周濠最下層である。

以上、1966・89年度出土の須恵器について説明を加えてきた。その年代観は陶邑編年ではTK47型式にほぼ相当し、実年代ではほぼ5世紀末頃にあたる。



第14図 1989年度出土須恵器実測図（1：4）

(2) 埴輪

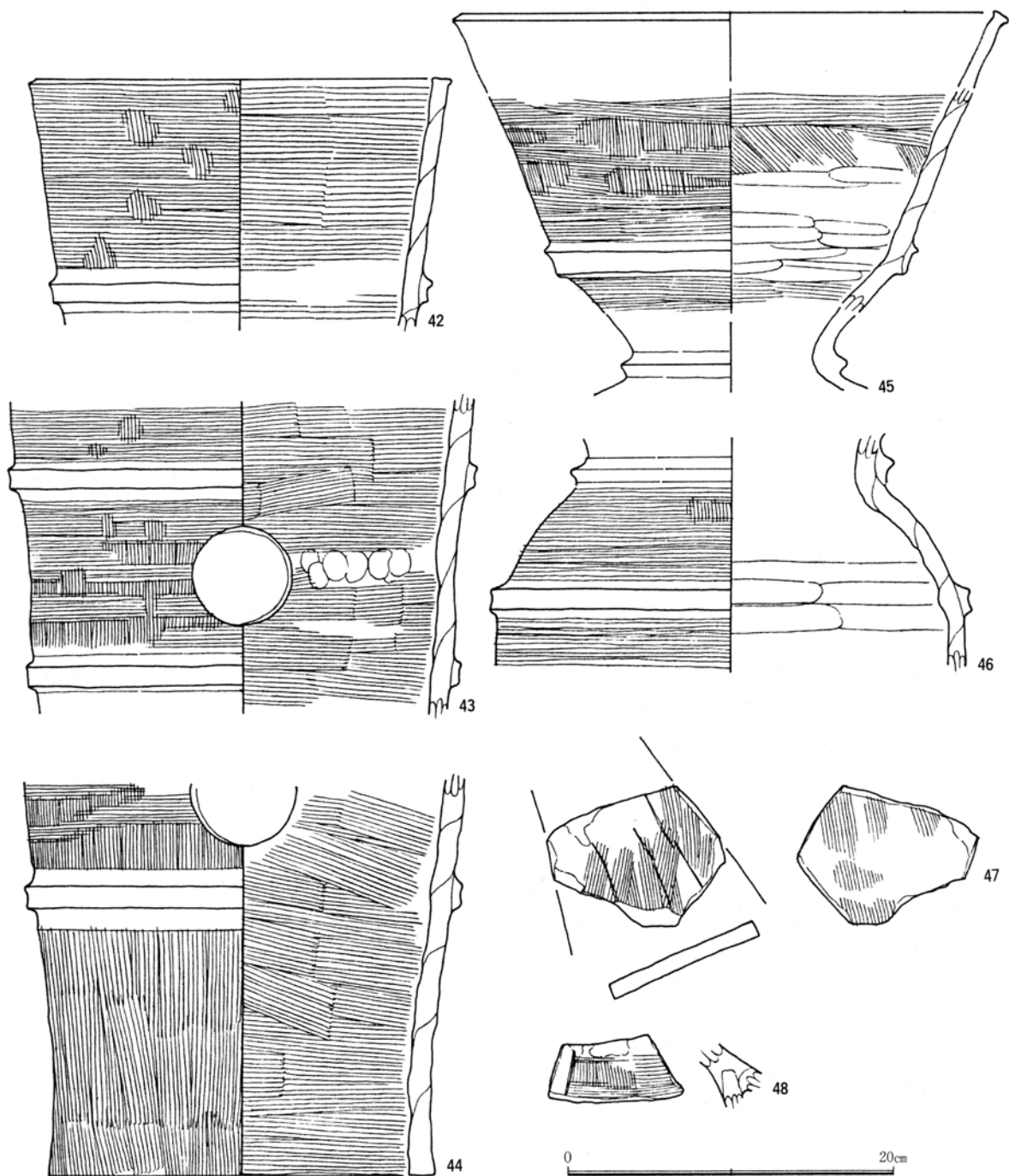
A. 出土状況 埴輪列は基底部上の平坦面に使用され、前方後円形にはほぼ全周するようである。また埴丘上からも埴輪片が出土しており、前方部上での若干の埴輪の使用も想定できる。基底部での埴輪の配置は間隔がやや散漫（約1 m単位）で、個体単位の樹立が見られる。また北くびれ部では円筒埴輪列により一辺3 mほどの方形部を造り出すというやや複雑な配置状況が復原でき、この造り出しの方形部と埴輪列との接点には朝顔形埴輪を使用し、コーナーには蓋形埴輪を使用したものと思われる。また後円部に移行する地点には大型須恵器壺が埴輪列内に配され、特殊な空間を造りだしていたものと推定される。

B. 円筒埴輪 朝顔形埴輪と円筒形埴輪が確認できる。朝顔形埴輪は器高約76cm（推定復原）で円筒部から花状部へはやや弧状を呈しながら移行し、くびれ部には三角凸帯が貼付けられる。花状部は上段が大きく上方へ外反する特色が見られ、口縁端部は斜面を持つ。透孔は第2段から第4段まで互い違いに円形穿孔が見られる。底部は第16図53に見られるように整形段階にタタキを用い、その状況が表面化している。外面調整はタテハケ後回転ヨコハケを多用し、整形には部分的にタタキを使用するようである。59の第4段の外面にはその痕跡が確認できる（個体が異なるがやはり同一位置にタタキを使用する第18図69）。おそらく乾燥面周辺に施されたものであろう。内面調整はヨコ方向の回転動作で、おもにヨコハケ・ヨコ指ナデを使用する。

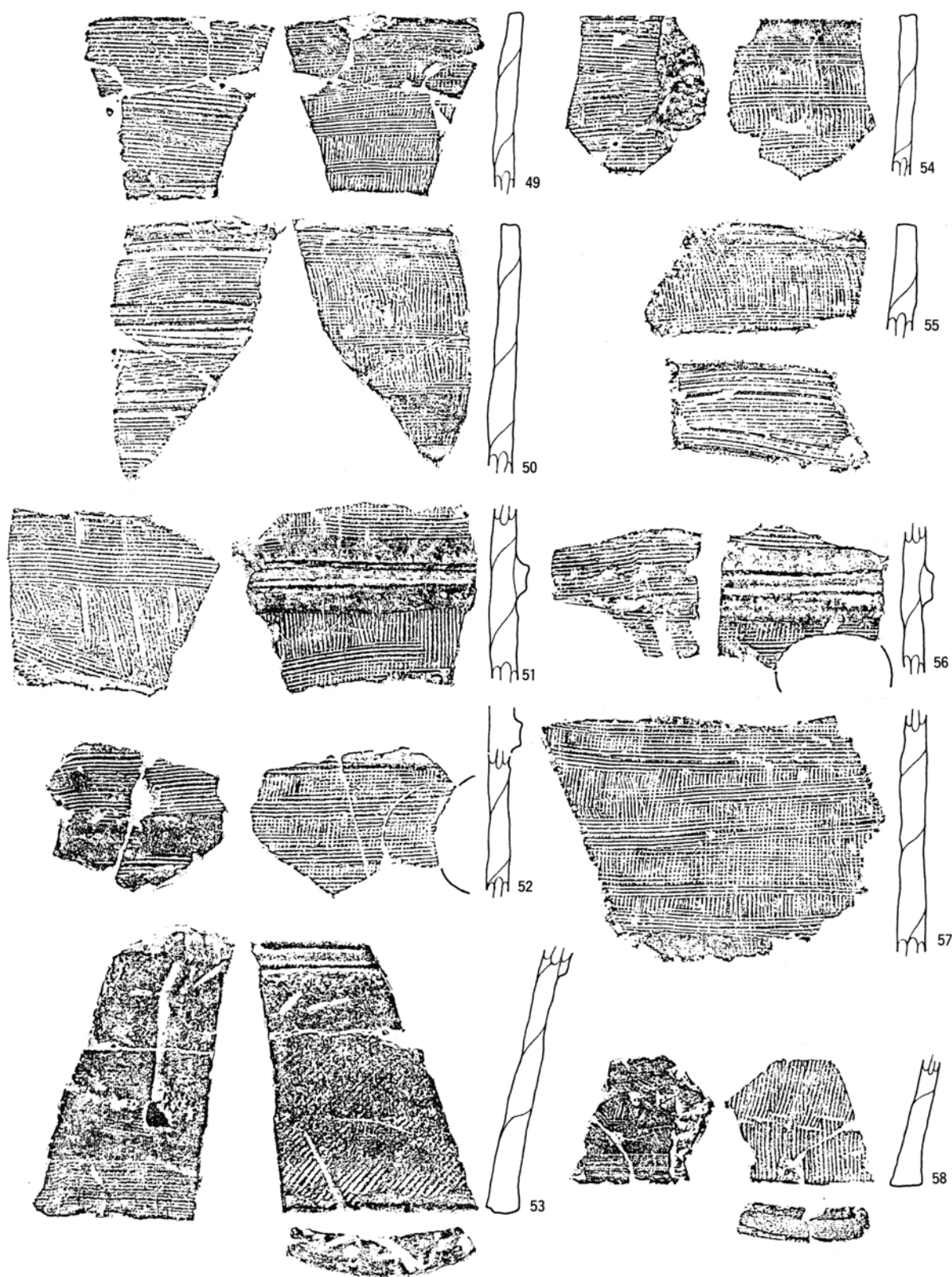
円筒形埴輪はほぼ形状が統一されており2凸帯3段で器高40～44cm・口径28～30cm・底径20～22cmが基本である。透孔は第2段に2方向に穿孔され、その周辺に縦弧状のヘラ描記号が見られる。凸帯は扁平で側面幅1.2cm突出高0.4cmを計るが、側面の調整には工具を使用することが多い。外面調整はタテハケ後回転ヨコハケを多用し、内面調整はタテ指ナデ後ヨコ回転動作のヨコハケ・ヨコ指ナデを使用する。しかし整形用のタテ指ナデがそのまま表面化するものが多く散見でき、技法上の手順の省略が見られる。基底部には底部調整としてのヨコ回転ケズリが1回転施されることもあるが、その多くは外面を省略し、内面にのみ施すようである。また底部底面には1条の凹線が認められ味美技法が確認できる（第18図70）。ハケ原体の1 cmあたりの密度は平均6～7本。

C. 蓋形埴輪 第18図65・66・67第15図47・48は蓋形埴輪である。65は円筒部が3凸帯4段で2・3段に互い違いに円形透孔が穿かれ、第4段は球状を呈しながら垂直に立ち上がり受部に連続する。その屈曲部には三角凸帯が貼付けられる。笠部は球状を呈する円筒部第4段を使用しつつ大きく傾斜する形状であったと思われる。その外面には蓋形埴輪特有な線刻が施される。

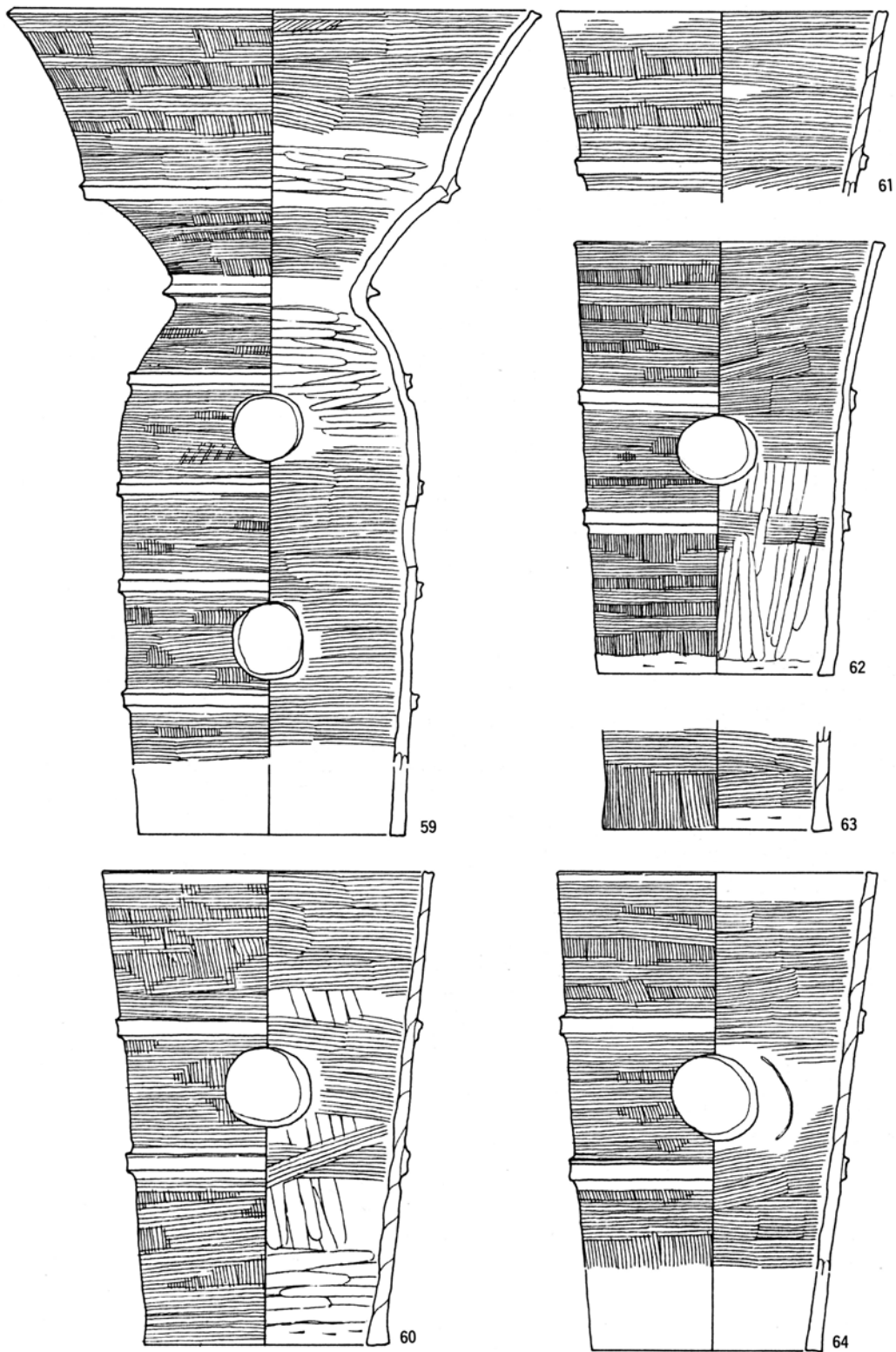
外面調整は円筒埴輪同様回転ヨコハケが用いられるものの、第1段はその手順を省略するようである。内面調整はヨコ回転動作を用いるが、ハケを使用することはない。こうした調整方法の違いから円筒埴輪との区別が円筒部においても可能となる。47は立飾部の破片と考えられるもので、線刻による三条の平行線が描かれており、蓋形埴輪立飾部に散見できる文様構成である。



第15図 1989年度出土埴輪実測図1 (1:4)

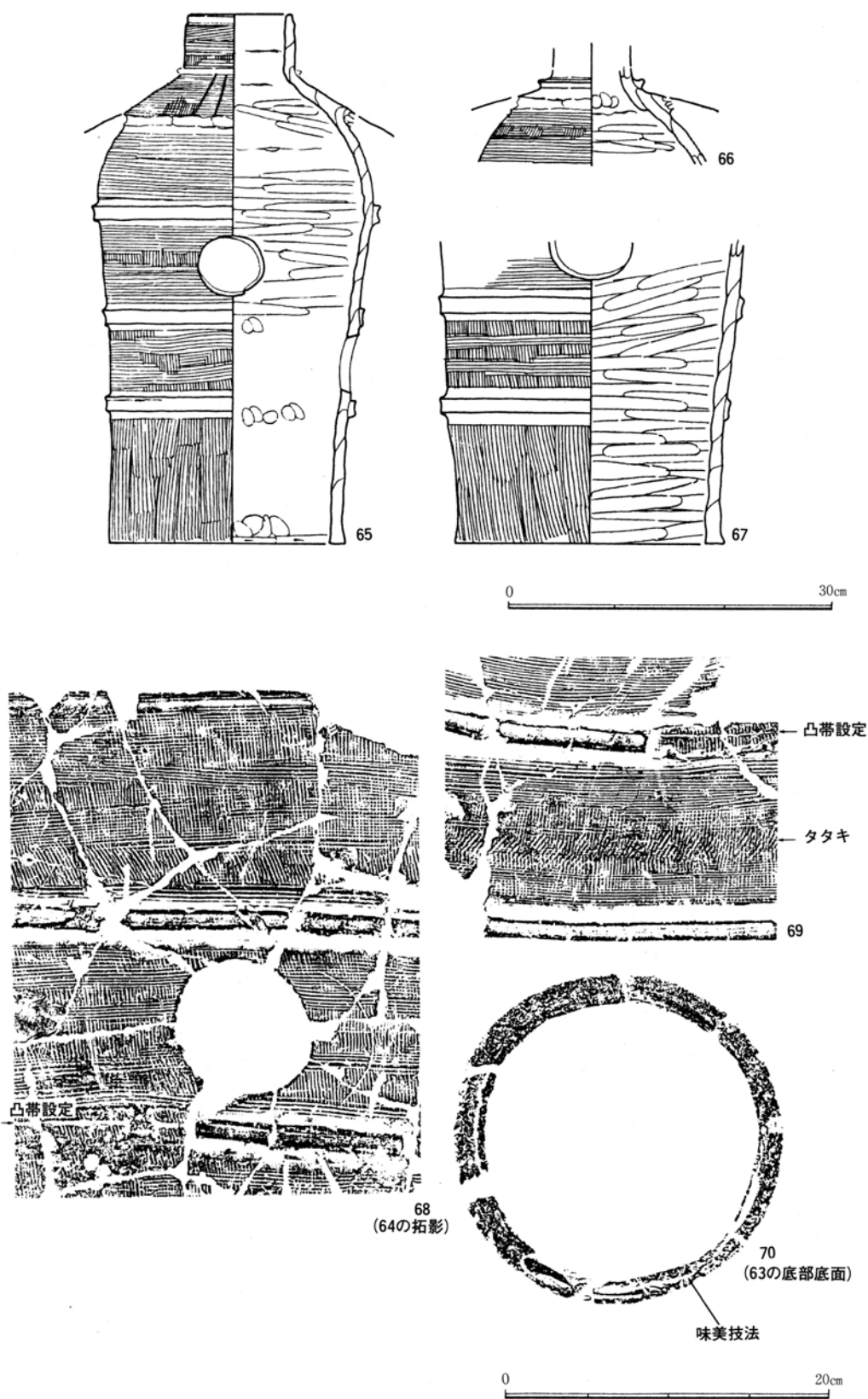


第16図 1989年度出土埴輪実測図2 (1:3)



0 30cm

第17図 1966年度出土埴輪実測図1 (1:6)

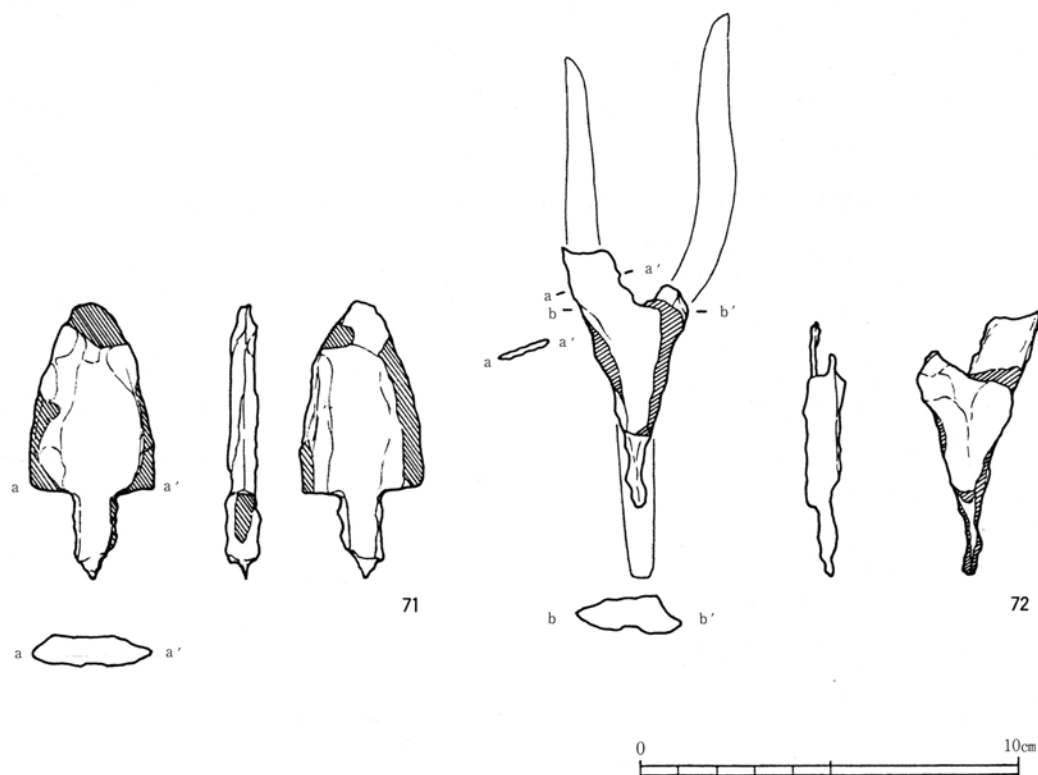


第18図 1966年度出土埴輪実測図2 (1:6)、拓影 (1:4)

(3) 鉄製品

1966年度の調査で、くびれ部北側の造り出しから大型甕に近接して鉄製品が2点出土している。うち1点は鉄鏃で、もう1点は叉状鉄製品と呼ばれているものである。いずれも現在、名古屋市博物館に収蔵・保管されている。まず、鉄鏃(71)であるが、すでに保存処理が行われており、1969年に刊行された報告書に記載してある計測値とはかなり異なるが、現状での各部の計測値は次のようになる。全長が7.2cmで、刃部の長さは5.2cmで幅は3.3cm、厚さは刃部が0.8cmで茎部が0.9cmである。刃部の先端および周縁部は補修を受けている。茎部の側面には布目の圧痕が残る。

叉状鉄製品(72)は先端が「U」字状に分かれており、これに茎部がつくかたちである。現状では破損が著しく、叉状に分岐する部分以外はほとんど原形をとどめていない。遺存している部分についても計測値は調査時のそれとは大きく異なる。全長は6.8cmで、刃部は長さ1.5cm分が遺存しており、幅は1.4cmで、厚さは0.2cmである。茎部は長さが5.3cmで、幅は2.8cm、厚さは1.0cmをはかる。茎部の周縁部は補修を受けている。



第19図 1966年度出土鉄製品実測図(1:2)

第3章 その他の遺構

その他の遺構として、ここでは池下南古墳と近世の遺構について記述しておく。

1. 池下南古墳（第6図、図版2・13）

池下南古墳は、池下古墳から南東へ約30m離れたところに位置している。地形的には、池下古墳と湿地によってへだてられており、湿地帯のなかの独立した島状の高まりに立地する。

墳丘はすでに削平を受け、基底部の地山面のみ遺存している。墳形は円墳で、基底部での直径は19.5mをはかる。幅約5mの周濠がめぐっており、墳丘の北東側には陸橋部がある。

遺物はほとんど無く、当初から埴輪は樹立されていなかったようである。築造時期の決め手にかけが、池下古墳との位置関係からみて、池下古墳とさほど時期的に差はないものと思われる。

2. 近世の遺構（図版1・11・14）

近世の遺構としては、水田跡・ピット群・溝・土坑などがある。水田跡は池下古墳周濠内および池下古墳の南側で畦畔がいくつか検出されている。畦畔の方位は、池下古墳周濠内のものについてはほぼ正方位で、池下南古墳の南側のものは北で東に約60°振れている。水田跡の正確な時期については不明である。

ピット群は池下古墳の前方部北西隅付近に集中している。堀方はいずれも直径30cm程度の不整円形で、埋土は水田耕作土の青灰色砂質土である。直径10cmほどの柱痕跡をもつ。一部で柵列状に並ぶところもみられるが、全体としてはまとまりがなく性格は不明である。方位は水田畦畔と異なるため、水田跡との直接のかかわりはないものと思われる。

溝はピット群同様、池下古墳の前方部北西隅付近で数条検出している。うち、S D02は前方部の墳丘裾に沿ってのびている。全長2.5m、幅0.5mほどで、埋土は水田耕作土の青灰色砂質土である。S D03は周濠内にあり、地山を掘り込んでつくられている。方位は北で東に約45°振れている。規模は全長約7mで、幅は約0.5mである。黒褐色粘土を埋土としている。S D04は周濠の肩に沿って掘削されている。南西側は攪乱されており、現存する長さは約4.5mで、幅は約0.8mである。埋土は黒褐色粘土である。このほかに、池下南古墳にも水田畦畔にともなう溝が検出されている。調査区で確認できた長さは約10mで、幅は約1.2mである。

土坑は調査区の各所にあり、形態・規模は様々である。いずれも遺物はほとんど無く、所属時期や性格などについては不明である。

第4章 自然科学的分析

1. 池下古墳の石組排水溝の使用石材

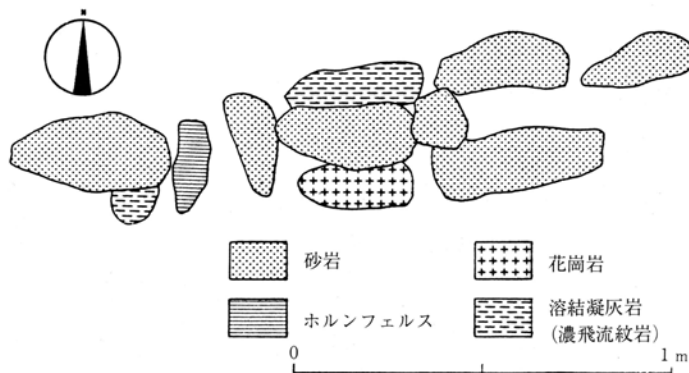
当古墳で検出された石組は排水溝の部分のみで、造り出し部から東へ延び主体部に続いていたものと考えられる。ただし主体部はすでに削平されており、現在は原形をとどめていない。今回の調査で確認された石組排水溝の石材は、砂岩7個、溶結凝灰岩（いわゆる濃飛流紋岩）2個、ホルンフェルス・花崗岩各1個の全11個のみであった（第20図）。その他は主体部と共に失われたのであろう。

当古墳は、岐阜県東濃地域に源を発する庄内川とその支流である矢田川に挟まれた台地の、南側（矢田川側）に延びる尾根の先端部に位置している。庄内川と矢田川の間には、屏風山断層と呼ばれる断層が走っており、それぞれの流域の地質は異なっている。庄内川本流には中部美濃帯に属する中・古生層の堆積岩類とそれを源岩とする接触変成岩（砂岩・チャート・ホルンフェルスなど）、溶結凝灰岩（いわゆる濃飛流紋岩）が分布しており、支流の一部に中部領家帯に属する花崗岩類がみられる。矢田川主流の流域には中部領家帯の花崗岩類が分布している。

古墳築造に際し、その石材の採取や運搬に河川が利用されたことが考えられる。上記のような当古墳の立地、および両河川への距離（庄内川へ約2 km、矢田川へ約1 km：共に直線距離）等を考慮すると、当古墳では矢田川をおもに利用したことが推定されるが、石組排水溝での使用石材の状況はむしろ庄内川流域に起源が求められるものである。またこれらの礫は比較的良好に円磨されており、河原の礫をそのまま使用したようである。このことは庄内川の現河床における礫調査の結果¹⁾ともよく調和している。これは、堆積岩類が成因上偏平になりやすく、その礫が排水溝に適していたためであろう。このことから当古墳築造時に、おそらく矢田川も利用したであろうが、用途に合わせて庄内川でも河原礫を古墳石材として採取したことが考えられる。

当古墳と並行して、名古屋市教育委員会によって発掘調査が行われた茶臼山古墳（当古墳の北西約300mの台地上）では、排水溝に加え、主体部に続く羨道部等も比較的良好に残されていた。これらの石材も筆者らによって検討が行われている²⁾。その結果、排水溝は当古墳と同様、堆積岩が多く用いられており、また羨道部で用いられていた1 m前後の大型の石材は、露頭から切り出したと思われる花崗岩類を中心に構成されていた。

この花崗岩類はその岩相から矢田川上流域に分布するものと思われる。これらのことから矢田川上流域で切り出した花崗岩類の石材を、矢田川を利用して運搬したことが推定できる。池下古墳では主体部およびそれに関する石材は残されていないが、茶臼山古墳と同様の状況であったかもしれない。



第20図 池下古墳石組排水溝の使用石材（平面図）

2. 池下古墳墳丘中の黒色土について

(1) はじめに

池下古墳の墳丘(前方部)より採取した分析用試料(第21図)は、淡色で比較的粒度の粗い試料(A-1, 4, 8, 11)と、黒味が強い腐植質シルトまたは粘土(A-2, 3, 5~7, 9, 10)とに大別することができる。ここではそれぞれを一括して、黄色土試料と黒色土試料と呼ぶ。このうち前者は池下古墳が位置する台地の砂礫層(A-1)に由来するものである可能性が高い。しかし古墳周辺では後者のような黒色土層の存在は知られていない。ここでは主にこの黒色土に注目し、分析を行った。

分析試料は墳丘の土層から採取した11試料で、試料中に含まれる珪質微化石(植物珪酸体・珪藻・古ベン毛虫類)や岩石・鉱物起源の砂粒の組成、および腐植の含有量を測定した。

植物珪酸体は、主にイネ科の植物によって土中から取り込まれた二酸化珪素(SiO_2)が細胞中に沈着したもので、その形状によって給源植物が推定でき、主に植生復元に用いられる。珪藻は珪質の殻を有する植物プランクトンである。これらは種によって明瞭に棲み分けており、堆積時の水域環境の推定に有効である。古ベン毛虫類(黄色モナス類の包のう)はいまだ詳しい研究がなされていないが、堆積環境推定の手がかりとなる可能性が鹿島ら(1989)によって指摘されている³⁾。これらの分析結果の総合的な考察によって、より詳細な堆積環境復元が可能であると考えられる。また岩石・鉱物起源の砂粒からは、その土層が生成される際の給源となる地質が推定でき、黒色土の産地に関する情報となる。

ただし、ここでは古墳の墳丘についての分析であるため、古墳築造時の環境ではなく、墳丘に使用された盛土の、一次的堆積環境ということになる。

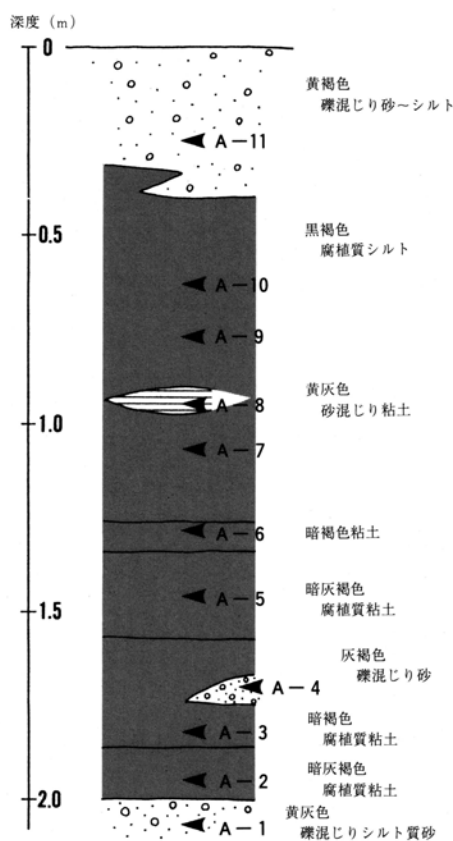
(2) 分析方法と分析結果

①分析方法

珪質微化石分析では、試料の酸処理後比重選別法により $10\sim 100\mu\text{m}$ の粒子を分離し、マウントメディア(和光純薬製)にて封入し、プレパラートを作成した。これを光学顕微鏡を用い400~1000倍で検鏡した。岩石・鉱物起源の砂粒は、椀がけ法によりシルト分を除去した後、 $1/8\sim 1/16\text{mm}$ の砂粒を篩別し、偏光顕微鏡下で砂粒の同定を行った。腐植含有量には、富士平工業製全農式簡易土壤腐植検定セットを用いた。土壌中の腐植量の正確な測定には普通チューリン法が用いられるが、この検定セットは、比較的簡便な方法でチューリン法と極めて近い結果が得られるとされている⁴⁾。

②分析結果

分析結果を第1表に示す。以下にそれぞれの結果について述べる。



第21図 池下古墳分析試料模式柱状図

第1表 池下古墳分析試料の分析結果

試料番号	植物珪酸体											岩石・鉱物起源の砂粒組成											腐植含有量
	ファン型	キビ型	ササ型		ヒゲシバ型	導管起源型	ウシノケサ型	ポイント型	棒状型	その他	石英	高温型石英	斜長石	カリ長石	黒雲母	角閃石	斜方輝石	岩片	火山ガラス	その他			
			含有量	タケⅠ型																	タケⅡ型		
A-11	○			:							52.0		2.0	10.0	2.0	0	0	21.0	2.0	11.0	1>		
A-10	17.5	2.0	65.5	52:48	0.5	0	2.5	0.5	11.0	0.5	47.0	○	6.0	11.0	0	1.0	0	21.0	7.0	7.0	5		
A-9	24.5	0.5	59.0	53:47	1.0	0	0.5	0	13.5	1.0	45.0	○	2.0	14.0	0	0	1.0	24.0	6.0	8.0	5		
A-8	○		○	:						○	44.0	○	3.0	11.0	1.0	0	0	26.0	2.0	18.0	1		
A-7	9.5	6.5	66.5	56:44	0.5	0	2.0	0	12.0	3.0	50.0	○	4.0	9.0	0	0	0	11.0	5.0	22.0	5<		
A-6	15.5	3.5	65.5	55:45	1.5	0	1.0	0.5	10.0	2.5	47.0	○	5.0	13.0	0	1.0	0	12.0	10.0	24.0	5<		
A-5	16.5	5.0	58.5	59:41	2.0	0.5	1.5	1.0	13.5	1.5	58.0	○	4.0	7.0	0	0	0	16.0	4.0	17.0	5		
A-4				:							59.0	○	5.0	10.0	0	0	0	19.0	3.0	4.0	2		
A-3	15.0	7.5	55.5	47:53	1.5	0.5	0.5	3.0	12.0	4.5	57.0	○	5.0	4.0	0	0	0	10.0	7.0	17.0	5		
A-2	19.5	5.5	62.0	57:43	3.0	0.5	0	0	8.5	1.0	53.0	○	5.0	11.0	0	0	0	12.0	5.0	19.0	3		
A-1	○			:							51.0	○	6.0	7.5	0.5	0.5	0	11.0	2.0	21.0	1		
CH	25.5	5.5	50.5	51:49	2.0	1.0	1.0	0	15.0	2.0	53.0	○	9.0	16.0	0	0	0	11.0	7.0	4.0	5		

・表中の植物珪酸体、岩片・鉱物起源の砂粒組成の数字は、個数パーセントを示す。○は含まれることを示す。
 ・腐植含有量は、次の通りである。
 1：わずかに含む (1.0%)、2：含む (2.5%)、3：やや富む (5.0%)、4：富む (7.5%)、5：すこぶる富む (10.0%)

試料番号	検出された珪藻
A-11	
A-10	<i>Eun. flexuosa</i>
A-9	
A-8	
A-7	<i>Pin. borealis</i> Nav. <i>mutica</i> Cym. <i>perpusilla</i> Han. <i>amphioxys</i> . <i>Eun. robusta</i> <i>Eun. flexuosa</i> <i>Eun. praerupta</i> <i>Eun. praerupta</i> var. <i>bidens</i> Nav. <i>goeppertiana</i> Cym. sp. <i>Pin. viridis</i>
A-6	<i>Eun. robusta</i> <i>Eun. flexuosa</i> ? <i>Eun. diodon</i> ? <i>Eun. sp.</i> <i>Nei. sp.</i> <i>Pin. sp.</i>
A-5	<i>Pin. maior</i> <i>Pin. interrupta</i> <i>Pin. subcapitata</i> <i>Eun. praerupta</i> <i>Rho. gibberula</i> <i>Eun. robusta</i> ? <i>Eun. sp.</i> <i>Pin. sp.</i>
A-4	<i>Ach. lanceolata</i> <i>Ach. minutissima</i> <i>Eun. flexuosa</i> Han. <i>amphioxys</i> Nav. <i>mutica</i> <i>Pin. borealis</i> ? <i>Pin. sp.</i>
A-3	<i>Pin. borealis</i> <i>Pin. maior</i> <i>Rho. gibberula</i> Han. <i>amphioxys</i> <i>Eun. pectinalis</i> Cym. <i>perpusilla</i> <i>Ach. linearis</i> <i>Ach. minutissima</i> ? <i>Eun. sp.</i> <i>Nav. sp.</i> <i>Pin. sp.</i>
A-2	<i>Pin. borealis</i> <i>Pin. borealis</i> ? <i>Pin. sp.</i>
A-1	
CH	<i>Mel. ambigua</i>

Pin. : *Pinnularia*属、*Eun.* : *Eunotia*属、*Rho.* : *Rhopalodia*属、*Ach.* : *Achnanthes*属、*Nav.* : *Navicula*属、*Cym.* : *Cymbella*属、*Nei.* : *Neidium*属、*Mel.* : *Melosira*属

a 珪質微化石

黒色土試料中では、多くの植物珪酸体を産した。その組成は比較的良好に似ており、ササ型珪酸体が優占し、ついでファン型珪酸体が多く棒状型・キビ型の珪酸体がともなう。これらの黒色土は同様の植生下で生成されたものと思われる。また、ササ型など小型珪酸体の詳しい分類や組成の検討によって、植物相の復元や気候の推定が可能である⁵⁾ (第2表)。黒色土試料中のササ型を佐瀬ほか (1987) に従いタケⅠ型とタケⅡ型に分類した結果、その比率はほぼ同じで、若干タケⅠ型が多いことがわかった。これらはそれぞれ亜寒帯～冷温帯と暖温帯の気候植生を示すといわれる。これにキビ型珪酸体をとともなうことより、冷温帯から暖温帯の気候植生が推定される。ただし黒色土生成の時間幅の中での植生変化も考慮する必要がある、古墳盛土という試料の性格上詳細は不明である。

黄色土試料では植物珪酸体は少なく、ファン型・ササ型珪酸体などが少量含まれる程度であった。そのため植生・環境等の推定は困難である。

珪藻および古ベン毛虫類は、全試料を通じて極めて少なく、まれに見られる珪藻殻も小破片である場合がほとんどで、種の同定は困難であることが多かった。特に黄色土試料では、**A-4**を除き種の同定にいたるものは全く含まれていなかった。粒度の大きい地層中には微化石は含まれない場合が多く、黄色土試料で微化石が見られないのはこのためと考えられる。しかし黒色土試料のようなシルトあるいは粘土中には、一般に珪藻などの微化石が多く含まれる。この黒色土試料中に珪藻や古ベン毛虫類が少ないのは、本来これらが生息できないような環境下、つまり水の影響の少ない状態で生成されたものか、土層そのものの持つ性質や土層生成後の置かれた環境によって、二次的に失われたものかのどちらかと考えられる。ここでは、黒色土試料全体を通じて植物珪酸体が多く含まれること、珪藻では陸生珪藻と呼ばれる比較的水分の乏しい環境に生息する *Pinnularia borealis* や、同種の可能性が高い珪藻殻片が比較的多いことなどから前者であるものと思われる。しかし **A-6** では陸生珪藻は含まれず、比較的水分の豊富な環境に適応して生息する *Eunotia* 属の珪藻殻が多い。粒度も他試料に比べ小さく、肉眼的には腐植を多く含まないことなどから、この試料は二次的な堆積物である可能性も考えられる。**A-9, 10** では珪藻は全くといってよいほど含まれていなかった。これら2試料では水は関与していなかったものと考えられる。

b 岩石・鉱物起源の砂粒組成

全試料を通じて石英が優占するが、これは石英の硬度が極めて高く、土層生成の際の摩滅・風化に強いためであろう。ただし、備考欄に記した高温型石英は火山灰などに特徴的に含まれるもので、これを含む試料が何等かの形で火山性堆積物の供給を受けたことを示している。火山ガラスの存在も同様である。また火山ガラスは黄色土試料より黒色土試料にやや多く含まれる傾向があり、黒色土生成中に火山灰の降灰があった可能性も考えられる。この給源が同定できれば、黒色土の生成年代を推定するうえで大いに貢献するものと思われる。

c 腐植含有量

黄色土試料では腐植量が1～2と少ないが、黒色土試料では**A-2**（腐植量3）を除いて腐植量5あるいは5以上と、非常に多くの腐植を含んでいることが明らかとなった。**A-2** は他の黒色土試料に比べ、試料そのものの黒味もやや弱い。この試料は、古墳築造時の旧地表面である可能性もあり、他の黒色土試料とは別の生成条件を考えるべきかもしれない。

(3) 考 察

以上の結果をもとに、池下古墳の盛土に用いられた黒色土の性質を中心に考察を行う。

分析を行った黒色土試料は、陸上で生成された可能性が高いこと、非常に多くの腐植を含んでいること、また発掘現場での肉眼的な特徴などから、「いわゆる黒ボク土」であるものと考えられる（黒ボク土起源の二次堆積物を含む）。黒ボク土は、一般には火山灰土起源の草原土壌として理解されているが、東海地方では火山灰土の発達が悪く、非火山灰起源であると考えられている⁶⁾。また黒ボク土の分布も限られており、愛知県西部（尾張）地域にはほとんど知られていない⁷⁾。

第2表 植物珪酸体と気候帯との関係
(佐瀬ほか：1987) による

植物珪酸体組成における優勢な小型珪酸体	イネ科植物相の優勢種	気候帯
ウシノケグサ型	ウシノケグサ亜科	寒帯～亜寒帯
ウシノケグサ型 タケⅠ型（ササ亜型）	ウシノケグサ亜科 ササ属	亜寒帯
タケⅠ型（ササ亜型）	ササ属	亜寒帯～冷温帯
キビ型 タケⅠ型（ササ亜型）	キビ亜科 ササ属	冷温帯
キビ型	キビ亜科	冷温帯～暖温帯
キビ型 タケⅡ型（タケ亜型）	キビ亜科 メダケ属	暖温帯
タケⅡ型（タケ亜型）	メダケ属	

しかしながら池下古墳の黒色土中の岩石・鉱物起源の砂粒分析の結果をみると、現地性と考えられる黄色土試料との間に大きな差異は認められず、むしろ高温型石英や火山ガラスの存在など共通点が多い。このことから池下古墳で使用されていた黒色土は、古墳の周辺に広がる砂礫層を母体として生成されたと考えるべきであり、何等かの条件（人為的影響を含む）によりイネ科植物が繁茂する草原的環境を保つことで生成された黒ボク土であると考えられる。しかし現在では耕作などによって失われたのであろう。

またこの黒色土中の高温型石英や火山ガラスなど火山性の物質も、古墳基盤の砂礫層からの供給であるということになり、この黒色土も東海地域の黒ボク土同様、非火山灰土起源であるといえよう。

池下古墳に隣接する茶臼山古墳（名古屋市教育委員会により調査）においても墳丘に黒色土が用いられており、比較試料として同一の方法で分析を行った結果、池下古墳の黒色土試料とほぼ同じ結果が得られた（第1表中のCHサンプル）。また、使用石材においても両古墳は共通した結果が得られており⁸⁾、時期差はあるものの両古墳の共通性がうかがえる。

註1. 庄司士郎編『愛知県地学のガイド』 コロナ社 256p. 1988

2. 森 勇一・永草康次・楯真美子「茶臼山古墳の使用石材と産地」『茶臼山古墳』 名古屋市教育委員会 50-54. 1990

3. 鹿島 薫・高野繁昭・大西一博「多摩丘陵内の段丘堆積物の珪藻化石群集とその堆積環境」『助成集報』17 91p. (とうきゅう環境浄化財団) 東京 1989

4. 細野 衛・佐瀬 隆「黒土の成因をさぐる」『自然をしらべる地学シリーズ3 土と岩石』 東海大学出版会 117-122. 1986

5. 佐瀬 隆・細野 衛・宇津川徹・加藤定男・駒村正治「武蔵野台地成増における関東ローム層の植物珪酸体」『第四紀研究』26(1) 1-11. 1987

6. 松井 健『土壌地理学序説』 築地書館 316p. 1988

松井 健『土壌地理学特論』 築地書館 197p. 1989

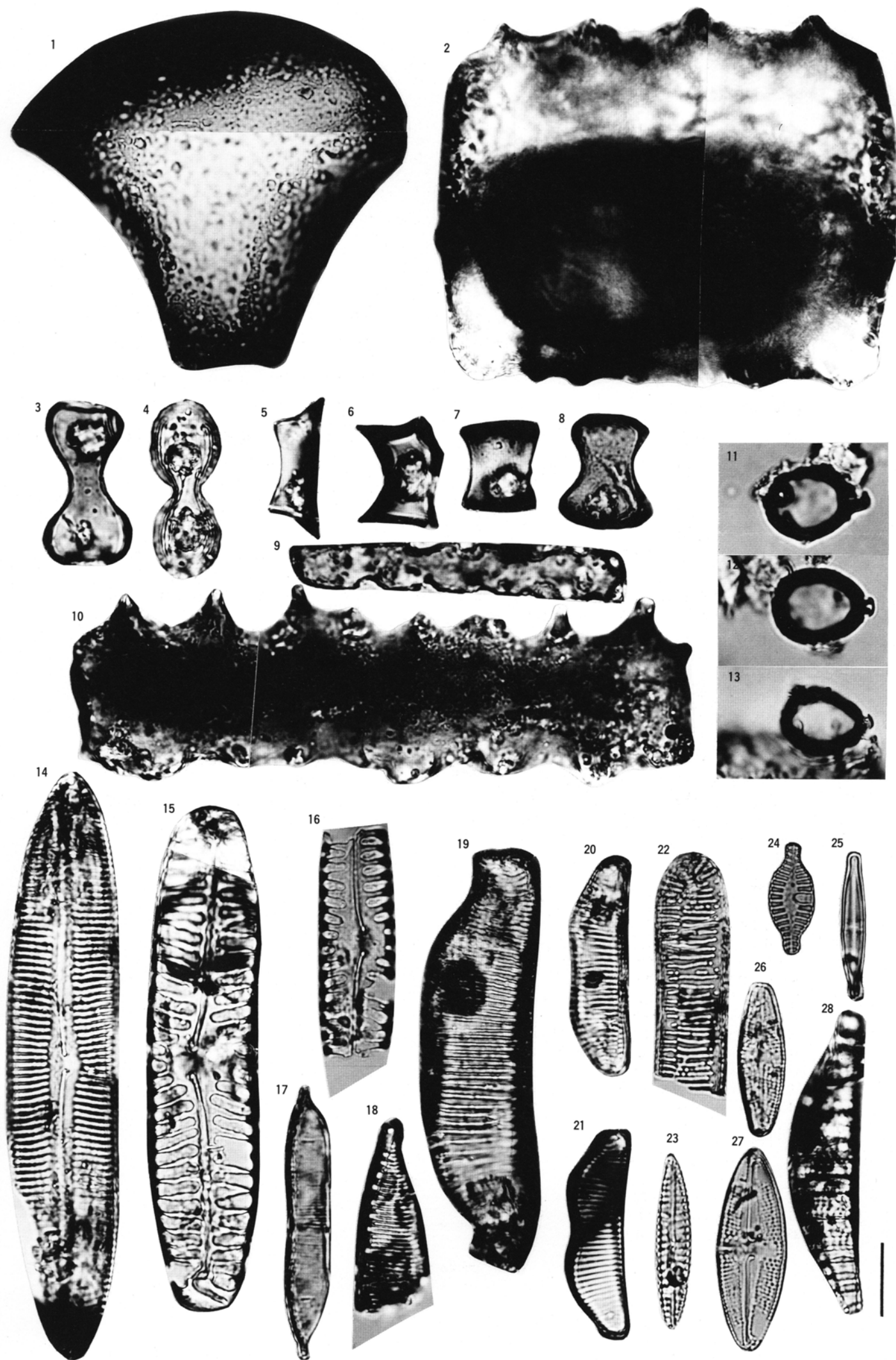
森 勇一・永草康次・楯真美子「愛知県諏訪遺跡及びその周辺地域に発達する黒色土の起源について」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第7集 諏訪遺跡・杉山端城跡』58-63. 1989など

7. 古川博恭「濃尾平野の沖積層—濃尾平野の研究その1—」『地質学論集』7, 39-59, 1972によると、濃尾平野北東部の鳥居松段丘（低位段丘）上に黒ボク土が存在することが報告されているが、詳しい分布は明らかにされていない。

8. 本書4章-1参照

図版説明

- 1・2：ファン型珪酸体（1：A-3、2：A-2）
- 3・4：キビ型珪酸体（3：A-2、4：A-5）
- 5・6：ササ型（タケⅠ型）珪酸体（A-2）
- 7・8：ササ型（タケⅡ型）珪酸体（7：A-2、8：A-4）
- 9・10：棒状型珪酸体（A-2）
- 11-13：古ベン毛虫類（11：A-2、12・13：A-3）
- 14：Pinnularia viridis（A-7）
- 15・16：Pinnularia borealis（15：A-3、16：A-2）
- 17・18：Hantzschia amphioxys（17：A-7、18：A-2）
- 19：Eunotia praerupta（A-7）
- 20：E. praerupta var. bidens（A-7）
- 21：E. diodon?（A-6）
- 22：E. flexuosa（A-10）
- 23：Cymbella perpusilla（A-7）
- 24：Achnanthes lanceolata（A-4）
- 25：A. minutissima（A-4）
- 26：Navicula mutica（A-7）
- 27：N. goeppertiana（A-7）
- 28：Rhopalodia gibberula（A-5）



第22図 池下古墳分析試料中の珪質微化石 (バースケールは10 μ m)

第5章 考 察

1. 尾張型埴輪について

(1) はじめに

尾張地域を中心にして円筒埴輪をここでまとめてみることにしたい。当地域の埴輪製作の概要については、かつてまとめる機会があったが、それ以降の資料の増加が著しく、当初見通した内容では不十分であり、再検討が必要になっていた¹⁾。

ところで尾張地域の埴輪は大きく二つに大別することが可能であった。すなわち外面調整タテハケを多用する一群の埴輪と、窖窯焼成で回転力を多用する一群の埴輪である。前者は畿内地方の初源的な埴輪技法の延長上に位置づけられるものであり、後者は須恵器の技法を応用した新しい埴輪製作技法である。当地域の円筒埴輪の製作は基本的には後者の埴輪製作をもって開始されたといっても過言でない。その意味からして、新たに普及した新技法を有する埴輪製作の成立過程とその背景についてまとめておく必要がある。

(2) 尾張地域の円筒埴輪概観

尾張地域出土の円筒埴輪には製作技法の系統を問題にすると、大きく三系統に分けて考えることができる。外面調整にタテハケを多用するタテハケ系埴輪 (A 系統) ・ B 種ヨコハケを採用する B 種ヨコハケ系埴輪 (B 系統) ・ ロクロ回転力を調整技法の基本に置く須恵器系埴輪²⁾ (C 系統) の三種である。これらの内 B 種ヨコハケの B 系統は畿内で生み出され各地に拡散した埴輪製作技法であるが³⁾、タテハケ系埴輪の A 系統については畿内系と判断できようが、その各地への伝播・受容の形態についてはなお不明瞭な部分があり、また畿内と同様な技法上の変遷をそのまま各地に無批判にあてはめることはいささか問題が多いように思われる。例えば当濃尾平野における古墳時代前・中期を通じて埴輪製作の基本はタテハケ系埴輪であり、その後 5 世紀中葉を中心に急速に須恵器系埴輪が普及するという構図が正しいのであり、B 種ヨコハケ系埴輪はその技法変換期にのみ部分的に採用され、須恵器系埴輪登場の環境を作りだす役割をもっていた様である。とにかく A 系統から C 系統への変換がおおきな画期であることにまちがいない。そこでここでは特に C 系統の変遷についてやや詳細にまとめておくことにし、A 系統についてはその概要を簡単に述べるにとどめ、詳細は別の機会に言及することにした。

尾張地域の埴輪製作を I ～ IV 期に区分する。I 期は 4 世紀後半を中心とする時期で、A 系統のタテハケ系埴輪による埴輪製作と壺型埴輪の採用の時期とすることができる。II 期は 5 世紀初頭～中葉までの間で B 種ヨコハケ系埴輪の登場が 1 つの目安となる。III 期は 5 世紀中・後葉を中心とし、須恵器系埴輪 (C 系統) の出現を契機にますます各系統の埴輪製作技法が錯綜する時代である。しかし基調としては A 系統の埴輪に B 系統の埴輪が参画し、やがてその中から C 系統の須恵器系埴輪が生み出されやがて主導権を握るという図式が存在する。それは後に言及する「尾張型埴輪」の誕生とその画一的製作環境の確立につながる道でもある。さて最後の IV 期は 5 世紀末葉～6 世紀前葉の時期であり、C 系統の埴輪全盛の時代とその急速な終焉である。尾張型埴輪の登場は III 期 1 段階にあり、IV 期に至

り古墳に採用される製作技法の系統がほぼ統一されC系統の尾張型埴輪のみになる。その時期は東山11号窯期⁴⁾の内に有る。

(3) 尾張型円筒埴輪

製作技法・形態の共通性と一定の分布域(第32図)をもつ一群の埴輪を尾張型円筒埴輪⁵⁾として設定する。以下その特色を記述する。

形態

尾張地域の円筒形埴輪(Ⅲ期以降)は2凸帯3段の形状をもつものが基本形であり、Ⅰ期・Ⅱ期のタテハケ系埴輪を除くと形態には大きく二タイプのまとまりが認められる(第23図)。すなわち口径が大きいのに比べて器高が低い逆台形の形状をもつ形態Aと、比較的口径と底径の差が小さい筒状の形状を持つ形態Bである。逆台形の形態Aは最上段(第3段)が幅狭で最下段(第1段)が高いという特色も見られる。それに変わって筒状の形態Bは最上段が大きいという違いが認められる。尾張型埴輪は基本的には2凸帯3段埴輪で形状が筒状を呈し最上段が大きい形態Bを採用する。形態Aは一本松古墳に代表されるようにB種ヨコハケ系埴輪のB系統に用いられる形態である。

技法

製作技法の特色は一言でいえば須恵器製作技法の応用にあるということである。ロクロ回転動作を積極的に用い、各整形・調整用に工具を多用する点も見逃せない。

〈設定技法〉

底部設定は針金状の工具を用いてあらかじめ底径を設定し、その上に粘土紐を積み上げる。底部底面をよく観察すると一条の刻線あるいは極微妙な弧状の段が観察される場合がある。これらはこうした底部設定技法の痕跡と想定できよう。また特に円筒の素形が完成していない段階に設定用の針金状工具を離脱させるために最下段にズレ(工具離脱痕)のような痕跡が残ることがある。こうした底径を予め工具によって目安をつける技法は淡輪技法と基本的に同一であり、そこには工具の違いが存在するのみと考えられる。尾張型埴輪に共通するこれらの技法を底部設定A(味美技法)と呼び淡輪技法を底部設定Bとしておいた。底部設定Aには外方へ工具を離脱させるA1と離脱させないA2が見られる⁶⁾(第23図)。

凸帯設定は凸帯の貼付け位置を設定するもので、工具による一条の凹線(第18図68・69)である場合が多く、中にはヨコ指ナデも観察される。

〈調整技法〉

調整技法には内面・外面・凸帯・底部の各特徴的な動作が認められる。

○外面調整 タテハケ後ヨコハケという手順が確立している。タテハケは動作単位が縦方向に長く、ほぼ垂直に施されることが多いのであり、各乾燥をまじえた小工程単位で完結して施される。ヨコハケはロクロ回転動作を積極的に利用させる「回転ヨコハケ」で、その動作単位は不連続で長い⁷⁾。しかし第1段・最上段においては不連続的で短いという傾向が見られる。段間の調整動作は基本的には下から上に3回以上施されることが多い。

○内面調整 ヨコ方向の動作が基本で、ヨコハケ・ヨコ指ナデが多用される。手順としてはナナメ指ナデ(整形用)後ヨコ動作(調整用)が考えられ、時代が新しくなるにつれ整形用ナナメ指ナデが表

面化する傾向がある。こうした内面調整の基本的な手順の動きが、尾張型埴輪の変遷を見通す大きな手掛りとなる。

○凸帯調整 調整用に工具を使用することが基本であり、その後ヨコナデを施すものも認められる。凸帯側面に凹線・段が観察できる場合が多く、板状・棒状工具による調整が想定できよう。なお、凸帯貼付け時の整形技法としては、タタキを使用する場合も想定できる（第30図70）。

○底部調整 底部に改めて（おそらく倒立後）調整を加えるものとして、ケズリ・指頭圧痕・ナデがある。ケズリはその動作が手動的なものと、回転ケズリの違いがあり、底部内・外面に用いられる。指頭圧痕は調整終了後倒立して底部を指で挟みこむようにして施される。（第26図32・35）ナデは板状工具を利用する場合が多く、この場合は倒立を想定することはむしろ少ないであろう。すると底部調整というより素形整形・調整手順に組み込まれた手法と考えたほうがよさそうである。

〈2分割倒立技法〉

尾張型埴輪の基本形である2凸帯3段円筒形埴輪以外の3凸帯以上の埴輪には特に倒立技法が認められる場合がある。円筒下部の3段あるいは4段分の素形を整形した後、大きく倒立させその上部に改めて粘土紐を積み上げるものである。今のところⅣ期以降の大型埴輪に採用される例が多い（第28図55・第29図61）。

〈乾燥面タタキ整形技法〉

粘土紐積み上げの基本単位（乾燥単位）に見られる乾燥面周辺と分割倒立周辺にタタキ手法を施すものがある。外面には平行タタキが残り、内面に同心円が残存するものも認められる。（第30図69）多くの場合整形時のこれらの技法の痕跡は調整用のハケメにより不明瞭になる場合が多いが、Ⅳ期以降になるとタタキが表面化する例が多い。

分類

尾張型埴輪は大きく3つに分けることができる。まず2凸帯3段円筒形埴輪（C1型）とそれ以外である。後者については全形が推定できる資料が少なく細分が現状では困難であるが、しかし2分割倒立技法を用いるもの（C2型）とそうでない資料（C3型）とに大別が可能である。2凸帯3段C1型は特に第1段を中心に5種類に細分できる。内外面回転ヨコハケを多用し底部はヨコ板ナデ・ケズリを持つA類、底部に指頭圧痕を施すB類、外面にズレ（底部設定離脱痕）を明瞭に留めるC類、内面に指ナデが表面化し底部にケズリを持つがズレが見られないD類、内面に指ナデが表面化し底部調整を行わないE類に分割する。

A・C・D・Eは基本的には時間的変遷を示している。

（4）類型と変遷

ここでは窖窯焼成埴輪の変遷を基本として考えることとし、特にその内の須恵器系埴輪（C系統）としての尾張型埴輪の類型とその変化を中心にまとめておくことにする。ところで濃尾平野の埴輪変遷については改めて別稿で述べる予定であるが、その概要は前述したように以下になるだろう。

濃尾平野の埴輪をⅠ期～Ⅳ期に区分し、B種ヨコハケ系埴輪の埴輪の登場をもってⅡ期とし、尾張型埴輪の確立をもってⅢ期と考える。

Ⅲ期

1段階 A・B・C各系列の埴輪が錯綜し、多様な埴輪製作技法が用いられる。その内須恵器系埴輪（C系統）としての尾張型埴輪の登場を1つの画期と考える。タテハケ系の埴輪は外面タテハケ、内面タテ指ナデが基本で、底部調整はほとんど行わない。その他外面にナナメハケ（整形用）の技法が表面化する系統の埴輪（A3）も認められるようになる。B種ヨコハケ系の埴輪は外面ヨコハケの休止動作が著しい傾斜をもち始めるようになり、内面は尾張型の影響を受けヨコ方向の動作が目立つようになる。さて尾張型の円筒埴輪は形態及び技法に統一性がまだ認められず、A・B系の埴輪との相乗効果現象が見られる。能田旭古墳に見られるように、形態を一本松古墳のB系埴輪に求めつつ内外面調整にはヨコ回転動作を多用するといった不安定な製作法が見られ、こうした資料に尾張型埴輪誕生の過程をかいま見ることができる（第26図28）。なお第1段外面に回転ヨコハケが見られない資料が多い。底部のケズリが見られないものが多く、施される場合でも手動的なケズリとなる。凸帯は1：1凸帯であるが（第23図）、A・B系統の埴輪はその限りではない。

共伴する須恵器は東山111号窯期に所属するものと考えられる。

2段階 A・B系統の埴輪は残存するも、埴輪の主体は尾張型埴輪に移行する。タテハケ系（A）の埴輪は整形用ナナメハケを多用する一群の埴輪（A3）が主体となり、B種ヨコハケ系（B系）は西出古墳のものに認められるように、ヨコハケの休止動作が崩れ、弧状を呈し、またヨコハケ後タテハケという手順そのものも形骸化する（第26図36）。こうした現象は尾張型埴輪の技法を追認する形でA・B系統の製作法事態は崩壊していく過程と受けとめられよう。尾張型埴輪にはA・B類としたものが見られ、形態は2凸帯3段の形態Bに統一される。内外面調整は全器壁面をヨコ回転動作により埋め尽くすような技法に統合される。尾張型埴輪A類は内外面調整に回転ヨコハケを多用し、底部にはヨコケズリ・ナデを施すもので、B類は底部に指頭圧痕が見られる資料である（第26図32・35）。凸帯の形状は2・3段階を通じて1：2凸帯が主体である。朝顔形埴輪は一本松古墳に見られるような円筒部上段が低く強く彎曲するものから、やや高く緩やかに内彎するものになる。また花状部は大きく外方に開くものに変化する。

共伴する須恵器は城山2号窯期に所属する資料が多い。

3段階 尾張型埴輪以外の系統の資料はほとんど認められない。尾張型埴輪はA類からC類に変化する。内外面の調整は依然として全器壁面ヨコ回転動作で占められるが、底部調整に回転ヨコケズリが盛行し、味美技法（底部設定A）が表面化する（第23図）。底部外面周辺ズレ（底部設定A離脱痕跡）が観察できる資料が多く、尾張型埴輪C類の指標となるとともに3段階の特色でもある。朝顔型埴輪は基底部・花状部にタタキが見られ、整形段階のタタキ技法がすでに表面化し始めている（第27図45）。

共伴する須恵器は尾張型須恵器有蓋高杯^⑧の体部・天井部が彎曲化し、東山11号窯期古相に所属するものである。

Ⅳ期

1段階 Ⅲ期からⅣ期への変化は2分割倒立技法を有する大型埴輪（C2型）の成立と、尾張型埴輪の特色である全器壁面ヨコ回転動作の原則が崩れ初め、内面調整での整形技法であるナナメ指ナデの表面化を基調とする。底部の味美技法は明確であるが、ズレが見られない尾張型埴輪D類に変化する。

内面の調整は特に下半部にヨコハケ・ヨコ指ナデが省略されるためナナメ指ナデが多く認められるようになり、Ⅳ期1段階以降の指標となる。朝顔型埴輪は花状部が上方に大きく拡張する状態になる。凸帯は池下古墳に見られるような突出高が4mmで側面幅12mmの偏平な1:3凸帯が多く見られるようになる。但しC2型の埴輪はほぼ一貫して1:1凸帯であり、凸帯の形状は円筒形埴輪の各類型により異なることになる。

須恵器は東山11号窯期新相の資料が共伴する。

2段階 尾張型埴輪2凸帯3段(C1型)は内面調整にハケメの使用が口縁部周辺に集中する傾向があり、ナナメ指ナデが主体的に観察されるようになる。また底部には味美技法が不明瞭になり底部調整を省略したE類が増加する。倒立技法を持つ大型円筒埴輪は多く生産されるようであり、その多くの資料はこの段階に集中すると考えられる。内面にはヨコハケ以外にナナメハケが観察できる。C1・2型を含めて整形用の技法が表面化する傾向強い。例えば外面の乾燥面タタキ技法・凸帯貼付け時のタタキ・内面ナナメ指ナデ等である。こうした傾向が2段階の特色である。

須恵器は有蓋高杯の天井部が著しく高い形状に変化し、口径が拡大する器種が共存する時期で、下原2号窯に類似する資料が多く認められる。

3段階 形状の判明する資料が少ないため明確でないものの、その概要は内面調整にハケメが消失する傾向が強く、指ナデをもって完結する場合が多いようである。底部調整は手動的で極めてすくない。2分割倒立埴輪(C2型)では外面の回転ヨコハケを一部省略する場合も認められるが、基本的には外面調整は最終段階に至っても変化はない。

須恵器は東山61号窯期の資料と共伴する。

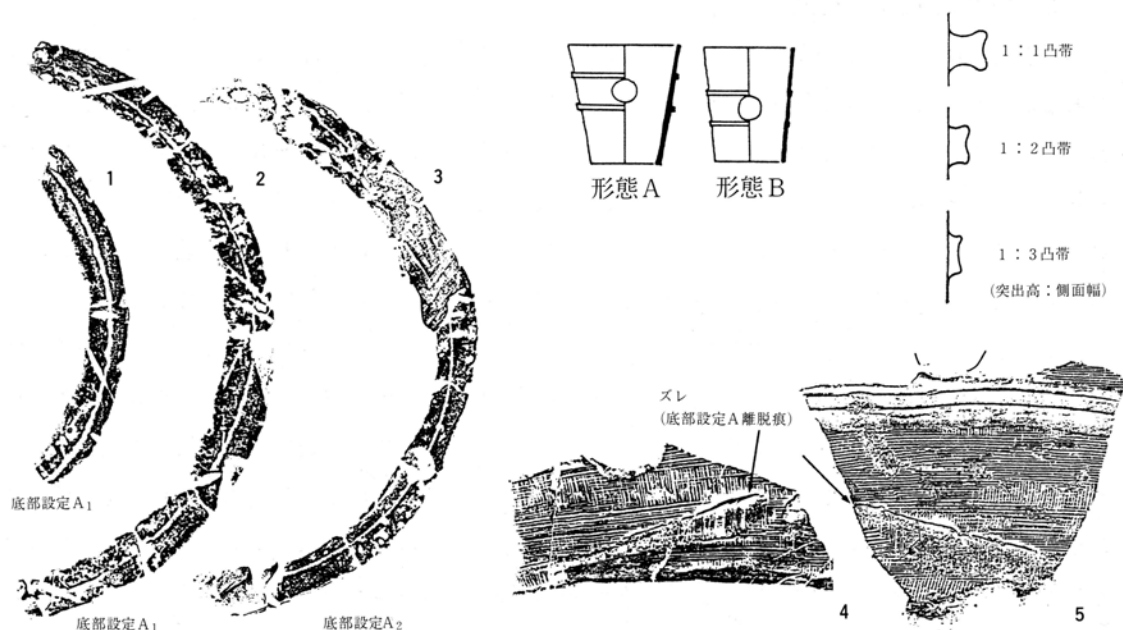
(5) 須恵器系埴輪の問題

尾張型埴輪について今一度まとめておくとともに、若干の問題点を整理しておこう。まず味美技法であるが、例えば池下古墳では底径20~21cmで、設定用工具の径(以下工具径)が17~18cmを測る資料が多い。また松ヶ洞8号墳では底径20~21cmと18.5cmの2者が見られ、前者が多く存在し、また工具径は19.5cmと17cmがそれぞれ見られる。これらの測定値から底径と工具径に1つの関係が存在していることを示唆しているようである。つまり底部設定用の工具は底径のある程度の規格を意識したものであると理解したいのである。それはすなわち円筒埴輪の一つの規格化を志向したものと考えてよいのではなかろうか。ただしそれは製作者側の論理であって発注者側のものではなさそうである。なぜならば消費地としての古墳には、ある程度の共通した形態と規模を有する埴輪が見られるものの厳格な規格統一はなさそうだからである。この点を踏まえると味美技法は製作者側の製作工程上生み出された技法と解釈してよかろう。ところで尾張型埴輪の特徴的技法はそのことごとくが須恵器製作技法からきていることは回転ヨコハケ・タタキ1つを取り上げてみても明らかである。すると大きさの目安としての規格化・製品の分割技法等は須恵器製作技法上の基本的考え方と共通する。こうした諸点を統合すると尾張型埴輪の成立には窖窯焼成B種ヨコハケ系からの発展を考えることはできないのであって、そこには明らかに別系統の技法の導入に触発されて生み出された、技法上の発明があると理解すべきものである。それは須恵器製作と須恵器焼成に認められる考え方の導入であることは改めというまでもないことであろう。新たな須恵器技法に基づく新しい埴輪製作技法はこうして須恵器製

作の「思想」を大きく取り入れたものとなった。分割・規格・ヨコ回転動作にその底流を見ることができる。須恵器における製品の規格化という発想が味美技法を生み出したことになる。すると淡輪技法と総称されている一群の埴輪にも同様な思想が内包されているものと考えてもよい。畿内地域の伝統的な土器製作技法から発展した埴輪製作を、畿内系埴輪製作技法と位置づけられるとすると、これらの尾張型埴輪や淡輪技法を用いる一群の埴輪は別系統の埴輪としてあらたに捉え直す必要性がでてくる。単に「須恵器工人」の参与という面のみの問題ではない。とりあえずここでは後者を須恵器系埴輪として大きくまとめておくに留めておこう。⁹⁾

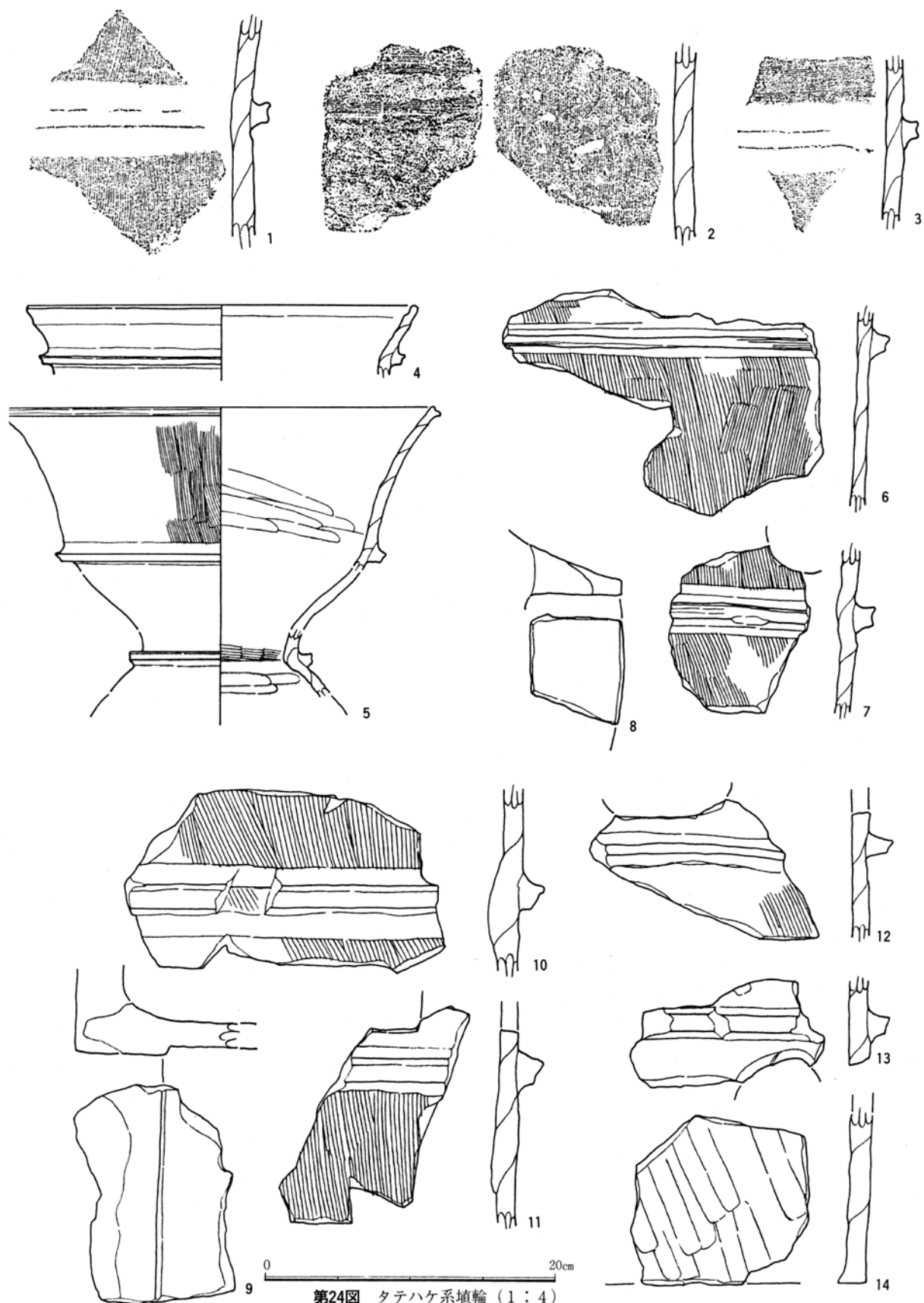
最後に尾張型埴輪の特色についてまとめておく。

1. 味美技法・ヨコ回転動作・倒立・乾燥面タタキ・底部ケズリこうした技法の組み合わせによる一群の埴輪を尾張型埴輪とする。これらの埴輪は一定の分布領域を保有する。
2. 尾張型埴輪にも形態と技法により3型が存在し、各々の変遷が見られる、2凸帯3段形態Bの基本形（C1型）、1：1凸帯に固執する2分割倒立技法の大型埴輪（C2型）、それ以外の3凸帯以上の埴輪（C3型）。
3. 尾張型埴輪は特に内面調整の変化を中心に6段階の変遷が考えられ、成立は遅くとも東山111号窯、終焉を東山61号窯におく。陶邑ではTK216～TK10型式の間に併行するであろう。



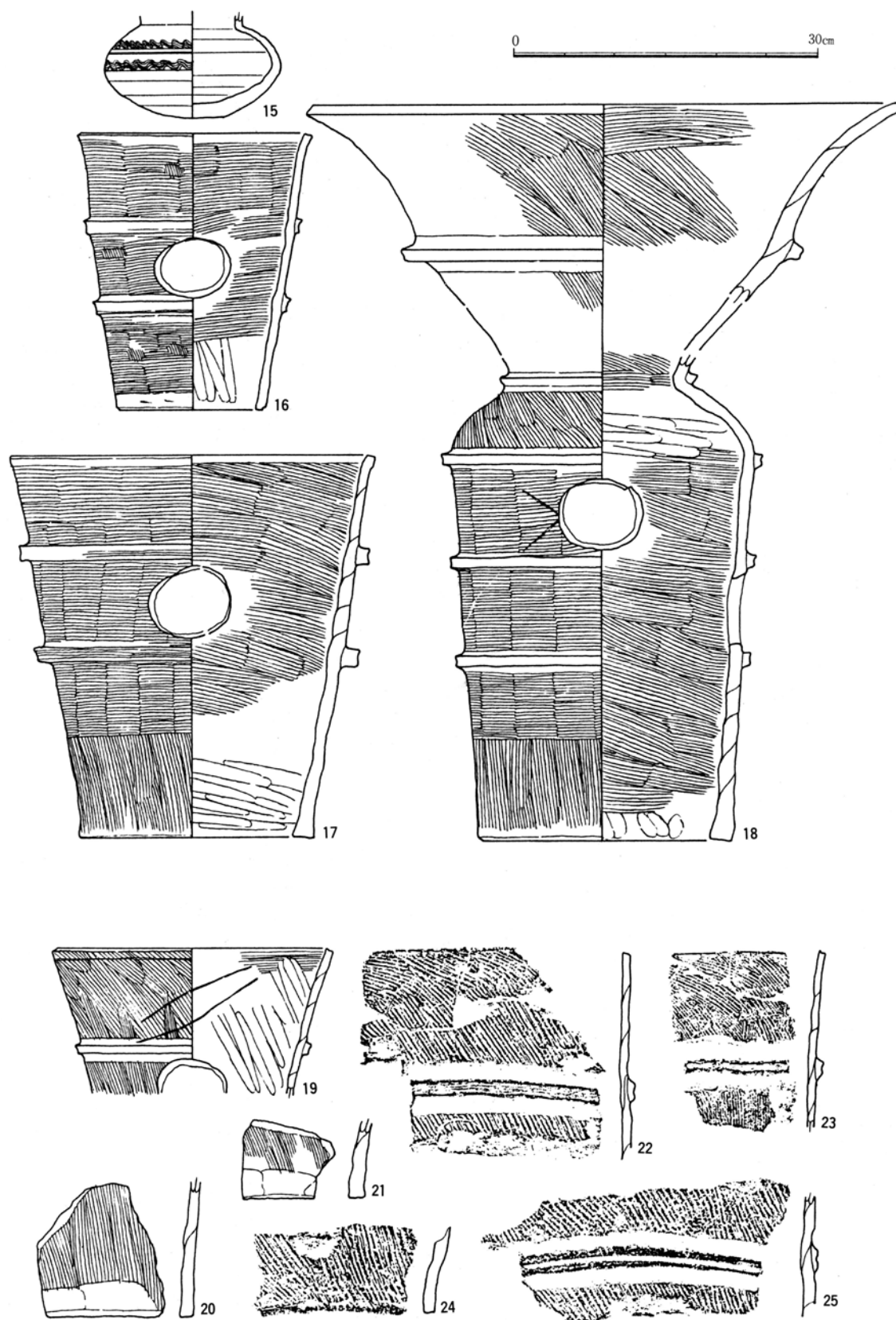
第23図 形態・味美技法

(1 能田旭古墳, 2～4 塔の越遺跡SD07, 5 城山2号窯)



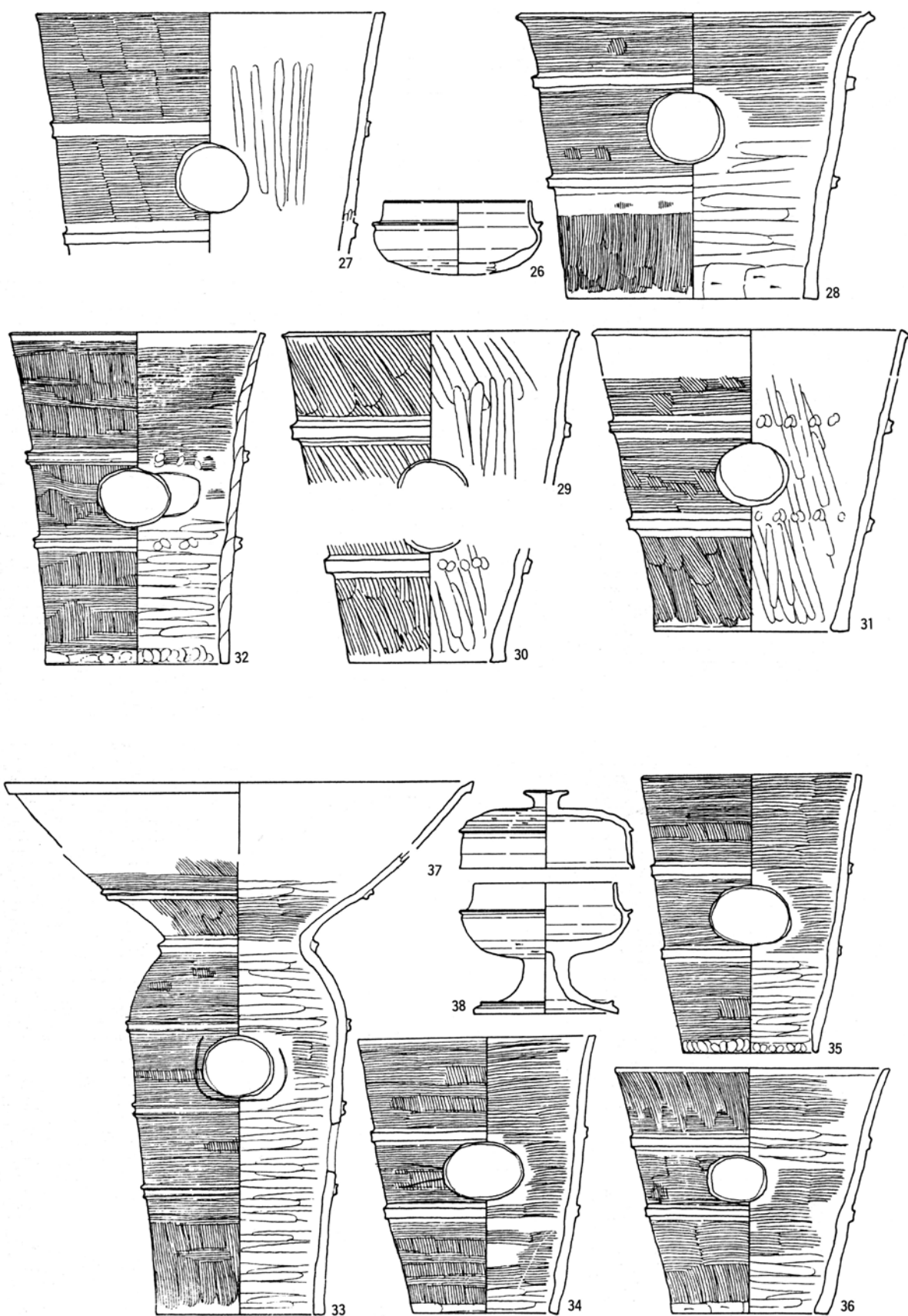
第24図 タテハケ系埴輪 (1:4)

1～3 石枕上ケ遺跡, 4～7 川東山4号墳, 8～14 八高古墳(1～7 有黒斑)



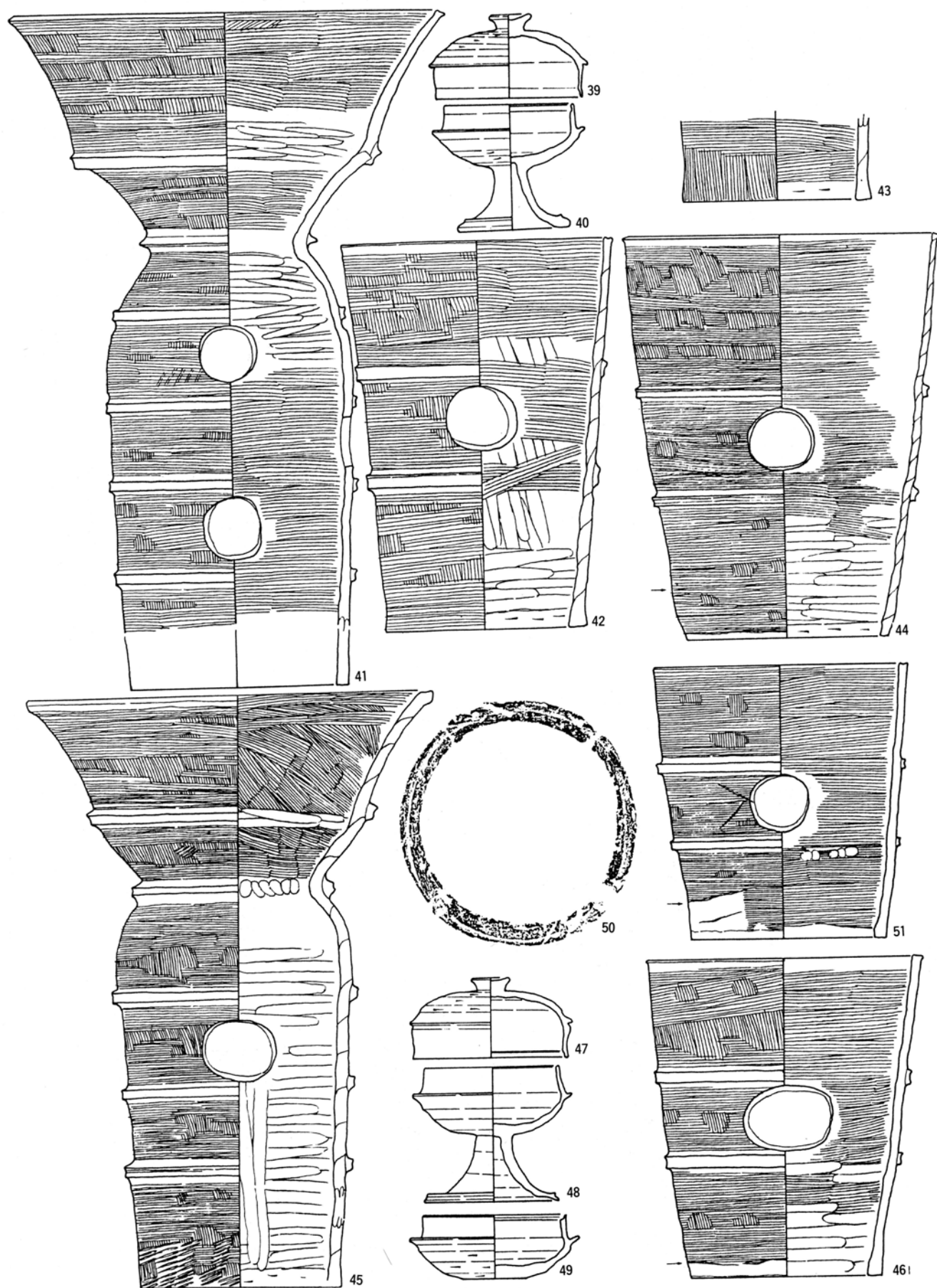
第25図 B種ヨコハケ・タテハケ系埴輪 (15・20~25 1:4, 16~19 1:6)

15・16 琵琶ヶ峯古墳, 17・18 一本松古墳, 19 離レ松遺跡9号, 20~25 離レ松遺跡6号



第26図 Ⅲ期 (36・37-38 1:4, 他は1:6)

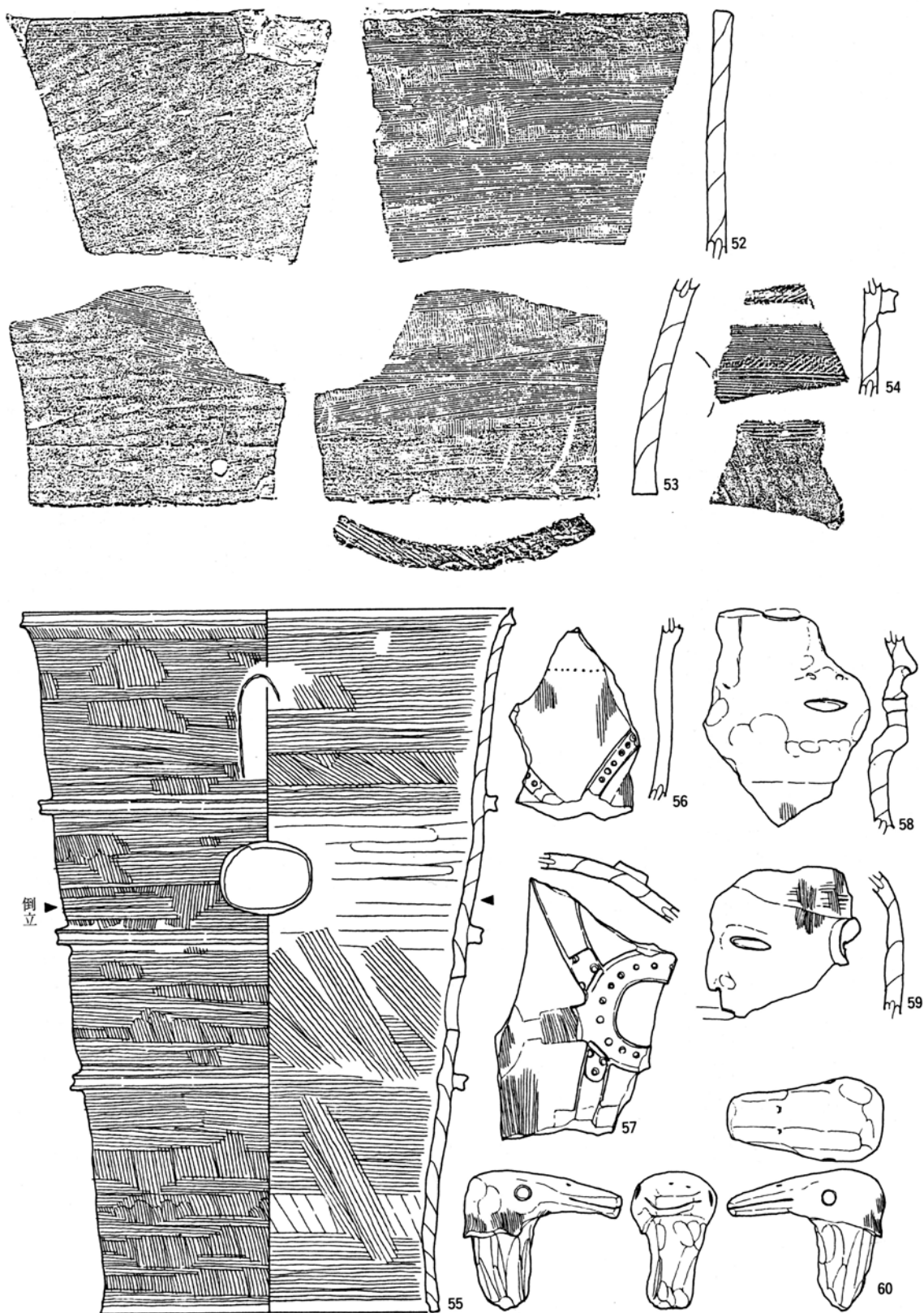
26~31 能田旭古墳(Ⅲ-1), 33~38 西出古墳(Ⅲ-2), 32 東古渡町遺跡3次SD03(Ⅲ-3)



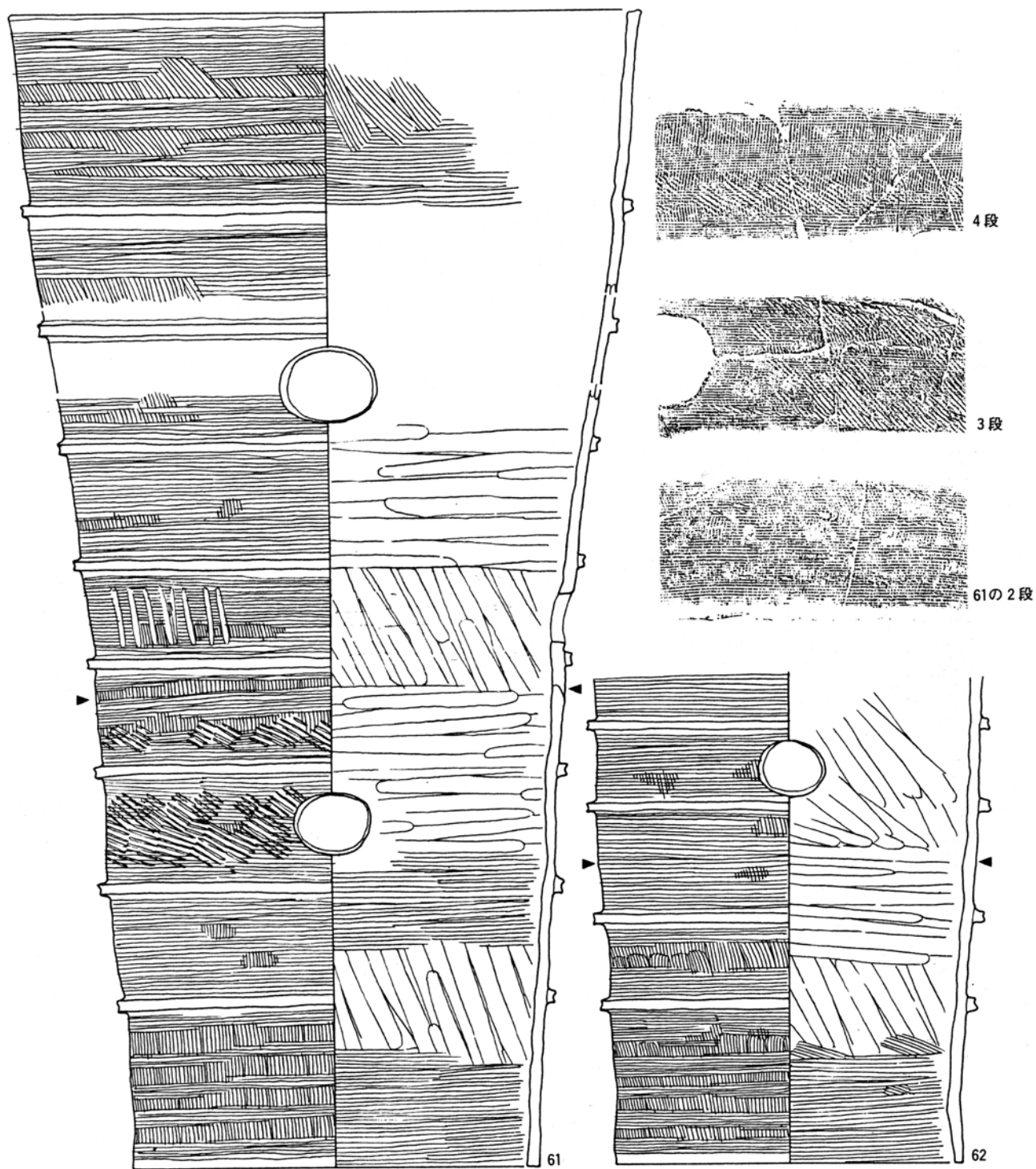
第27図 Ⅲ-3、Ⅳ-1期 (39・40・47~50 1:4, 他は1:6)

39~43 池下古墳(Ⅳ-1), 44 稲沢大塚古墳(Ⅲ-3), 45~49 塔の越遺跡SD07(Ⅲ-3)

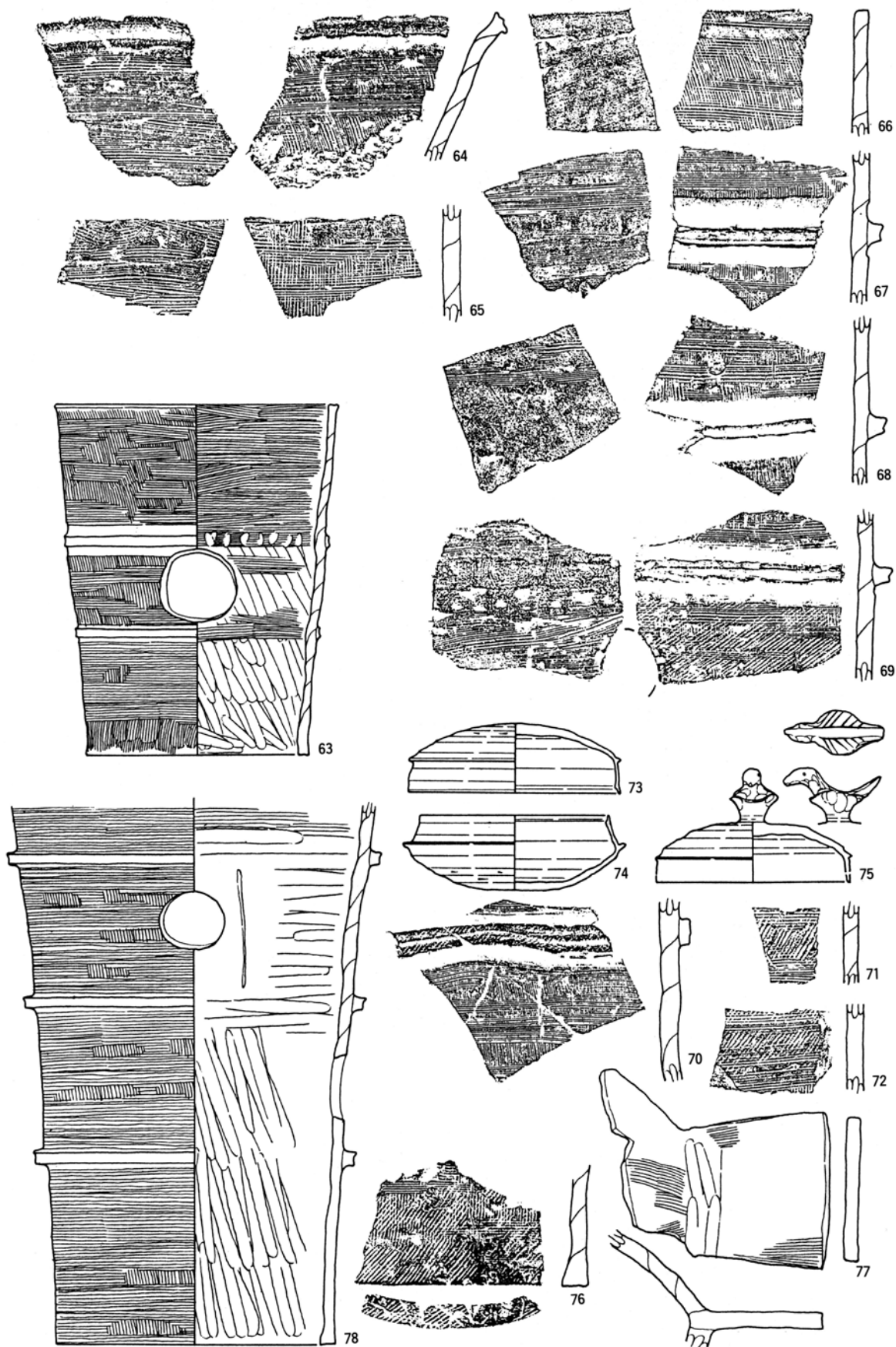
50・51 松ヶ洞8号墳 ※矢印は「ズレ」の痕跡



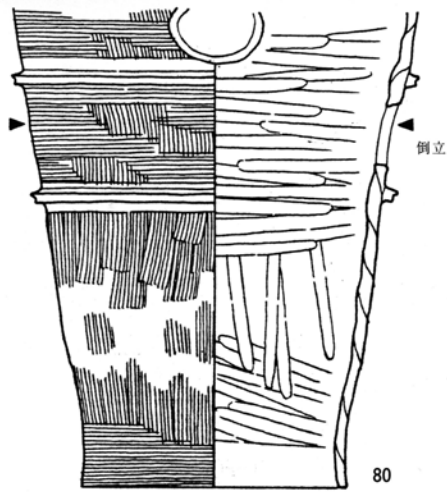
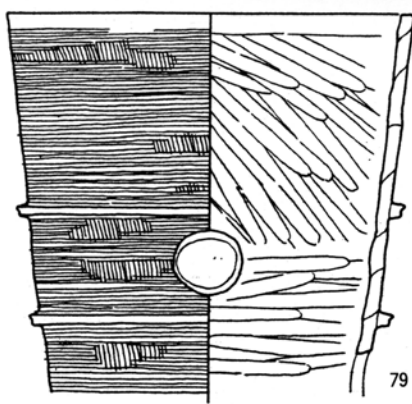
第28図 味美二子山古墳出土埴輪 (IV-2期) 55は1:6, 他は1:4



第29図 断夫山古墳出土円筒形埴輪 (1:6)



第30図 IV-2・3期 (63・78は1:6, 他は1:4)
 63 東大久手古墳(IV-2), 64~75 洲原山古墳(IV-3), 76~78 守山瓢箪山古墳(IV-3)



第31図 IV-3期 (79・80 亀山1号墳 1:6)



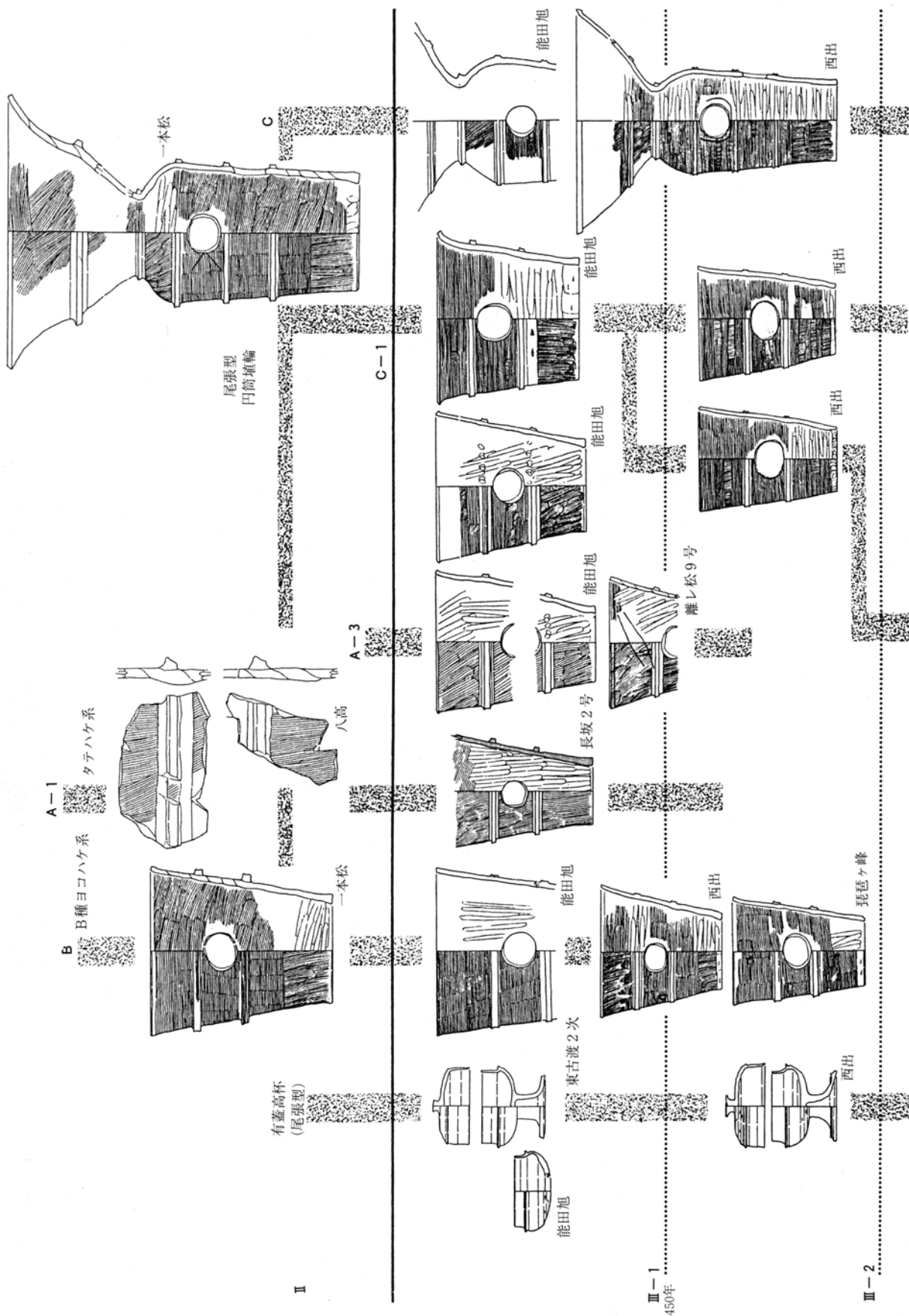
第32図 須恵系埴輪の分布

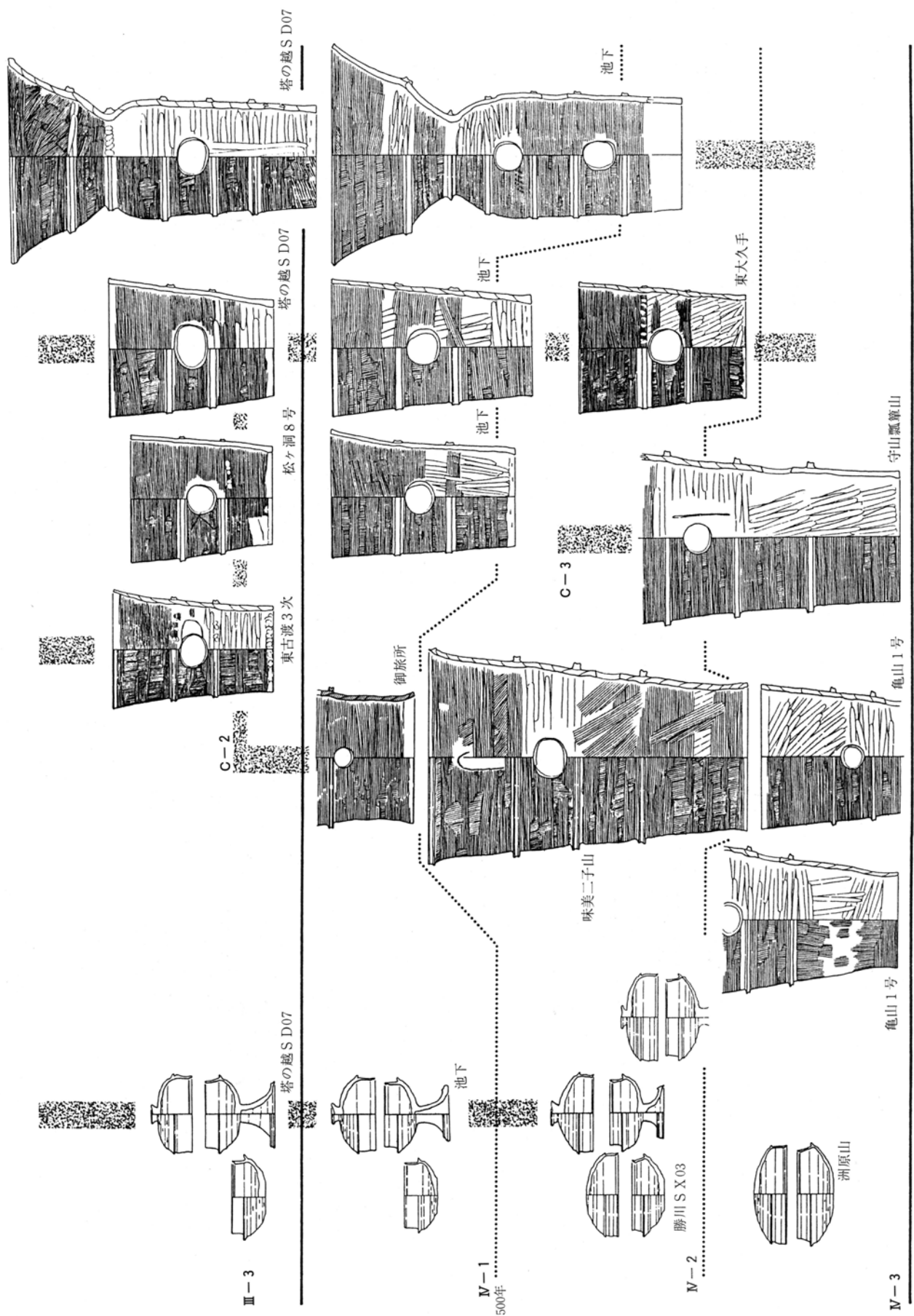
(●は尾張型埴輪, ▲は淡輪技法を有する埴輪)

〈尾張〉 富士塚古墳(江南市) 能田旭古墳(師勝町) 毛無塚古墳(一宮市) 稲沢大塚古墳(稲沢市) 西出古墳(岩倉市) 塔の越遺跡(稲沢市) 蜂須賀遺跡(美和町) 定納遺跡(八開村) 土田遺跡(清洲町) 本地大塚古墳(瀬戸市) 勝手塚古墳(守山区) 東大久手古墳(守山区) 池下古墳(守山区) 瓢箪山古墳(守山区) 松ヶ洞8号墳(守山区)	東谷山3号墳(守山区) 小幡南島古墳(守山区) 先生塚古墳(守山区) 大須二子山古墳(中区) 東古渡遺跡(中区) 断夫山古墳(熱田区) 白鳥古墳(熱田区) 白山神社古墳(春日井市) 二子山古墳(春日井市) 御旅所古墳(春日井市) 勝川大塚古墳(春日井市) 洲原山古墳(春日井市) 両宮社古墳(春日井市) 印場大塚古墳(尾張旭市) 長坂6号墳(尾張旭市)	〈三河〉 根川古墳(豊田市) 青木原2号墳(豊田市) 豊田大塚古墳(豊田市) 上野神社古墳(豊田市) 高根1号墳(豊田市) 亀山1号墳(岡崎市) 東長嶺1号墳(岡崎市) 外山1号墳(岡崎市) 東山1号墳(岡崎市) 東山2号墳(岡崎市) 石神町古墳(岡崎市) 青塚古墳(幸田町) 船山古墳(御津町) 赤坂天王山古墳(御津町)	〈美濃〉 南屋敷西古墳(大野町) 南出口古墳(大野町) 美佐野高塚古墳(御嵩町) 宮ノ脇9号墳(可児市)	〈その他〉 郷ヶ平6号墳 (静岡県浜松市) 吉影D-3号墳 (静岡県浜松市) 岸岡山(三重県鈴鹿市) 中川65号墳 (福井県金津町)
---	--	--	---	--

第3表 尾張型埴輪出土地一覧

(〈その他〉は尾張型あるいは近似する技法を有するもの)





第33図 磐窯焼成埴輪の変遷
(一部を除き埴輪 1:12, 須恵器 1:8)

註1. 赤塚次郎「尾張としてのほにわ製作」『考古学の広場』第1号 1983

I期Ⅱ期をそれぞれ2分割し、ここではI～Ⅳ期を設定した。また「志向A」とした一群の埴輪を改めてここではC系統として取扱っている。

2. ここであえて系統を重視する意味は、畿内地域からの埴輪の受容の問題を系統的に捉えようとするからであり、またその時点での地域的な変容を明らかにしたいからである。したがって用語は仮称としてここでは用いる。
3. B種ヨコハケ技法はおそらく佐紀盾列古墳群内で生み出され拡散する技法と考えられる。「コナベ古墳前方部南外堤」『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和55年度 1980
4. 以下編年の基準を下記の論考による。ただし東山48号窯についてはここでは城山2号窯期の古相として捉えておく。また東山11号窯は新古相に分割し、61号窯との間に一型式設定する。現状では下原2号窯。
斎藤孝正「猿投窯成立期様相」『名古屋大学文学部論集』LXXXVI史学29 1983
斎藤孝正「東山61号窯出土の須恵器」『名古屋大学総合研究資料館報告』第2号 1983
5. 尾張地域に多く見られる底部ケズリを以て、一つの地域的特色と考えた川西1978の卓見がある。ここではケズリに固執せず製作技法全体の問題として「尾張型円筒埴輪」（以下尾張型埴輪）を提唱する。
川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978
川西宏幸「古墳時代政治史序説」1988
6. 赤塚次郎「断夫山古墳をめぐる諸問題」『断夫山古墳とその時代』第6回東海埋蔵文化財研究会 1989
底部設定Aを味美技法と呼ぶ。A1は底部底面の断面が段状になり、外面に向かって工具が抜き取られた痕跡が認められる。A2は断面が工具痕として凹線が見られるのみで、工具の引き抜きが認められないもの。
7. 須恵器技法の用語を採用する。回転ハケメ・回転カキメ・川西1978のC種ヨコハケとはほぼ同様なものか。ヨコ方向を強調する。
8. 埴輪と相伴する資料として、「有蓋高杯・宇田型甕」のセットが認められる場合が多い。そこで編年の基準としてここでは尾張型有蓋高杯の変化を使用する。なお尾張型須恵器については下記の論考による。
岩崎直也「尾張型須恵器の提唱」『信濃』第4号 1987
9. 今後こうした「底部設定」技法に基づく須恵器系埴輪の確認が各地で増大するものと思われる。そこに新技法の発明によってまきおこる「共鳴現象」（赤塚『廻間遺跡』1990）を予見したい。

資料の実見・実測に際し下記の方々に御配慮を賜わった。記して感謝を表したい。

梶山勝・野澤則幸・木村有作・北條献示・日野幸治・服部哲也・市橋芳則・伊藤達也・鈴木敏則・服部信博・川崎みどり・伊藤久美子・大下武・梅田純代

資料

石枕上ヶ遺跡（江南市石枕）『江南市史』資料4文化編1983現状で尾張最古の埴輪。

川東山4号墳（守山区松坂）15m円墳？『守山の古墳』1966

八高古墳（瑞穂区瑞穂）70m前方後円墳『熱田区白鳥古墳』1987

琵琶ヶ峯古墳（瑞穂区田辺通）

一本松古墳（昭和区御器所）36m円墳

離レ松遺跡（守山区城土）『守山の古墳』1969

能田旭古墳（師勝町能田）43m帆立貝式『能田旭古墳』1986・89

西出古墳（岩倉市大山）18m方墳『西出古墳』1983

東古渡遺跡（中区金山）『東古渡遺跡』1989・90

池下古墳（守山区小幡）40m前方後円墳『守山の古墳』1969

稲沢大塚古墳（稲沢市大塚）40～50m円墳『大塚古墳範囲確認調査報告書Ⅱ』1984

塔の越遺跡（稲沢市長野）17m円墳？『塔の越遺跡発掘調査報告Ⅱ』1988

松ヶ洞第8号墳（守山区吉根）8.4m方墳『守山の古墳』1963

味美二子山古墳（春日井市味美）95m前方後円墳（注1）に同じ『春日井市史』資料編

断夫山古墳（熱田区旗屋）150m前方後円墳『白鳥古墳第Ⅱ次発掘調査報告書』1987 野澤則幸氏図面に加筆修正（61）

東大久手古墳（守山区上志段味）38m帆立貝式『愛知県重要遺跡指定促進調査報告Ⅶ』1983

洲原山古墳（春日井市勝川）40m円墳『春日井市遺跡発掘調査報告第4集』1970

瓢箪山古墳（守山区守山）63m前方後円墳『愛知県重要遺跡指定促進調査報告Ⅶ』1981

亀山1号墳（岡崎市丸山）前方後円墳『新編岡崎市史』史料考古1989

2. 池下古墳の埋葬施設とその位置づけについて

(1) はじめに

池下古墳について考察を進めるうえで、まず最初に考えなければならないのは、すでに失われてしまった埋葬施設の構造である。そこで本項では、今回の調査であらたに判明した事実や、かつて池下古墳の埋葬施設について若干の復元を試みる。そして、そのうえで尾張における池下古墳の位置づけを行う。

(2) 1966年の調査における見解

まず、1966年に行われた調査の報告である『守山の古墳 調査報告第二』に記された七原恵史・久永春男両氏の見解から見てみよう³⁾。七原氏は同書の「4. 内部埋葬施設」の項で次のように述べている。

後円部の大半がすでに失われていたのでその全容をつかみえないが、野帳の会の内山邦夫氏が昭和19年頃に、墳丘が道路によって削られた断面を観察されたとき、後円部の北側寄りで今回の調査で石組みが発見された地点付近に人頭大の石が多数ならんでいたということで、おそらくこれがこの池下古墳における埋葬施設の名残りで、埋葬施設は礫床であったと考えられる。

として礫床説をあげている。

次いで、やはり同書85ページの「7. 考察」における、内部構造に関する久永春男氏の意見は次のとおりである。

昭和37年頃までは、後円部を南北に切通した道路の西側の崖面に礫を積んだ施設が一部残っていたが、この度の調査に際してはすでにそれは見られず、2～3個の礫が遺存したにとどまった。しかし、その西北角とすべき地点から西へ、墳丘のくびれ部へむかって、細い溝状に礫を組み並べた施設が発見され、排水施設と推定された。おそらく礫床か、礫床か、礫積み堅穴式石室かがあって、それからみちびかれた施設と推定された。

と、述べており、七原氏と同じく礫床説をあげ、さらに礫床・礫積み堅穴式石室の可能性についても示唆している。両氏とも、後円部を破壊した道路に面した崖に人頭大の礫が2～3個遺存していたことを根拠にしている。

(3) 横穴式石室採用の可能性について

池下古墳の埋葬施設は、1966年の調査における見解では、以上のように礫床か、礫床あるいは礫積み堅穴式石室で、横穴式石室については可能性は全く考慮されていなかった。近年、三河・美濃・伊勢など尾張周辺の地域で5世紀後半から6世紀初頭の古墳に横穴式石室が採用されていることが明らかとなってきた。一方、尾張ではわずかに6世紀初頭の名古屋市白鳥古墳²⁾が横穴式石室である可能性を指摘されているのみで³⁾、5世紀後半はおろか、6世紀初頭の横穴式石室墳すら確認されていない。ところが、その5世紀後半から6世紀初頭は、この尾張という地域では、6世紀前半に築造される断夫山古墳をその頂点に前方後円墳が急増する時期であり、全国的にも非常に注目されている⁴⁾。これらの前方後円墳には他地域同様、埋葬施設に横穴式石室が採用されている可能性はきわめて高いといえよう。そこで、まさにこの時期に築造された池下古墳の埋葬施設として、横穴式石室が採用さ

れていたとは考えられないだろうか、ということを経験の発掘調査における最大の検討課題のひとつとしていた。

(4) 池下古墳の埋葬施設の再検討

池下古墳の埋葬施設に横穴式石室が採用されていたのではないかと筆者が考えるにいたったのは、いくつかの理由がある。第一に石組排水溝の存在である。横穴式石室の床面に排水溝が掘削されているのは珍しいことではない。特に、6世紀代の大型横穴式石室には、奈良県平群町鳥土塚古墳⁵⁾や京都府向日市物集女車塚古墳⁶⁾などの例をあげるまでもなく、石組の排水溝をもつ古墳は少なくない。このことは東海地方西部でも例外でなく、池下古墳に近接して築かれている小幡茶白山古墳の横穴式石室には石室の主軸にある素掘りの排水溝に蓋石がかぶせられていた⁷⁾。さらに、三重県亀山市の井田川茶白山古墳にも羨道部に石組排水溝が見られる⁸⁾。

ただし、石組排水溝の存在のみでは池下古墳の埋葬施設が横穴式石室であったことの証明にならない。なぜなら、奈良県河合町佐味田狐塚古墳には粘土槨に⁹⁾、京都府長岡京市長法寺南原古墳には竪穴式石室に¹⁰⁾、それぞれ礫を充填した排水溝が墳頂部の埋葬施設の隅部からくびれ部に向けて掘削されていたなどの例があるからである。池下古墳の場合もやはりくびれ部に向かって排水溝がのびていた。しかし、佐味田狐塚古墳・長法寺南原古墳と池下古墳の石組排水溝には構造上若干の違いがある。前者の場合、排水溝の起点は墓壇の床面にあたるため、墳頂部からは墓壇の高さの分だけ深い位置にあるが、墳端部に行くにしたがって表土面から浅いところに掘削されるようになる。一方、池下古墳の場合は排水溝の起点は埋葬施設が遺存していないため不明だが、くびれ部付近でも表土層から1 m以上の深さを有している。

また、粘土槨や竪穴式石室などの場合は墓壇の深さそのものが比較的浅いため、排水溝は起点と末端の比高差が大きく、傾斜はかなり急になるのが一般的であるが、横穴式石室では元来、墳頂部の表土面から玄室床面までの比高差が大きく、また石室開口部でも天井から床面までの高さがあるため、排水溝の起点である玄室ないし羨道部から末端の石室開口部までの比高差は比較的小さく、傾斜はゆるやかになる。池下古墳の場合後円部側とくびれ部側では比高差はきわめてわずかであることからみて、横穴式石室にともなう排水溝であった可能性が高い。

今回の調査で特筆すべきは、墓道と考えられる落ち込みを後円部の断面で検出し得たことである。墓道とは羨道から墳丘外に通じる石積みをもたない切り通し部分で、全国的にも初期の横穴式石室にはしばしば見られる施設である。宮原晋一氏は墓道について、奈良県高取町市尾墓山古墳(第37図3)¹¹⁾の検討から次のような理解を示した¹²⁾。追葬が可能な埋葬施設である横穴式石室を新たに前方後円墳に採用する際、竪穴式石室と同じく、墳丘の中央に置いた玄室から後円部傾斜の開口部までの、長い羨道を築く技術がまだなかったために、玄室と短い墓道を付設することによって、この問題を解決した。池下古墳における幅約3.4m、深さ約0.6mの墓道も、以上のような機能をもたせるために築かれたものである。かつて後円部断面で見られた礫積みは墓道に続く羨道部が崩壊して遺存していたものではなかっただろうか。宮原氏は、このほかにも後円部の矮小化や、玄室床面が墳丘裾より高い位置にあること・玄室と羨道の境に羨道部が玄室より一段高くなる框石や柵石と呼ばれる階段状施設を設けることなども、玄室から墳丘斜面の開口部までの距離を短くする工夫であろうとしている。こ

のうち、階段状施設については東海地方西部においても、愛知県岡崎市経ヶ峰1号墳¹³⁾・幸田町日向山古墳¹⁴⁾や三重県安濃町平田18号墳¹⁵⁾・井田川茶白山古墳などの、初期の横穴式石室に広く採用されていることが明らかにされている。池下古墳の埋葬施設も同様の構造であった可能性が高い。

名古屋市博物館の犬塚康博氏は、池下古墳の埋葬施設が遺存していた頃に、そのなかに入ったことがあるという人から聞き取り調査を行った¹⁶⁾。それによると、埋葬施設は石室構造をもち、人が一人は入れる空間があったとのことで、床面には石は敷かれていなかったようである。以上のことから、池下古墳の埋葬施設が礫床や礫層であった可能性がきわめて低く、竪穴式石室か横穴式石室のいずれかであったと考えられる。これに前記の墓道の存在を考え合わせると、池下古墳の埋葬施設には横穴式石室が採用されていたことはほぼ確実であろう。

(5) 横穴式石室の構造とその系譜について

以上の考察により、池下古墳の埋葬施設がごく初期の横穴式石室であったことが明らかになった。次いで、その構造や系譜について、土生田純之氏の研究¹⁷⁾にしたがって考えてみたい。

池下古墳の築造時期は前述のように5世紀末(陶器編年TK47型式)である¹⁸⁾。尾張ではこの時期の横穴式石室は他に知られていないが、周辺地域には5世紀後半頃より、横穴式石室墳がいくつか築造されている。三河の経ヶ峰1号墳・幡豆町中ノ郷古墳¹⁹⁾、志摩の阿児町おじよか古墳²⁰⁾がそれである。

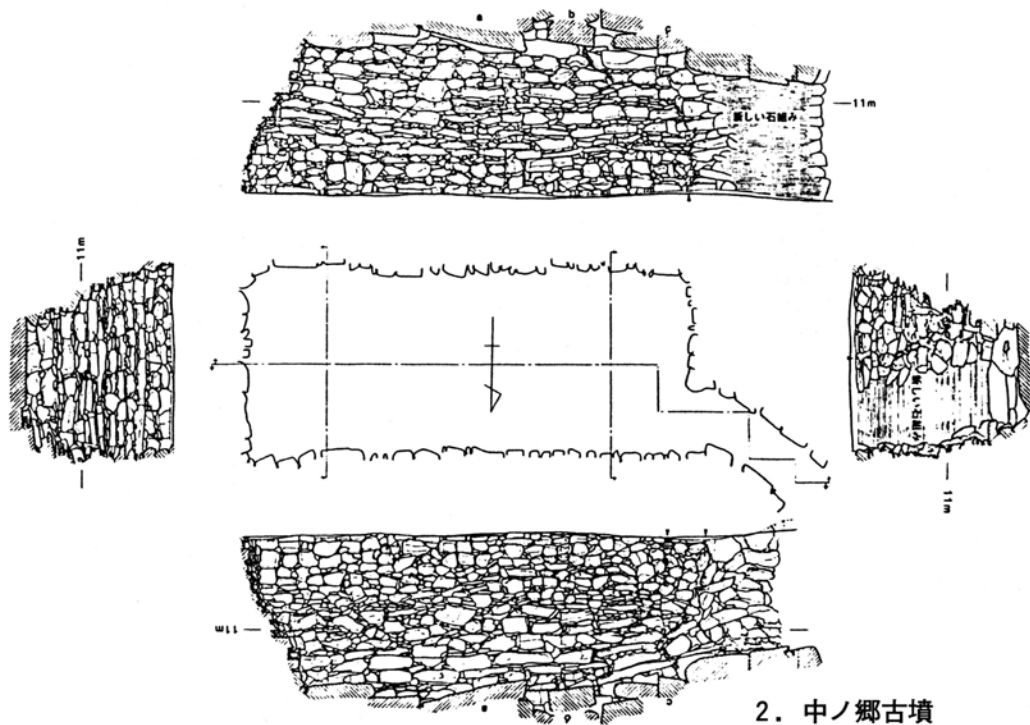
経ヶ峰1号墳(第34図1)は全長35mの帆立貝形前方後円墳で、石室は後円部の中央にあり、規模は長さ3.8m幅は東南端が1.25mで中央が1m、北西端0.8mで、花崗岩の割石を積み上げ、床面には径15~35cmの扁平な河原石を敷いていた。石室の北西端の床面には長さ40cm前後の他より明らかに大きな割石を4個敷いており、この部分を開口部とする古式の竪穴系横口式石室であると考えられている。

中ノ郷古墳(第34図2)は墳丘の周囲が削られており、墳形が不明である。石室は羨道部・玄門部の改変が著しい。玄室は現状で長さ4.65m、幅1.9m、高さ1.5~1.7mある。平面形が両側壁がほぼ平行する長方形で、壁面は20cm前後の割石を持ち送り状に積み上げる。玄門が本来は両袖式で、長さ1.5m、幅0.7mの羨道が取り付けいていたようである。

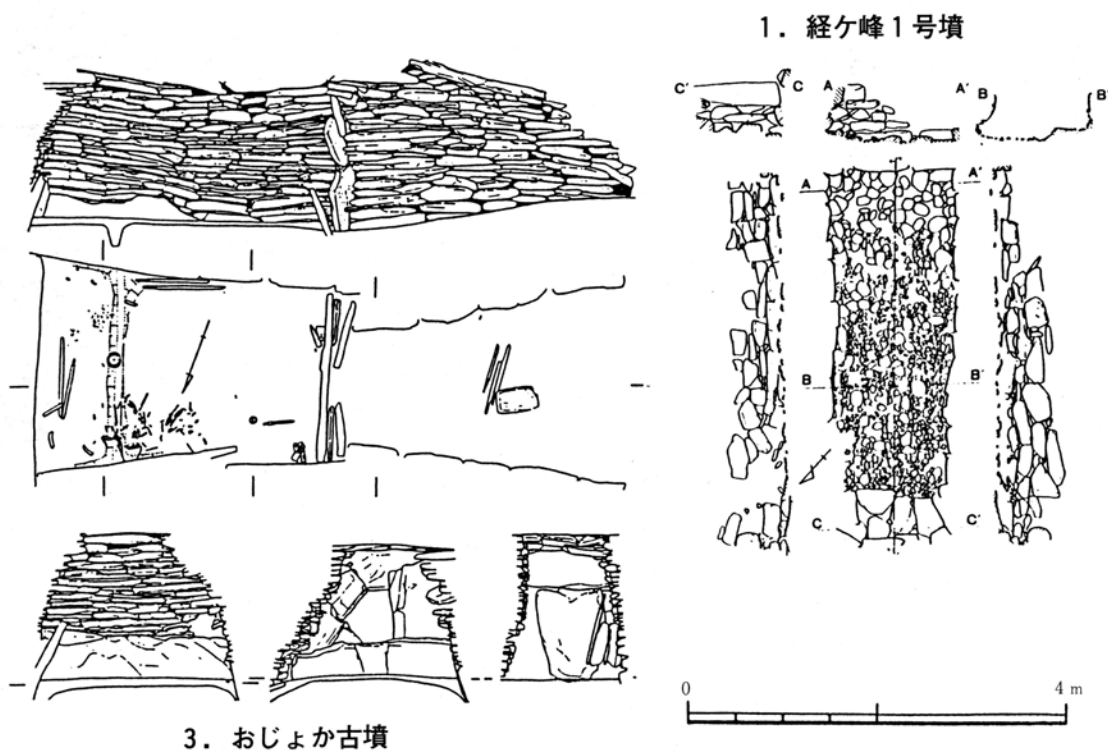
おじよか古墳(第34図3)も墳形は不明である。石室は全長0.6m、玄室の長さは2.9m、幅は奥壁側が2.15mで玄門側は1.7m、高さは1.35mである。これに長さ3.1m、幅が玄門側1.5mの羨道がつく。羨道の高さは玄門側で1.4m、開口部で0.3mである。玄室が扁平な板石を平積みにしており、左側壁を除いて壁石の前面に、石障を意識した大きな板石を横位に立てている。玄門部には左右に長大な板石を縦位に内側にせり出して立てており、両袖部を形成している。これらの古墳は、その石室形態から北部九州の影響が海上ルートを通じて伝播したものと考えられている。

5世紀末から6世紀初頭には、伊勢では平田18号墳、三河に幸田町青塚古墳²¹⁾、美濃では上石津町二又1号墳²²⁾・関市陽徳寺1・4号墳²³⁾がある。

平田18号墳(第35図1)は径12mの円墳である。石室は全長2.8mで、高さが1mある。奥壁から2mの位置に、扁平な石材を石室の主軸と直交して床面に据えており、これを框石として、開口部が玄室より一段高くなる。羨道はなく、玄門部からは墓道がのびている。墓道の床面から天井石まではわずか0.4mの空間しかなく、遺体の搬入が困難であるため、5枚の天井石のうち、少なくとも開口部側



2. 中ノ郷古墳

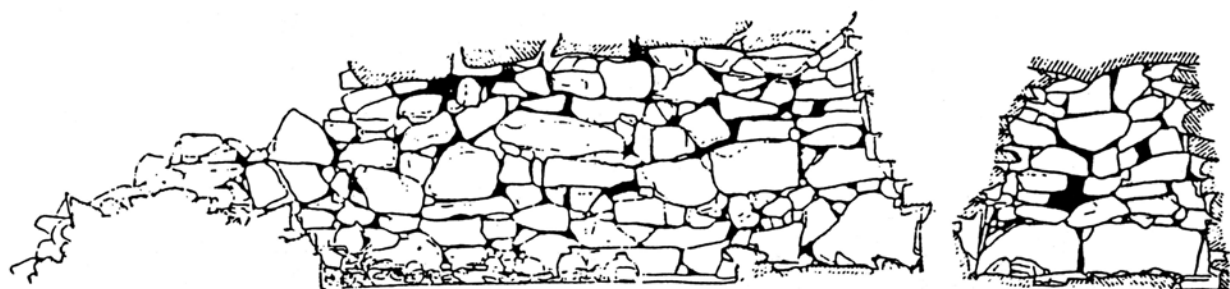
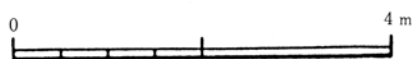


3. おじよか古墳

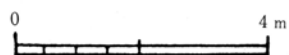
第34図 5世紀後半の横穴式石室実測図 (1:80)



1. 平田18号墳



2. 二又1号墳



第35図 5世紀末の横穴式石室実測図1 (1:80・1:120)

のものは遺体の搬入後に置かれたことが考えられている。

青塚古墳は全長35～36mの前方後円墳である。石室は板石あるいは偏平な割石積みで、長さ4.8m、高さは奥壁側1.3mで開口部では0.7m、幅は奥壁側が1.1mで開口部は1.4mである。床は礫敷で、奥壁側のみやや大きい偏平な石を用いている。構造上、横穴式石室の初源的要素が多く認められる。

二又1号墳（第35図2）は径15mの円墳である。埋葬施設は片袖式の横穴式石室で、全長6.5m、玄室の長さは4.7m、幅は奥壁側で2m、玄門側で1.5mである。高さは奥壁側で1.9mで、玄門側に向かって徐々に低くなる。床面には川原石を敷き、奥壁寄りには偏平な板石6枚と小石材を用いて棺台を付設している。玄門は右片袖で、袖の幅は0.7mある。床面には框石を置き、羨道部は玄室部より一段高くなる。羨道は長さ1.8m、幅0.8mで羨門側がやや狭くなる、未発達のものである。玄室の石材は長さ0.4～1mの横長の石を横方向に6～8段積んでおり、持ち送りはかなりきつい。

陽徳寺裏山1・4号墳（第36図1・2）はともに円墳である。埋葬施設は1号墳が両袖式の横穴式石室で、全長6.1m、玄室の長さは4.9m、幅は奥壁側が1.8mで中央部が2.15mと、わずかに胴張りとなっている。高さは現存部分で1.6mある。羨道は長さ1.2m、幅は0.8mと、小規模で未発達である。玄室と羨道との間に段はない。玄室・羨道の石材は丸みを帯びた幅0.2～0.3mの小石材を小口積みしている。

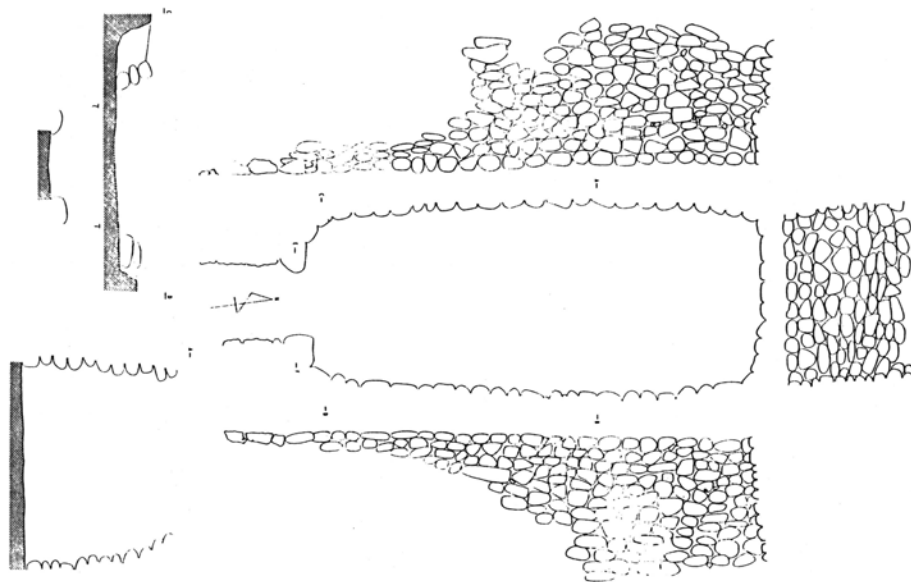
4号墳は無袖式の横穴式石室で、平面形は全体にゆるやかな弧を描いており、玄室と羨道の境は明確でない。全長4.3m、幅は奥壁部が1.25mで中央部が1.55m、開口部で1mと、胴張りは強い。高さは現状で1.05mある。開口部の床面に6個の川原石を2列に並べており、この部分が羨道部と考えられている。石材は1号墳同様、幅0.2～0.3mの川原石を内傾させて積み上げている。

以上、概観してきた5世紀後半から6世紀初頭の東海地方西部における横穴式石室の変遷をまとめると次のようになる。まず、5世紀後半に北部九州の影響を受けた竪穴系横口式石室が志摩・三河などの海岸沿いの地域に出現する。次いで、5世紀末から6世紀初頭にかけて、竪穴系横口式石室とともに畿内の影響を受けた初源的な横穴式石室が美濃に出現する。

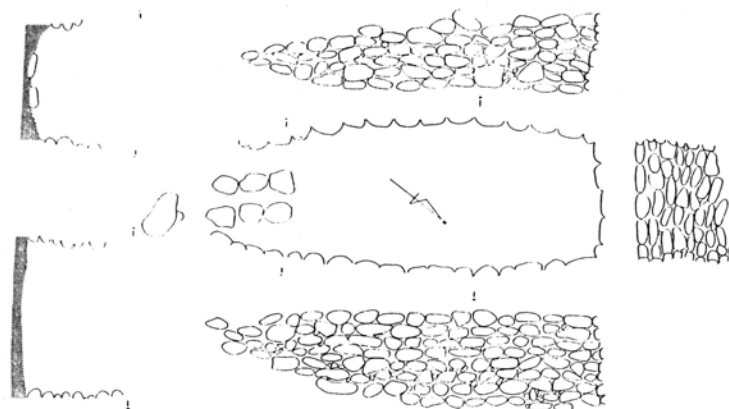
一方、尾張では、池下古墳を除けば、6世紀初頭に築造された白鳥古墳の埋葬施設が、江戸時代の記録から、横穴式石室である可能性が高いとされているほかには、6世紀中葉にいたってようやく名古屋市小幡茶白山古墳（以下、茶白山古墳と記す）の例が確認できるのみである。

茶白山古墳（第37図1）は、池下古墳の北西方向の丘陵上に立地する、全長約60mの前方後円墳である。墳丘の主軸は、北で東に55°振れている。南側のくびれ部に造り出しがあり、後円部の横穴式石室は開口部をこの造り出しの方に向けている。石室は左片袖式で、規模は玄室の長さが約4.8m、幅は玄門部で1.9m、中央部で2.1mあり、奥壁部は遺存していないために不明である。羨道部の築造当初の長さ3.4mで、幅は玄門部で1.25mある。石材は、玄室の左袖部に高さ1.3mで幅1.5mの大型の石を置き、基底部にはおおむね高さ1.6m以上、幅1m以上の大型の石をそろえている。その上に高さ約0.4m、幅約0.5mの石を積み上げているが、現状では2段目までしか遺存していない。羨道部は玄室の2段目とほぼ同じ大きさの石を遺存状態の良いところで5段まで積んでいる。床面には、玄室内のみ小礫を敷きつめている。石室の主軸中央には素掘りの排水溝があり、これに径約0.2mの偏平な川原石で蓋をしている。

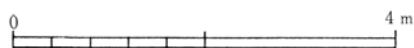
この茶白山古墳の横穴式石室については、服部哲也氏が調査報告書のなかで、名古屋市東谷山4号



1. 陽徳寺裏山1号墳



2. 陽徳寺裏山4号墳



第36図 5世紀末の横穴式石室実測図2 (1:80)

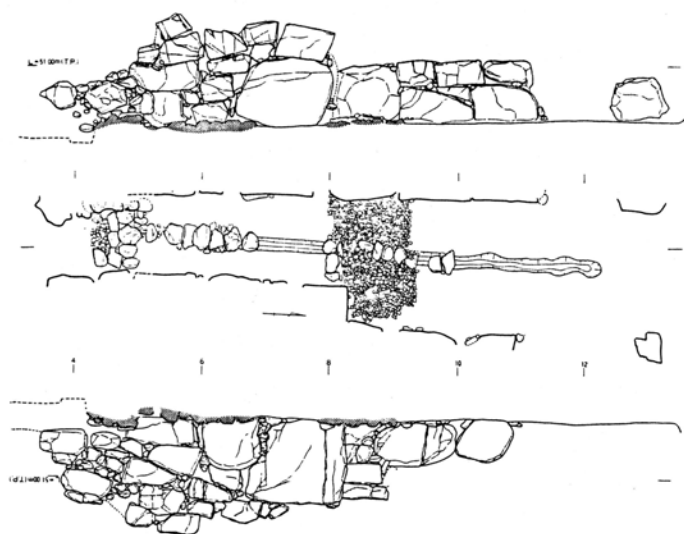
墳²⁴⁾ (第37図2) の石室と比較して、その特徴を次のように述べている²⁵⁾。茶臼山古墳と東谷山4号墳の石室の平面規模は、玄室長が若干、茶臼山古墳の方は大きい点を除けば、ほとんど一致している。しかし、平面形態を比較すると、両者とも左片袖の横穴式石室である点は一致しているが、茶臼山古墳の玄室がほぼ正しい長方形であるのに対して、東谷山4号墳の方は中央部がふくらむ胴張り状の特徴を示している。立面形態の比較では、袖石が茶臼山古墳は1.3×1.5mとほぼ方形の巨石を用いているのに対し、東谷山4号墳では1.1×0.7mと縦長の石材で柱状になっている。これら、茶臼山古墳に対する東谷山4号墳の横穴式石室の特徴は、いずれも茶臼山古墳よりも新しい要素であり、かつ、6世紀後半から7世紀代にかけて尾張を中心に流行する、いわゆる「徳利形」石室²⁶⁾の先駆をなすものとされている。それに対して茶臼山古墳の石室は「徳利形」の特徴が表れる前の、いわゆる畿内型の横穴式石室である。このように、遅くとも6世紀中葉には尾張においても畿内型の横穴式石室が採用されていた事実は、ひいては、小幡古墳群中で、茶臼山古墳に先行して築かれている池下古墳の石室形態が、畿内系のものであった可能性をきわめて高いものにしている。このことは、池下古墳とほぼ同じ時期に築造された美濃の二又1号墳や陽徳寺裏山1・4号墳の埋葬施設に畿内系の横穴式石室が採用されていることから首肯し得る。

ただし、現在のところ、畿内で前方後円墳の埋葬施設として横穴式石室墳はいずれも群集墳中の小円墳である²⁷⁾。そのため、茶臼山古墳の横穴式石室が畿内型であることで、池下古墳の埋葬施設も畿内系の横穴式石室であったと断定することはできない。将来、小幡古墳群で池下古墳に続く首長墓である小幡長塚古墳²⁸⁾の埋葬施設が明らかになれば、おのずと解決するであろう。

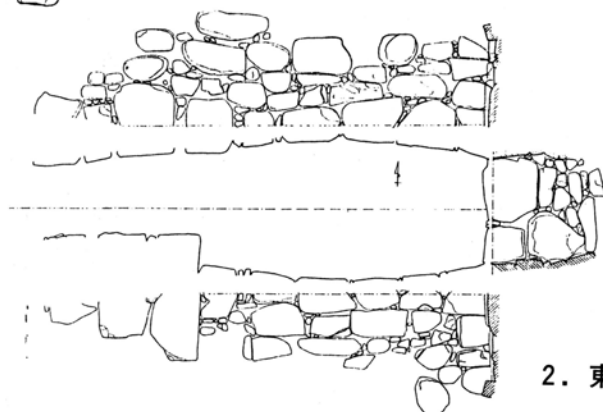
(6) まとめ

以上、池下古墳の埋葬施設について、様々な観点から考察してきた。最後にこれらを踏まえたいえ尾張における池下古墳の位置づけを行って小論のまとめとしたい。

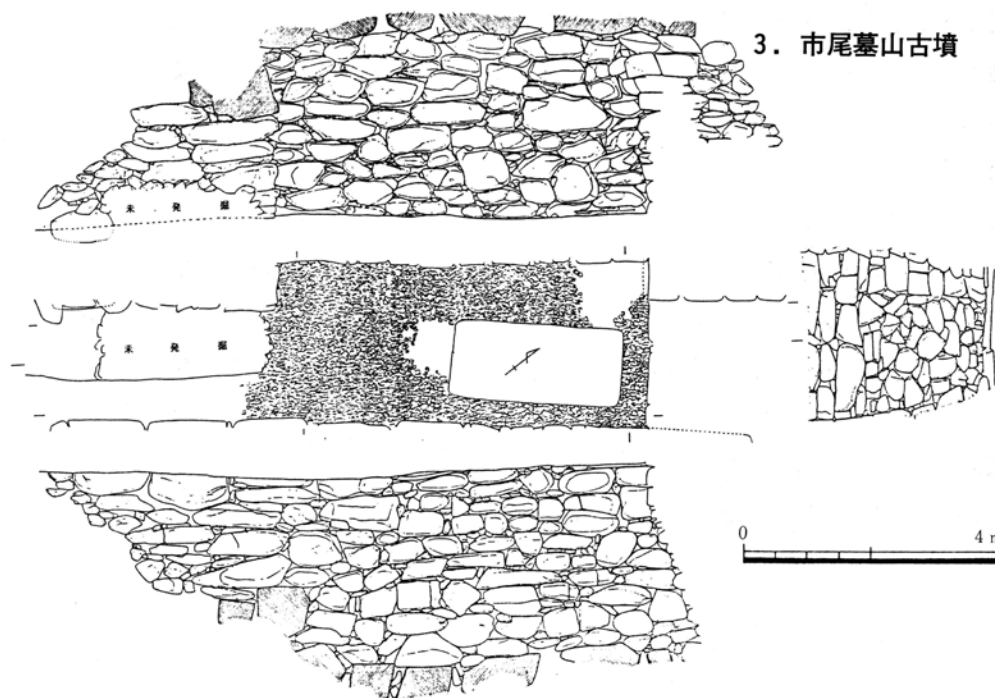
池下古墳が属する小幡古墳群は、東谷山から南西にのびる丘陵によって志段味地区とへだてられている。その志段味地区には志段味大塚古墳²⁹⁾や勝手塚古墳³⁰⁾など、小幡古墳群とほぼ時期的に併行する首長墓の系列がある。この志段味古墳群と小幡古墳群は、東谷山から派生する丘陵によって二分された守山区の北側と南側をそれぞれに領有していた首長層の奥津城であろう。そして、この両古墳群はともに、尾張氏の首長墓系列である春日井市の味美古墳群³¹⁾と断夫山古墳を頂点とする熱田古墳群に用いられた尾張型埴輪を共有していることから³²⁾志段味・小幡両古墳群の被葬者は尾張氏を支える中・小豪族層であったと想定できる。この、小幡古墳群のなかでは最初の首長墓ではあるが、全長わずか45mの前方後円墳である池下古墳の埋葬施設に横穴式石室が採用されていたということは尾張氏を支えるべく勃興してきた尾張各地の豪族層が葬られた5世紀後半から末頃にかけての前方後円墳の多くには、埋葬施設として横穴式石室が用いられている可能性が高いといえよう。



1. 茶臼山古墳



2. 東谷山4号墳



3. 市尾墓山古墳

第37図 茶臼山古墳・東谷山4号墳・市尾墓山古墳横穴式石室実測図 (1:120)

- 註1. 久永春男・七原恵史「池下古墳」『守山の古墳 調査報告第二』 名古屋市教育委員会 1969
2. 名古屋教育委員会『熱田区・白鳥古墳』 1987
3. 土生田純之「西三河の横穴式石室」『古文化談叢』第20集(上) 九州古文化研究会 1988
4. 東海埋蔵文化財研究会『断夫山古墳とその時代』第6回東海埋蔵文化財研究会資料集 1989
5. 伊達宗泰ほか『鳥土塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第27冊 1972
6. 向日市教育委員会『物集女車塚』向日市埋蔵文化財調査報告書第23集 1988
7. 他との区別のため小幡茶白山古墳とする
名古屋教育委員会『茶白山古墳』 1990
8. 三重県教育委員会『井田川茶白山古墳』 1988
9. 泉森皎ほか『佐味田狐塚古墳』奈良県文化財調査報告書第29集 1977
10. 都出比呂志ほか『長法寺南原古墳』大阪大学南原古墳調査団 1983
11. 河上邦彦ほか『市尾墓山古墳』高取町文化財調査報告第5冊 1984
12. 宮原晋一「市尾墓山古墳の再検討」『橿原考古学研究所論集第九』 1988
13. 斎藤嘉彦ほか『経ヶ峰1号墳』岡崎市教育委員会 1981
土生田純之「二基の『縦穴式石室』」『史泉』第55号 関西大学史学会 1981
鈴木路治「経ヶ峰1号墳」『西三河の横穴式石室 資料編』愛知大学日本史専攻会考古学部会 1988
14. 小笠原久和『日向山古墳発掘調査報告書』幸田町教育委員会 1988
15. 安濃町遺跡調査会『中大谷13・16号墳発掘調査報告』安濃町埋蔵文化財調査報告8 1988
16. 犬塚博康氏のご教示による
17. 土生田純之「東海地方の横穴式石室」『断夫山古墳とその時代』第6回東海埋蔵文化財研究会資料 1989
18. 赤塚次郎氏の年代観による
19. 土生田純之「中ノ郷(穴観音)古墳横穴式石室実測調査報告」『西三河の横穴式石室 資料編』愛知大学日本史専攻会考古学部会 1988
20. 小玉道明ほか『志摩おじょか古墳発掘調査概要』阿児町教育委員会 1968
21. 小栗鉄次郎「幸田村青塚古墳」『愛知県史蹟名勝天然物調査報告』第8冊 1930
22. 檜崎彰一・八賀晋『牧田古墳群』 1959
23. 関市教育委員会『陽徳寺裏山古墳群』 1976
24. 久永春男「東谷4号墳」『守山の古墳 調査報告第二』 名古屋市教育委員会 1969
25. 服部哲也「石室について」『茶白山古墳』 名古屋市教育委員会 1990
26. 服部哲也「尾張における『徳利形』石室について」『花園史学』第8号 花園大学史学会 1987
27. 奈良県新庄町寺口忍海E-21号墳、同県橿原市新沢千塚221号墳など
28. 加藤安信「長塚古墳」『愛知県重要遺跡指定促進調査報告Ⅶ』 愛知県教育委員会 1983
29. 加藤安信「志段味大塚古墳」『愛知県重要遺跡指定促進調査報告Ⅶ』 愛知県教育委員会 1983
30. 愛知県教育委員会『重要遺跡指定促進調査報告』 1974
31. 赤塚次郎「味美への定着」『マージナル』No. 4 1984
32. 愛知県教育委員会『重要遺跡指定促進調査報告』 1974
33. 赤塚次郎「尾張としてのにはにわ製作」『考古学の広場』第1号 1983
「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集 1991

他に参考文献として次のものをあげておく。

- 第10回三県シンポジウム資料『東日本における横穴式石室の受容』千曲川水系古代文化研究会・北武古代文化研究会・群馬県考古学研究所 1989
- 帝塚山考古学研究所古墳部会資料『横穴式石室を考えるー近畿の横穴式石室とその系譜ー』 1990

3. 池下古墳墳丘築造過程の復元

(1) はじめに

池下古墳の築造過程については、1966年に行われた発掘調査の報告書である『守山の古墳 調査報告第二』のなかで、久永春男・七原恵史の両氏がすでにこれに関して若干の考察を行っている¹⁾。しかし、今回の調査によって、この墳丘の築造過程についてさらに詳細な復元が可能となった。このことは本報告書の第2章でもごく簡単に概略を述べたが、さらにここで稿をあらためて論述していくこととする。

(2) 築造過程の復元

今回の発掘調査で作成した池下古墳の墳丘断面図を検討すると、およそ9つの過程を経て築造されていることが判明した。よって、ここではその9つの段階に分けて、土層断面図と俯瞰図を示しつつ記述していく。

第1段階(第38図1) まず、湿地に張り出した低平な尾根をえらぶ。そしてこの尾根の先端に、尾根の方向に直交するかたちで、当時の地表面であった厚さ約0.2mの淡灰褐色粘質土層を墳丘部分のみ前方後円形に残し、周濠部分は盾形に明黄褐色粘土層を深いところで約0.5m掘り込む。前方部の横断面で見ると、墳丘の北側では淡灰褐色粘質土層は墳端から約5mのところまで尽きており、かわって地山面が高くなっている。

第2段階(第38図2) 後円部のところに、黒褐色粘質土を0.2~0.3mの厚さで積み上げて、扁平な截頭円錐形の壇を築く。さらにこれに覆いかぶせるように、地山の黄褐色砂質土を部分的に混ぜた黒褐色粘質土をほぼ同じ厚さで5回にわたって高さ約0.8mまで積み上げて後円部をひろげている。この段階で特にくびれ部側に黒灰褐色粘質土を付け足している。

第3段階(第38図3) 後円部には黄褐色粘土と黒褐色粘質土を約0.4mの厚さで積み、さらに黒褐色粘質土を約0.2mの厚さでくびれ部から前方部にかけて、ほぼ墳丘全域にわたって積んでいる。前方部の横断面では旧表土の淡灰褐色粘質土層が厚く堆積しているところは薄く積み、旧表土層の堆積が薄いところは厚く積んで、全体に水平になるように心掛けているようである。

第4段階(第38図4) この段階で後円部に埋葬施設にともなう石組排水溝を付設し、黒色砂質土でこれを覆って暗渠としている。

第5段階(第38図5) 後円部には黄褐色粘質土・淡褐色砂質土・黒褐色粘質土を交互に約0.5mの厚さまで積み上げる。これと並行して埋葬施設を築いている。この段階ではまだ墓道は「U」字形にくぼんだままであり、羨道部も開口しており、石室はおそらく被葬者の埋葬が行われるまでは天井石を乗せない状態で放置されていたものと想像される。前方部は主軸方向の断面で見ると、旧表土のストックと思われる褐色砂質土を西側と東側から交互に約0.9mの厚さまで積み上げている。これを前方部の横断面で見ると南北それぞれ外側から内側に向かって盛土を施していることが明瞭に読み取れる。そしてくびれ部には後円部と前方部をつなぐように黒褐色粘質土を厚さ約0.5mで積んでいる。この段階で墳丘第1段は完成する。

第6段階(第39図6) 被葬者の埋葬が行われた段階。後円部の横断面では、墓道は土器(あるいは

埴輪)の細片を多く淡黄褐色粘質土や淡褐色砂質土で両側の肩から内側へと埋め立てられている状況が見て取れる。墓道埋め立て後、その上面を厚さ0.1~0.2mの黒色土混じりの黄褐色砂質土で覆っている。石室の天井石はこの段階でかけられたものと思われる。

第7段階(第39図7)後円部には土器の細片の混じる黄褐色粘土をさらに0.5mの厚さで積み上げる。この作業をもって後円部の築造は一応終了する。前方部からくびれ部にかけて、黒褐色粘質土を積んでいる。後円部とくびれ部の境では黒褐色粘質土が最大0.8mの厚さで後円部の盛土にかぶさっている。前方部の横断面を見ると、黒褐色粘質土層の堆積の仕方は地形的に低い南側から北側に向かって積んでおり、南端は意識的に特に高く約1.2mの厚さに積み上げている。そして、地形的に高い北側ではほぼ水平の堆積となっていることがわかる。

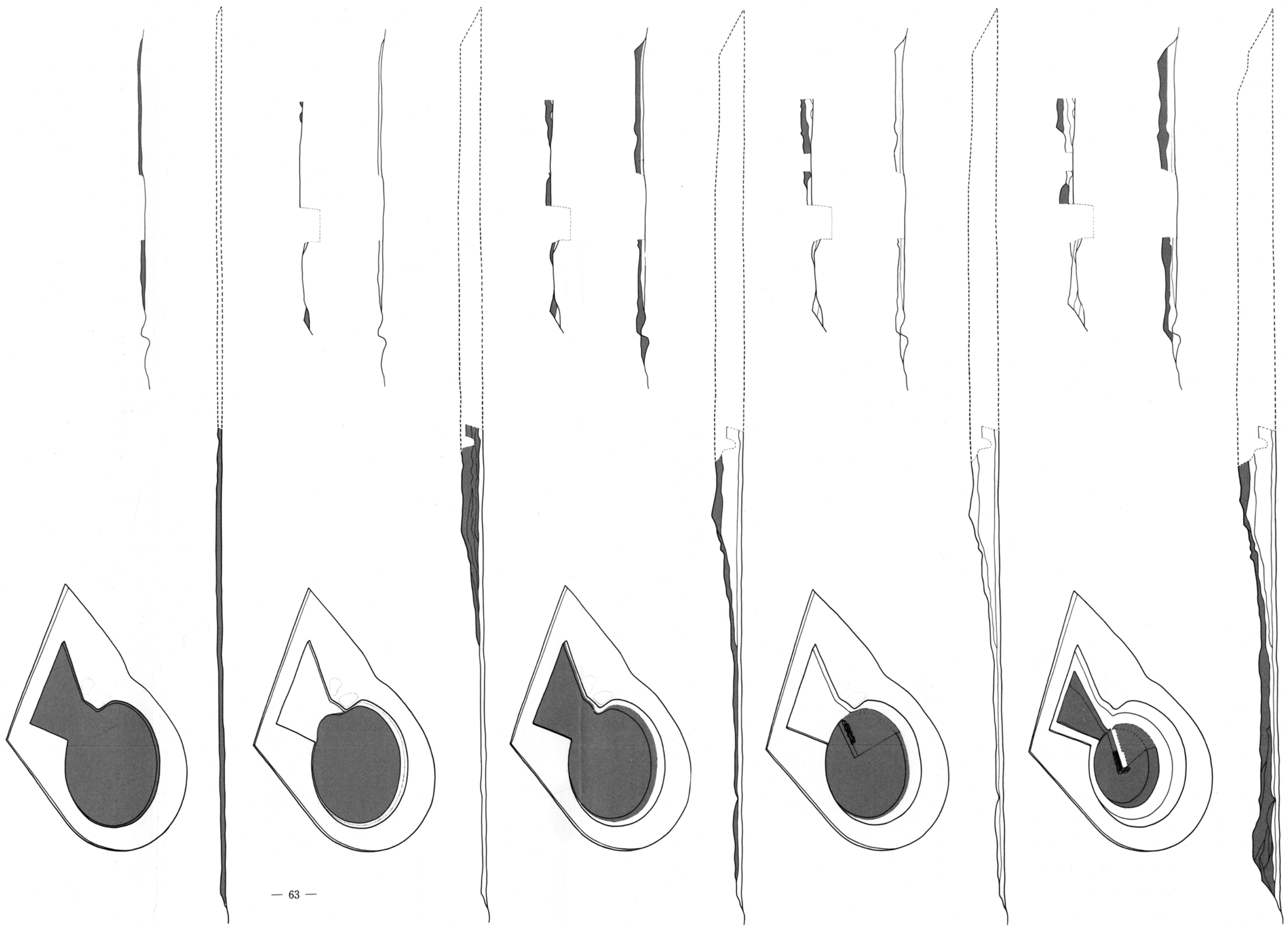
第8段階(第39図8)主軸方向の土層では、前方部には褐色砂質土を約0.6mの厚さで断面三角形に積み上げ、前方部の盛土はこれで一応完了している。そして、くびれ部から前方部にかけては黒褐色粘質土を0.5~0.7mの厚さで積んでいる。前方部側にはさらに褐色砂質土を厚さ約0.4m、主軸寄りにのみ充填している。また、くびれ部では明黄褐色砂質土層を長さ3.5m、厚さ0.3mにわたって黒褐色粘質土層中に挟まれるように積む。

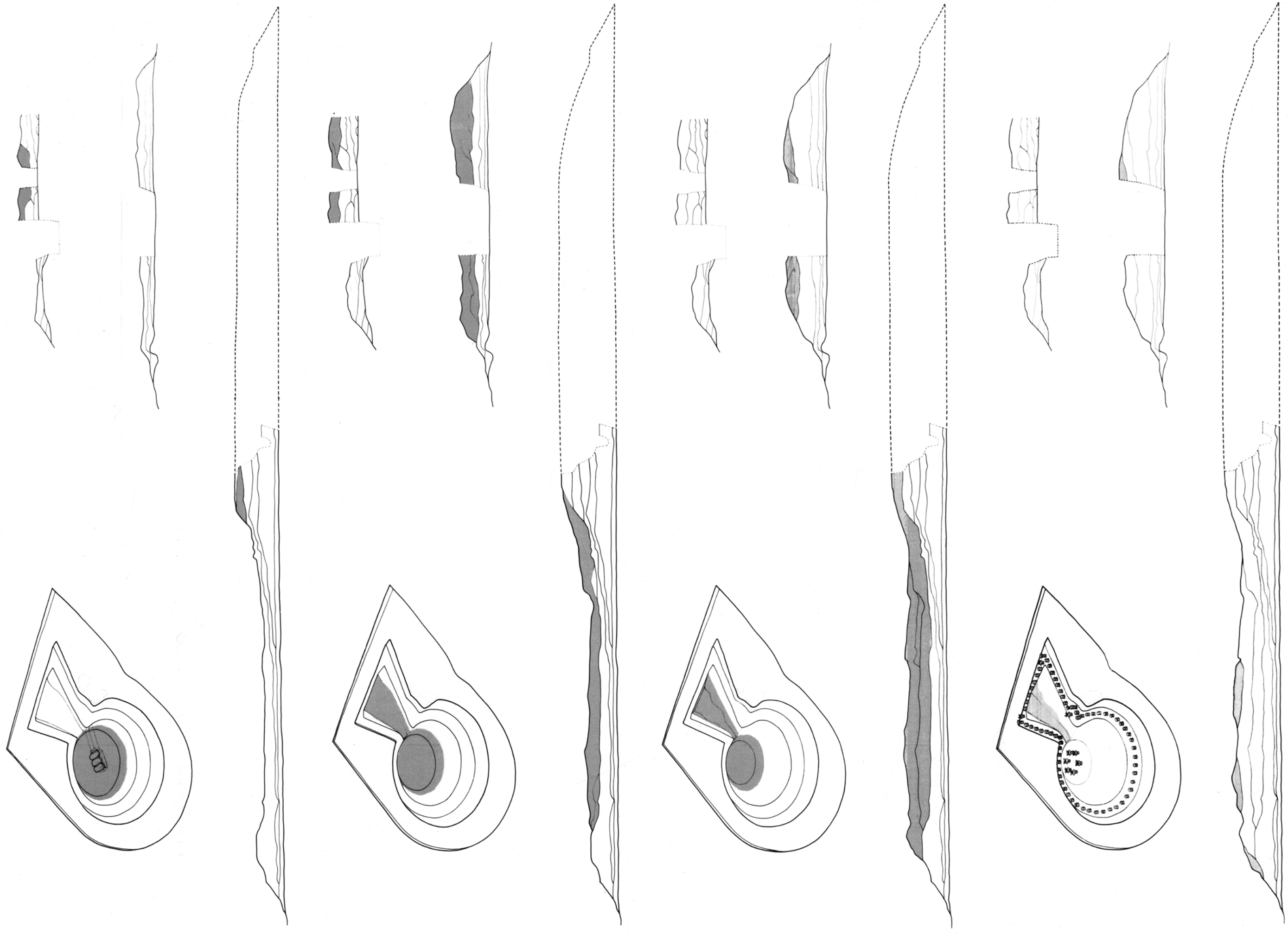
第9段階(第39図9)淡黄褐色砂質土を用いて墳丘全面に化粧を施し、墳丘の築造はこれで終了する。墳頂部の埴輪列はこの段階で立て並べたものと思われる。墳丘第1段のテラスにある埴輪列が、被葬者埋葬時の墓前祭祀の際に、くびれ部北側の造り出しを聖域として区画するために必要であったとすれば、第6段階にはすでに並べられていたことになる。一方、墳頂部の埴輪列の設置と同一工程で行われたものとするならば、この第9段階に並べたことになる。このうちいずれの考えが妥当であるかは即断できないが、第6段階での墓道の埋土とそれ以降に積まれた後円部の盛土中に土器(あるいは埴輪)の細片が多く含まれていた事実は、前者の可能性を有利に導くこととなるかもしれない。

(3) まとめ

池下古墳は、以上の9つの段階を経てようやく完成を見た。このなかで特に問題となるのは埋葬施設と墳丘とのかかわりである。すなわち、被葬者の埋葬が行われた第6段階まではオープンな状態にあり、当然のことながら墓道の埋土より上の盛土は施されていない。この段階での墳丘全体の築造状況を見ると、後円部で完成時の約3分の2に達しているに過ぎず、前方部やくびれ部では半分以下の盛土しか施されていない。これまでは被葬者の埋葬が行われる段階では、墳丘はすでに完成していたものと漠然と考えられてきたが、少なくともこの池下古墳においては、ほとんど未完成の状態であったことが明らかになった。ただ前期古墳では、例えば奈良県桜井市の桜井茶臼山古墳²⁾やメスリ山古墳³⁾などは竪穴式石室が出来上がり、被葬者が埋葬された後にさらに盛土を施して壇を構築することが知られている。一方、6世紀中葉以降の横穴式石室では墳丘・石室とも完成した状態で被葬者の埋葬が行われ、その後に羨道部を閉じている。前項でも述べたように、池下古墳は現状では尾張最古の横穴式石室墳であり、北部九州を除けば全国的にも横穴式石室の初源期にあたるものである。この段階での横穴式石室が年代的にも構造的にも竪穴式石室と横穴式石室との過渡期にあたることが、この池下古墳で明らかになった両者の中間的な埋葬方法に表われているのであろう。

前方後円墳の築造過程の復元については、大阪府高槻市弁天山C1号墳⁴⁾や福岡県小郡市三国の鼻

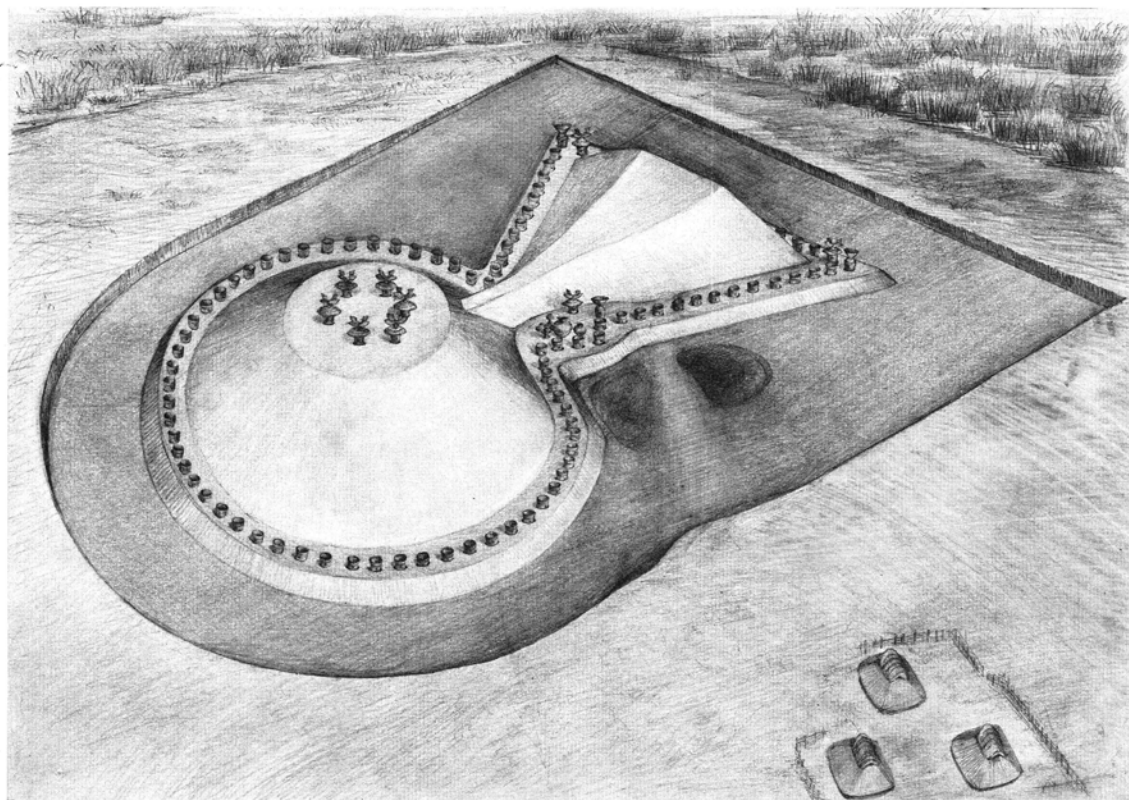




第39图 地下墳築造過程模式图 2

1号墳⁵⁾など、前期古墳ではいくつか明らかにされた例はあるが、中・後期古墳では現在のところほとんどわかっていないと言ってよい。そのような点からも、ここで示すことができた池下古墳の築造過程の復元はきわめて貴重な資料となろう。

- 註1. 久永春男・七原恵史「池下古墳」『守山の古墳 調査報告第二』名古屋市教育委員会 1969
2. 小島俊次ほか『桜井茶臼山古墳・附櫛山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊 1961
3. 伊達宗泰ほか『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊 1977
4. 原口正三・西谷正「弁天山C1号墳」『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告第17輯 1967
5. 片岡宏二「三国の鼻1号墳の調査」『三国の鼻遺跡I』小郡市文化財調査報告書第25集 1985



第40図 池下古墳完成状態想像図

第6章 まとめ

池下古墳は名古屋市守山区大字小幡字池下に所在する、全長約45mの前方後円墳である。付近に存在する長塚古墳・茶臼山古墳などの前方後円墳や、中小の円墳とともに小幡古墳群を形成している。築造年代では、池下古墳が5世紀末頃と最も古く、この古墳群における最初の首長墓になる。

この古墳は、1966年に久永春男氏らによって一度発掘調査が行われ、埋葬施設にともなう石組排水溝・墳丘裾をめぐる埴輪列・くびれ部北側造り出しの供献用須恵器群などが検出されている。

1988・89年の2年間にわたる今回の発掘調査では、1966年の調査で判明した遺構を再度確認するとともに、この古墳を歴史的に位置づけるために必要な情報を得るべく、さらに広範囲に、そして詳細に調査を行った。その結果、(1) 池下古墳は北側の丘陵から湿地に向かって張り出したきわめて低平な尾根の先端に、尾根の方向と直交するように墳丘の主軸を設定して築造されていることがわかった。次に、(2) 墳端部を確認し、墳丘規模についてはほぼ正確なデータを得ることができた。さらに、(3) 横穴式石室にともなうと考えられる墓道や、(4) 周濠外からくびれ部造り出しにいたる陸橋部を検出した。また、(5) 周濠は底面の高さが一定しておらず、南側では湿地に接しているために水を湛える機能をもたなかったことが明らかとなった。(6) 墳丘の主軸および前方部と後円部の横断面の断ち割りを行い、きわめて詳細な土層断面図を作成することができた。これによって池下古墳の築造過程を具体的に復元することが可能となった。(7) 池下古墳に近接して直径19.5mの池下南古墳を検出した。明確な築造時期を知る手がかりは得られなかったが、地理的な面からみて池下古墳に従属する陪冢と考えて差しつかえなからう。

科学分析では、石組排水溝に用いられている石材の岩質鑑定と、前方部の盛土である黒色土（通称黒ボク土）の成因を知る手がかりを得た。

以上のことが今回あらたに得た成果である。また、発掘調査と合わせて、現在、名古屋市博物館に展示・収蔵されている、1966年調査の際に出土した遺物についても再度実測調査を行い、その実測図を本報告書に掲載することができた。

考察ではこれらのデータをもとに、赤塚と樋上が池下古墳の歴史的な位置づけを遺物・遺構の両面から試みている。これらの論考が、今後の古墳時代研究に少しでも寄与できれば幸いである。

最後になったが、現地調査ならびに本報告書作成に、多くの方々のご協力を得ることができたことをここに記し、感謝の意を表したい。

出土遺物観察表

1. 須恵器

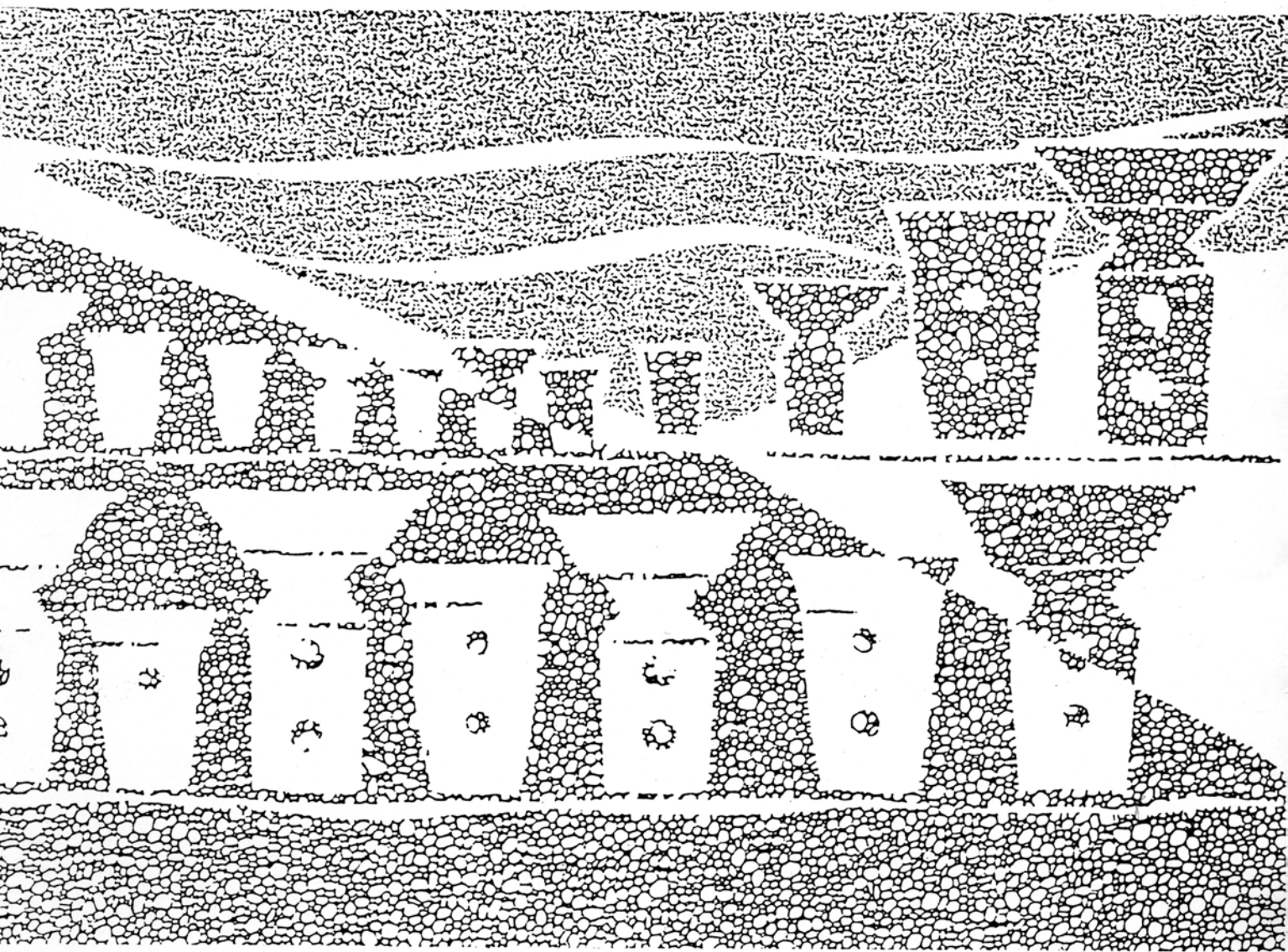
番号	登録番号	品種名	法量	備考
1		高杯・蓋	口径11.8cm 器高5.7cm	ヘラ記号あり 名古屋市博物館蔵
2		高杯・蓋	口径11.6cm 器高5.7cm	ヘラ記号あり 名古屋市博物館蔵
3		高杯・蓋	口径11.5cm 器高5.7cm	ヘラ記号あり 名古屋市博物館蔵
4		高杯・蓋	口径11.0cm 器高5.6cm	ヘラ記号あり 名古屋市博物館蔵
5		高杯・蓋	口径10.9cm 器高6.4cm	名古屋市博物館蔵
6		高杯・蓋	口径10.9cm 器高6.1cm	名古屋市博物館蔵
7		高杯・蓋	口径10.75cm 器高5.9cm	名古屋市博物館蔵
8		高杯・蓋	口径10.6cm 残存高4.35cm	口縁部欠失 名古屋市博物館蔵
9		高杯・蓋	口径11.2cm 器高6.2cm	名古屋市博物館蔵
10		高杯	口径10.25cm 器高11.0cm	ヘラ記号あり 名古屋市博物館蔵
11		高杯	口径13.5cm 器高9.7cm	ヘラ記号あり 名古屋市博物館蔵
12		高杯	口径9.95cm 器高9.6cm	ヘラ記号あり 名古屋市博物館蔵
13		高杯	口径9.6cm 器高10.1cm	ヘラ記号あり 名古屋市博物館蔵
14		高杯	口径9.6cm 器高9.4cm	名古屋市博物館蔵
15		高杯	口径9.35cm 器高9.4cm	名古屋市博物館蔵
16		高杯	口径9.5cm 器高9.7cm	名古屋市博物館蔵
17		高杯	口径9.8cm 器高9.35cm	名古屋市博物館蔵
18		高杯	口径9.9cm 残存高5.4cm	脚部欠失 名古屋市博物館蔵
19		脚付七連蓋杯	器高22.0cm	名古屋市博物館蔵
20		脚付七連蓋杯・蓋	口径10.6cm 器高5.8cm	名古屋市博物館蔵
21		脚付七連蓋杯・蓋	口径10.7cm 器高5.9cm	名古屋市博物館蔵
23		脚付七連蓋杯・蓋	口径10.9cm 器高5.4cm	名古屋市博物館蔵
24		脚付七連蓋杯・蓋	口径10.9cm 器高5.9cm	名古屋市博物館蔵
25		脚付七連蓋杯・蓋	口径10.8cm 器高5.8cm	名古屋市博物館蔵
26		脚付七連蓋杯・蓋	口径9.9cm 器高5.1cm	名古屋市博物館蔵
27		杯蓋	口径13.4cm 器高4.9cm	名古屋市博物館蔵
28		瓶類の底部	口径5.3cm 器高1.4cm	名古屋市博物館蔵
29		大型壺	口径14.9cm 器高43.5cm 胴部最大径46.2cm	名古屋市博物館蔵
30		大型甕	口径51.6cm 器高84.8cm 胴部最大径78.2cm	名古屋市博物館蔵

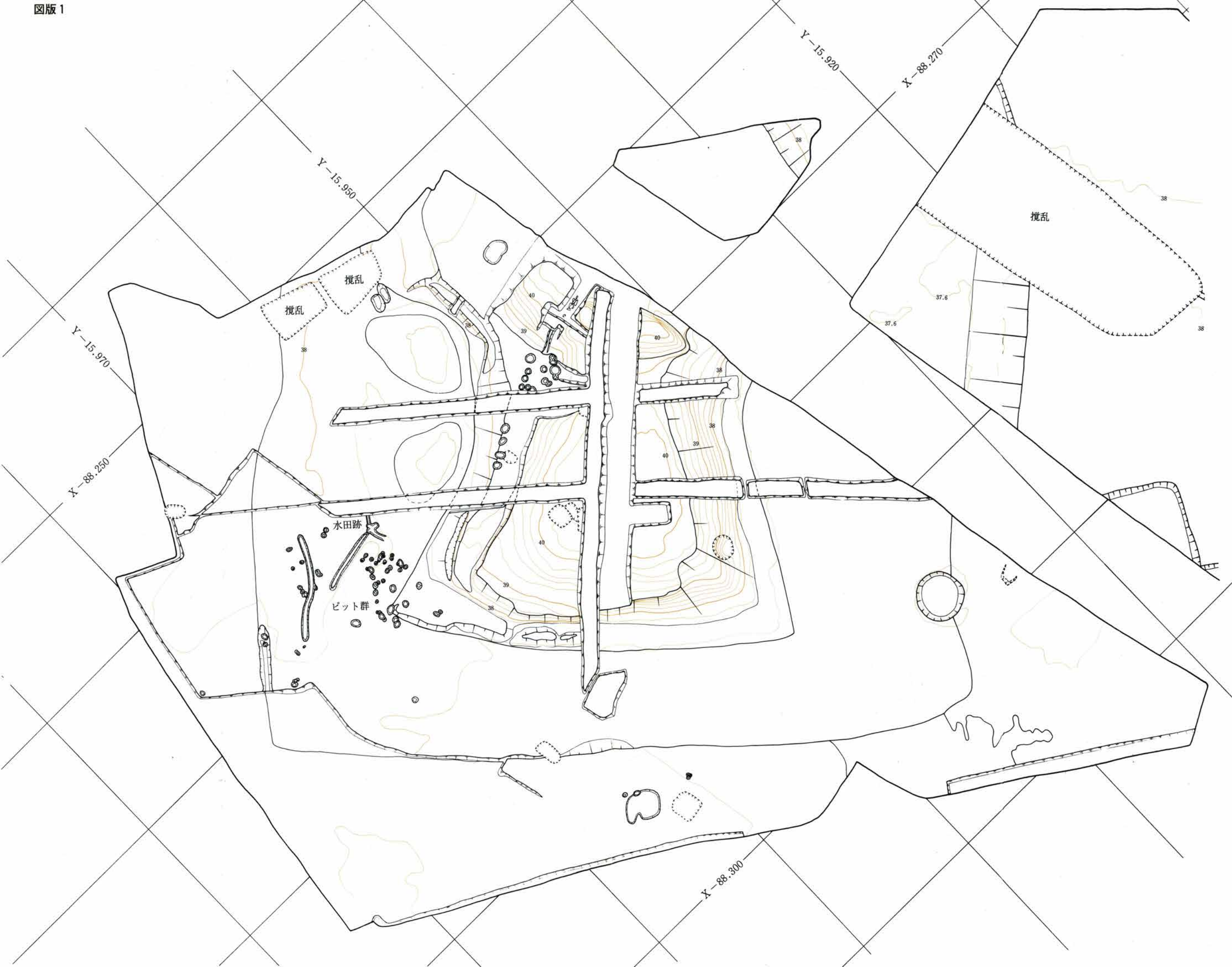
31		器台の脚部		
32	E-9	杯身	口径9.7cm 器高4.75cm	名古屋市博物館蔵
33	E-10	壺の口縁部	口径14.2cm 残存高5.2cm	
34	E-12	甕の口縁部	口径38.0cm 残存高10.5cm	
35	E-1	甕の口縁部		
36	E-11	器台の杯部	口径30.2cm 残存高15.8cm	
37	E-8	器台の脚部		
38	E-4	器台の脚部		
39	E-5	器台の脚部		
40	E-2・7	器種不明	胴部最大径24.8cm 残存高5.5cm	
41	E-3	器種不明		

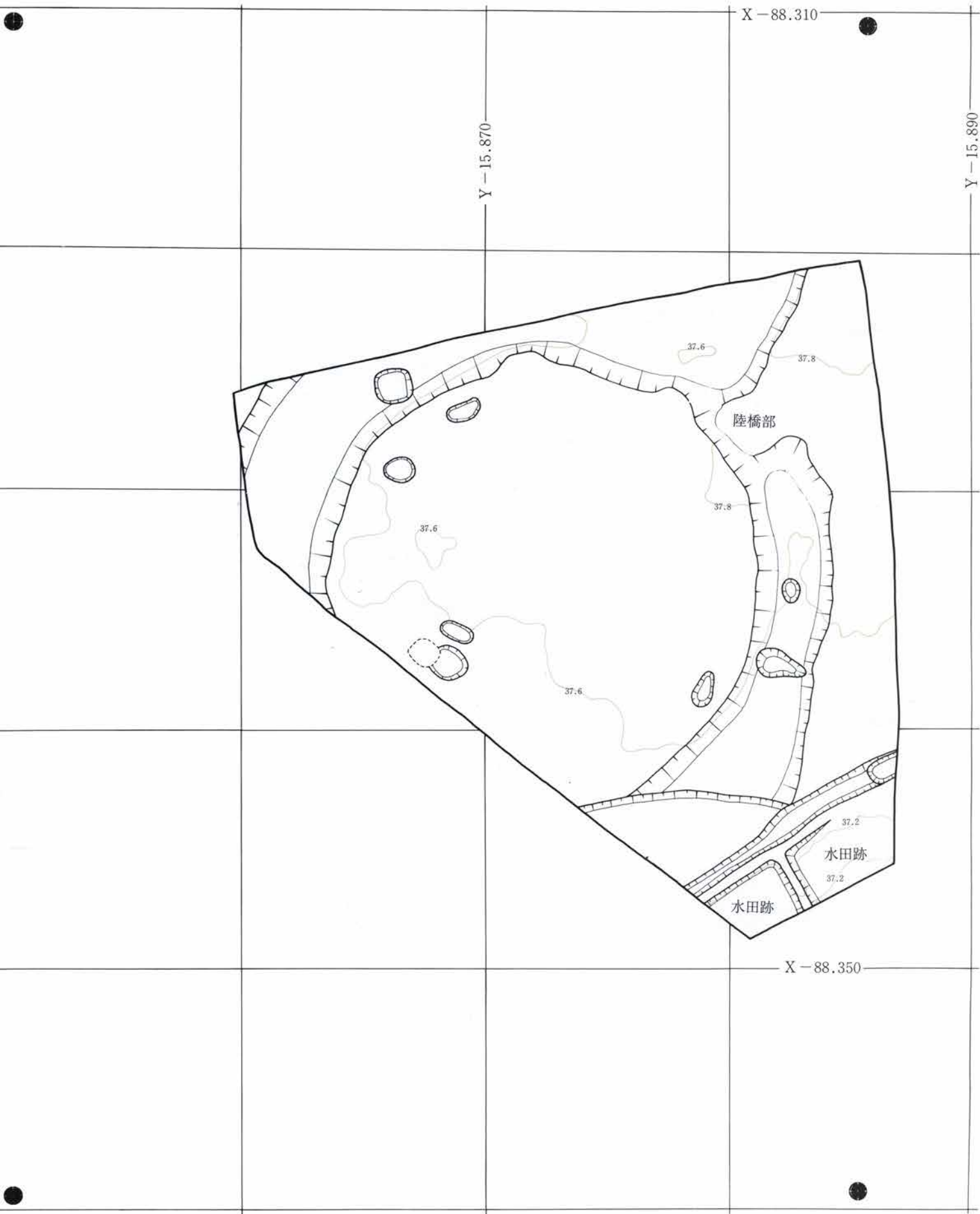
2. 埴輪

番号	登録番号	品種名	法量	備考
42	E-44	円筒形	口径26.0cm	
43	E-45	円筒形		円形透孔
44	E-46	円筒形	底径24.0cm	味美技法
45	E-47	朝顔形		
46	E-48	朝顔形		
47	E-49	蓋形・立飾部		刻線
48	E-50	蓋形・笠部		
49	E-51	円筒形		口縁部
50	E-52	円筒形		口縁部
51	E-53	円筒形		
52	E-54	円筒形		円形透孔
53	E-55	円筒形		底部・外面タタキ
54	E-56	円筒形		口縁部
55	E-57	円筒形		
56	E-58	円筒形		円形透孔
57	E-59	円筒形		
58	E-60	円筒形		底部・内面ケズリ 味美技法
59		朝顔形	口径48.0cm	名古屋市博物館蔵
60		円筒形	口径30.0cm 底径22.0cm 器高44.0cm	名古屋市博物館蔵
61		円筒形	口径30.0cm	名古屋市博物館蔵
62		円筒形	口径28.5cm 底径21.0cm 器高40.0cm	名古屋市博物館蔵
63		円筒形	底径20.5cm	名古屋市博物館蔵
64		円筒形	口径29.0cm	名古屋市博物館蔵
65		蓋形	口径9.5cm 底径22.0cm 器高49.0cm	名古屋市博物館蔵
66		蓋形		名古屋市博物館蔵
67		蓋形	底径25.0cm	名古屋市博物館蔵
68		円筒形		No.65拓影 名古屋市博物館蔵
69		朝顔形		外面タタキ 名古屋市博物館蔵
70		円筒形		味美技法 No.63底部底面 名古屋市博物館蔵

图版









長塚古墳

池下古墳

茶白山古墳

図版 4

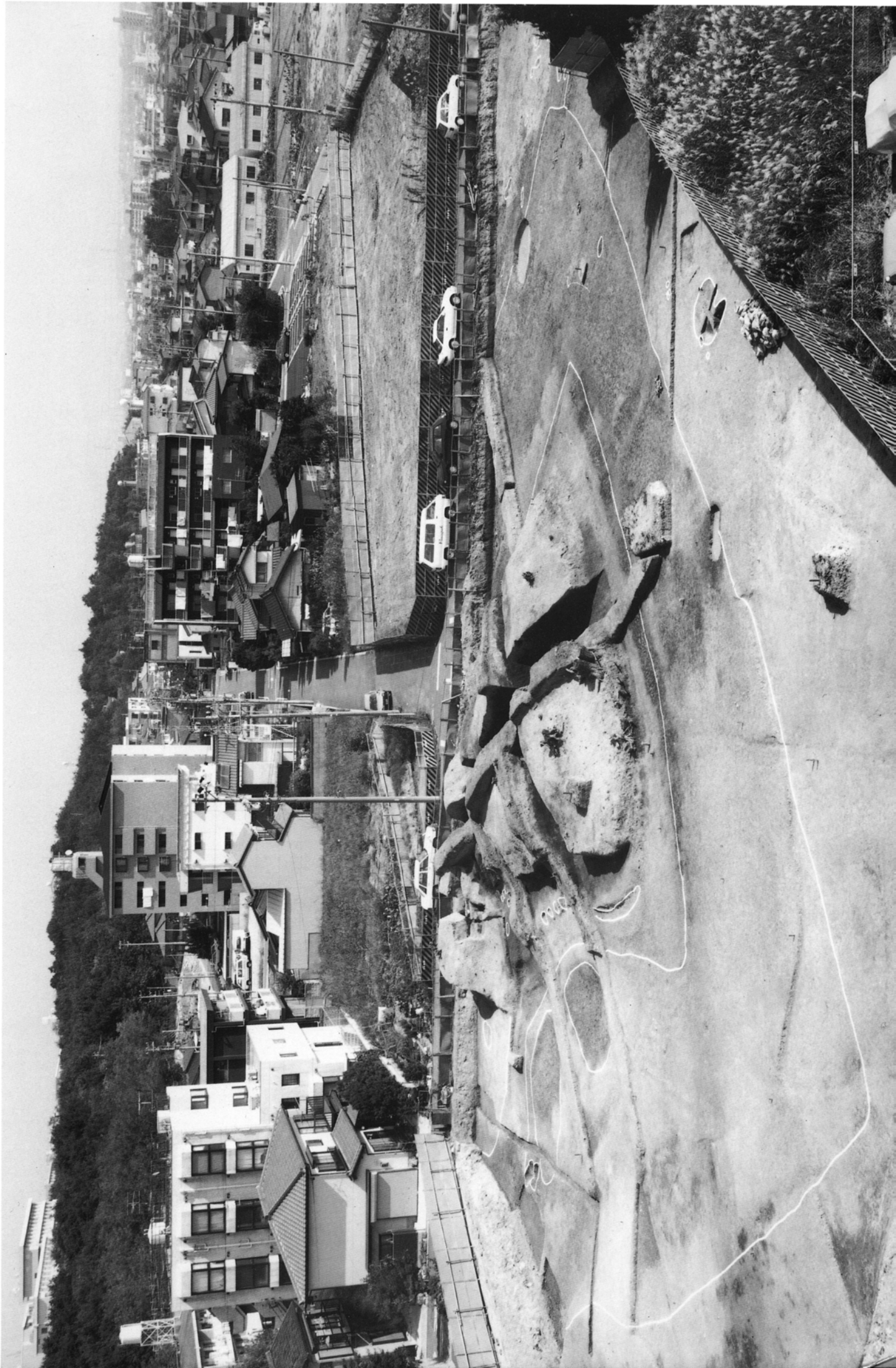


小幡古墳群全景



池下古墳
調査前状況
北西から (右) 池下古墳全景
西から

図版 5





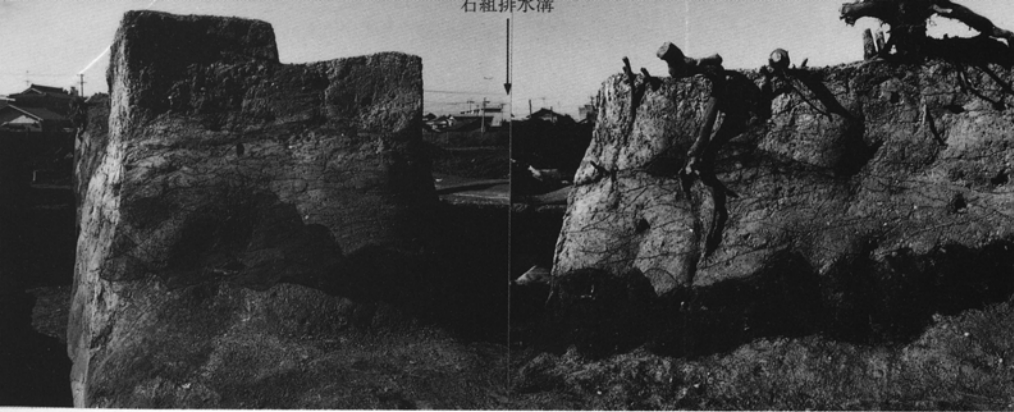
墳丘主軸土層堆積状況
南東から



前方部北側横断土層堆積状況
南西から



前方部南側横断土層堆積状況
南西から



後円部
墓道土層堆積状況
北東から



後円部
埋葬施設前庭部
西から



後円部
石組排水溝
東から



くびれ部造り出し
埴輪抜き取り穴
南東から



前方部
埴輪抜き取り穴
北西から



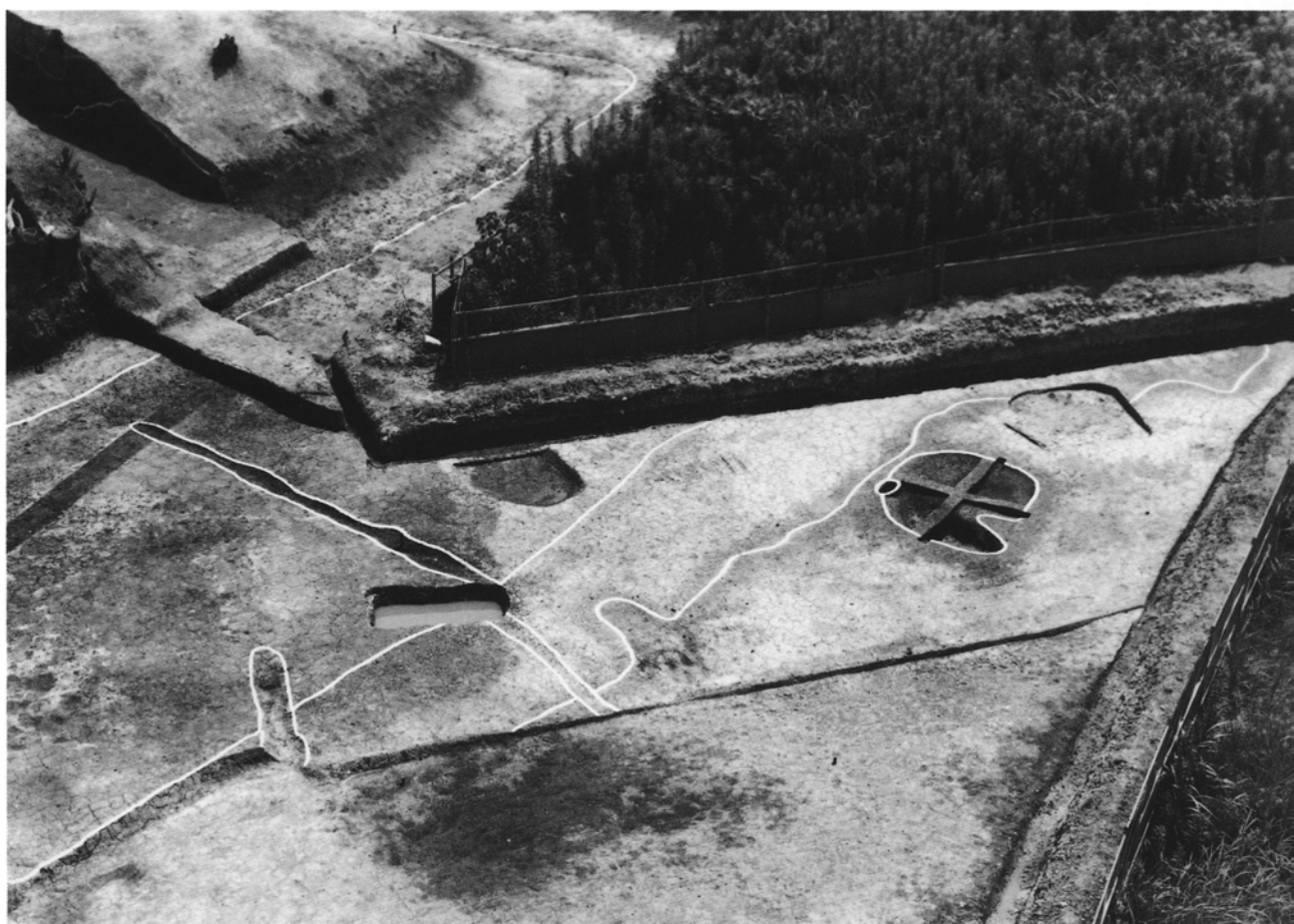
陸橋部 全景
北西から



陸橋部 近景
北西から



墳丘北側周濠内
近世遺構群
南西から



墳丘西側
近世遺構群



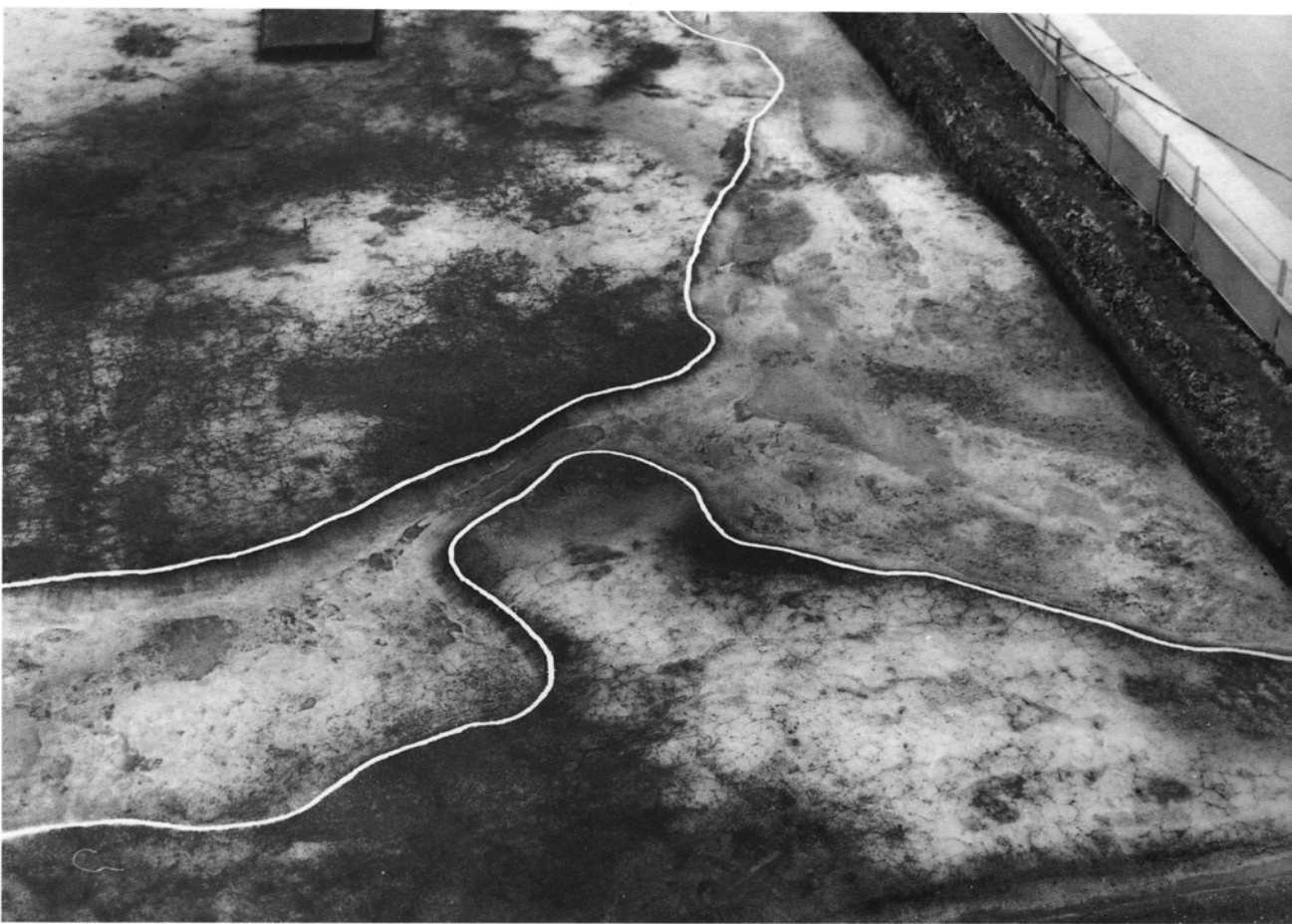
墳丘東側周濠
東から



墳丘南東側周濠
南東から



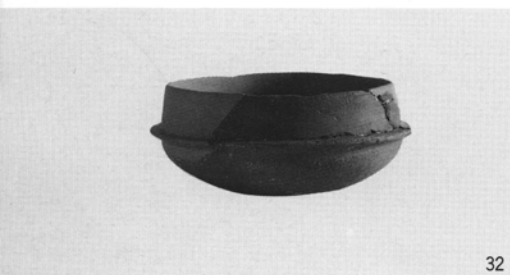
池下南古墳 全景
東から



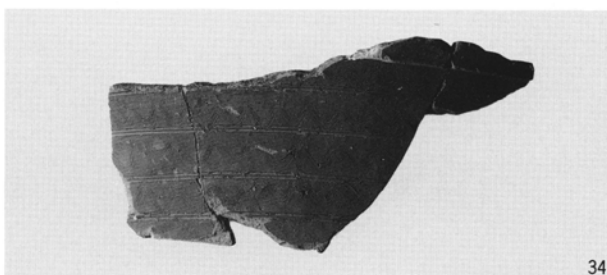
池下南古墳 陸橋部
東から



前方部北西隅
近世ビット群
南から



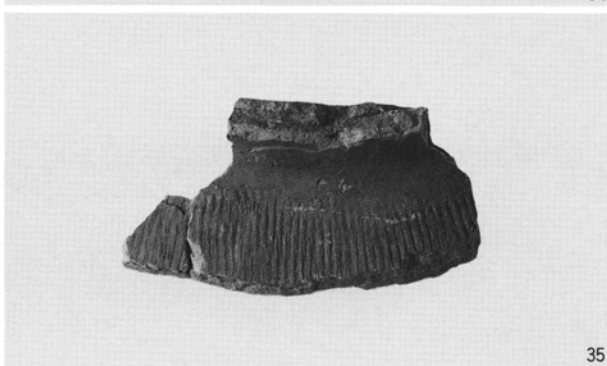
32



34



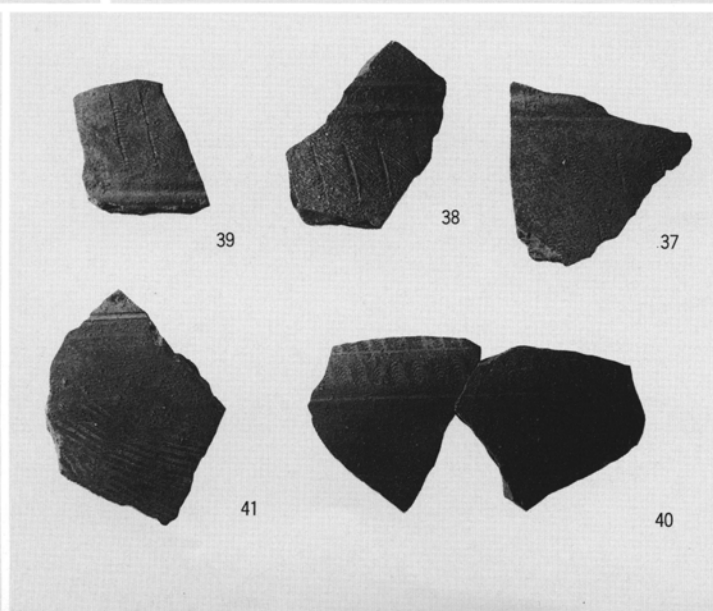
33



35



36



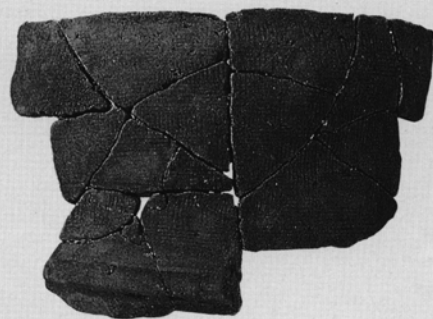
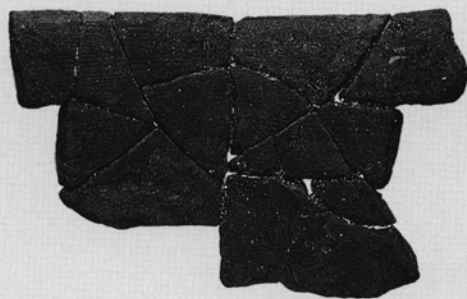
39

38

37

41

40



42



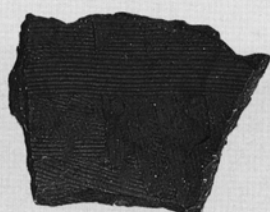
43



57



47



51



44



53

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第24集

池下古墳

平成3年3月31日

編集 財団法人
発行 愛知県埋蔵文化財センター

印刷 共同印刷株式会社